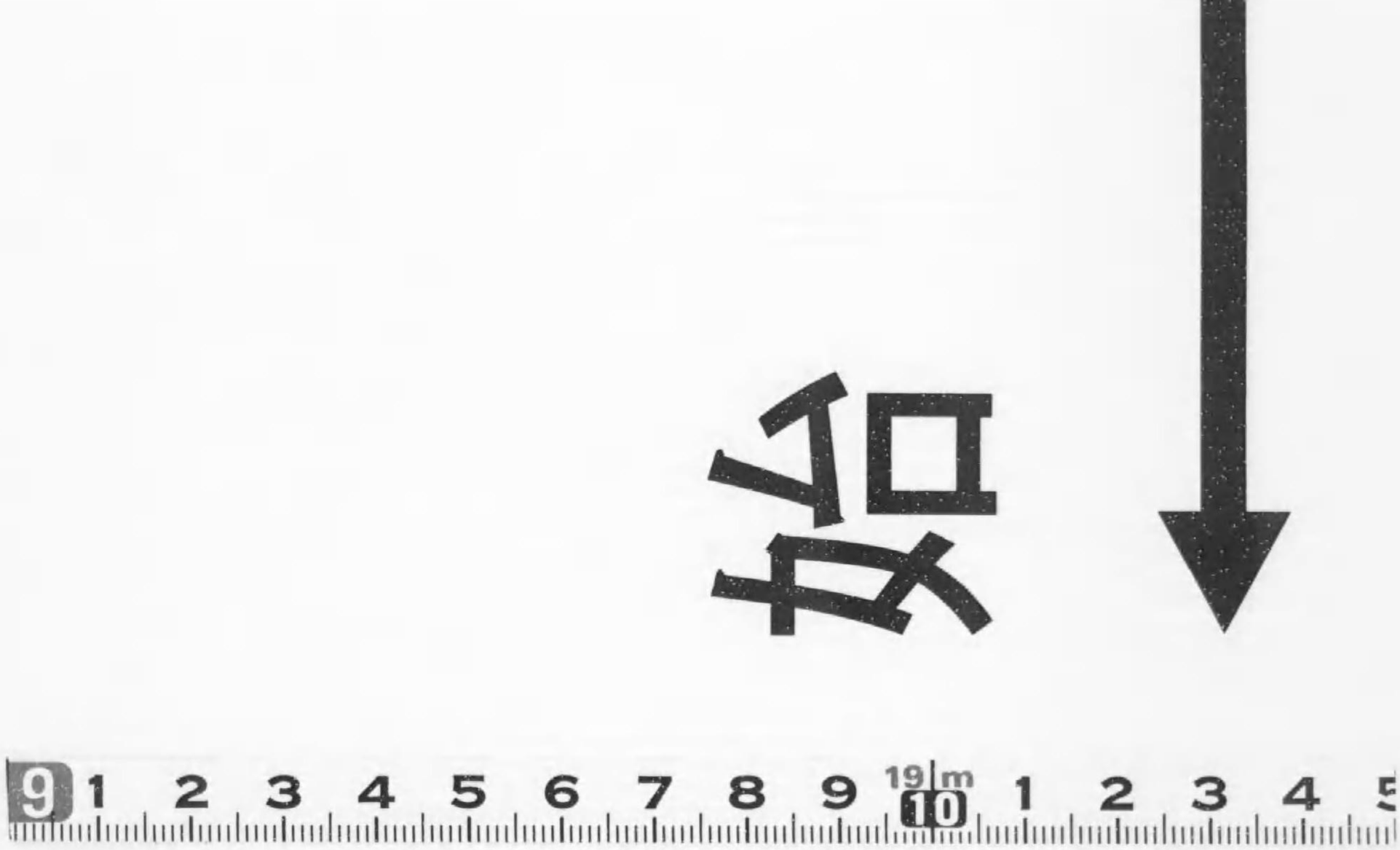


517
51

12949
517-57

宇治拾遺物語

全

大正
11. 11. 24
内交

緒言

宇治拾遺物語は其作者詳ならず、この書の成れるは順德天皇の建保年間にあり。序文には宇治大納言が今昔物語に漏れたる事どもを拾ひ集めたるを、後人また追加して成りたる由いへれど、全く信ずるに足らず。全篇百九十六段の記事中今昔と同じ話八十餘あり、又隆國薨後の事に屬するもの三十餘あり、今昔の遺漏を拾へるものにもあらず、隆國の作にもあらざること明なり。これらの考證について其詳細を知らんと欲する人は、故佐藤誠實博士の宇治拾遺物語考（史學雜誌第十編第二號）を見るべし。要するに作者の見聞、又は今昔物語、古事談等に據りて、種種の話說を次第もなく書き列ねたるものながら、文章眞率にして素朴愛すべく、同種類の書中最も勝れたるものなり。

今物語は藤原信實の著にして、主として其時代の歌物語を記す、此書もと數十卷ありきと見え、仁和寺書籍目錄には今物語廿七册存すとあり、されど今傳はるものは僅に一卷なり。信實は長良の裔從五位上皇后宮少進爲隆（寂超）の孫にして、繪畫に長け和歌をよくせし隆信の

子なり、信實官右京權大夫に至り、繪畫和歌共に名手たり、龜山天皇の文永二年十二月十六日歿す、年八十九。

東齋隨筆は一條禪閤兼良の作にして、音樂、人事、詩歌等の部類を分ちて、十訓抄、著聞集等の古書より抄錄收集して、一切自己の見聞を交へず。本朝にて隨筆の名を稱するは此書を初とす。兼良は關白藤原經嗣の第二子、文安三年太政大臣に拜せられ、翌年關白氏長者となり、文明十三年四月八十歳にて薨ず。博學多聞にして編著頗る多し。嘗て自ら謂ふ、われ嘗丞相に勝れるもの三あり、曰く攝家たり、曰く太政大臣たり、曰く延喜以後の事を暗んずと。

本集所收の宇治拾遺物語は萬治刊本を底本とし、古活字本（頭註活本と略稱す）古寫本（京都大學所藏）を以て對校し、そのよろしきに隨ひ、傍今昔物語、國史大系本、博文館本等を參照せり。今物語は天明六年の單行本に據り、群書類從本、文化十年版の木活字本を對校し、東齋隨筆は群書類從本に據れり。

大正四年二月

校訂者　藤井乙男

目錄

宇治拾遺物語

卷第一

道命阿闍梨和泉式部の許に於て讀經五條道祖神聽聞の事……一
丹波國篠村平茸生の事……三
鬼に瘤取らる事……四
伴大納言の事……一〇
隨求陀羅尼額に籠むる法師の事……一二
中納言師時法師の玉莖檢知の事……一三
龍門の聖鹿にかはらんとする事……一四
易のうらなひして金取り出したる事……一六
宇治殿倒れさせ給ひて實相房僧正驗者に召さるゝ事……一八
秦兼久通俊卿の許に向つて惡口の事……一九
源大納言雅俊一生不犯の金うたせたる事……二〇
兒のかいもちするに空寢したる事……二二
田舍の兒櫻の散るを見て泣く事……二三
小藤太聟におどされたる事……二四
大童子鮭ぬすみたる事……二五
尼地藏見たてまつる事……二七
修行者百鬼夜行に逢ふ事……二九
利仁薯蕷粥の事……三一

卷第二

清德聖さどくの事……四一
靜觀僧正雨を祈る法驗の事……四五
同僧正大嶽の岩祈り失ふ事……四六
金峯山箔打の事……四七
用經あらまきの事……四九
厚行死人を家より出す事……五四

鼻長き僧の事……五六
晴明藏人少將を封ずる事……六〇
季通殃に逢はんとする事……六二
袴垂保昌に逢ふ事……六六
明衡殃に逢はんとする事……六八
唐卒都婆に血つくる事……七二
業村强力の學士に逢ふ事……七五
柿木に佛現ずる事……八〇

卷第三

大太郎盜人の事……八一
藤大納言忠家物言ふ女放屁の事……八五
小式部内侍定賴卿の經にめでたる事……八六
山伏船祈りかへす事……八七
烏羽僧正國俊と戲るゝ事……八九
繪佛師良秀家の燒くるを見てよろこぶ事……九一
虎の鰐とりたる事……九二
樵夫歌の事……九五
伯の母の事……九六
同人佛事の事……九八
藤六の事……九九
多田新發意郎等の事……一〇〇
因幡國別當地藏作りさしたる事……一〇一
伏見修理大夫俊綱の事……一〇三
長門前司女葬送の時本處にかへる事……一〇六
雀恩を報ゆる事……一〇八
小野篁廣才の事……一一五
平貞文本院侍從等の事……一一六
一條攝政歌の事……一一九
狐家に火つくる事……一二〇

卷第四

狐人につきてしとぎ食ふ事……一二二
佐渡國にある金の事……一二三
藥師寺別當の事……一二四
妹背島の事……一二七
石橋の下の蛇の事……一二九
東北院菩提講聖の事……一三三
三河入道遁世世に聞ゆる事……一三五
進命婦清水まうでの事……一三七
業遠朝臣蘇生の事……一三九
篤昌忠恒等の事……一三九
後朱雀院丈六の佛作り奉り給ふ事……一四〇
式部大輔實重賀茂の御正體拜見の事……一四一
智海法印癩人と法談の事……一四二
白河院御寢の時物におそはれさせ給ふ事……一四三
永超僧都魚食ふ事……一四三
了延房に實因湖水の中より法文の事……一四四
慈惠僧正戒壇つきたる事……一四四

卷第五

四の宮河原地藏の事……一四六
伏見修理大夫の許へ殿上人ども行きむかふ事……一四七
以長物忌の事……一四八
範久阿闍梨西方を後にせざる事……一五一
陪從家綱兄弟互に謀りたる事……一五一
陪從清仲の事……一五四
假字暦あつらへたる事……一五五
實子にあらざる人實子のよししたる事……一五六
御室戸僧正の事並一乘僧正の事……一六一

或僧人の許にて氷魚ぬすみくひたる事……一六四
仲胤僧都地主權現說法の事……一六六
大二條殿に小式部内侍歌よみかけ奉る事……一六七
山横川賀能地藏の事……一六八

卷第六

廣貴妻の訴に依りて閻魔王宮へめさるゝ事……一七〇
世尊寺に死人を掘りいだす事……一七三
留志長者の事……一七五
清水寺に二千度參詣の者雙六にうち入るゝ事……一七七
觀音經蛇に化して人を助け給ふ事……一七八
賀茂の社より御幣紙米等たまふ事……一八三
信濃國筑摩の湯に觀音沐浴の事……一八五
鞨子叟孔子と問答の事……一八七
僧伽多羅刹の國に行く事……一八八

卷第七

五色鹿の事……一九六
播磨守爲家の侍佐多の事……二〇〇
三條中納言水飯の事……二〇四
檢非違使忠明の事……二〇六
長谷寺參籠の男利生にあづかる事……二〇六
小野宮大饗の事付西宮殿富小路大臣等大饗の事……二一五
式成源滿則員等三人瀧口の弓藝に召さるゝ事……二一九

卷第八

大膳大夫以長前駈問ふ事……二二〇
下野武正大風雨の日法性寺殿にまゐる事……二二三
信濃國聖の事……二二三
敏行朝臣の事……二二九
東大寺華嚴會の事……二三七
獵師佛を射る事……二三八
千手院僧正仙人に逢ふ事……二四一

卷第九

瀧口道則術を習ふ事……二四三
寶志和尚影の事……二四八
越前敦賀の女觀音助け給ふ事……二四九
くうすけが佛供養の事……二五八
恒政が郎等佛供養の事……二六三
歌詠みて罪を免るゝ事……二六六
大安寺別當の女に嫁する男夢見る事……二六八
博打聟入の事……二七〇

卷第十

伴大納言應天門を燒く事……二七三
放鷹樂明暹に是季がならふ事……二七七
堀河院明暹に笛ふかさせ給ふ事……二七七
淨藏が八坂坊に强盜入る事……二七九
播磨守佐大夫が事……二八〇
吾嬬人生贄を止むる事……二八二
豐前王の事……二八九
藏人頼死の事……二九〇
小槻當平の事……二九二
海賊發心出家の事……二九四

卷第十一

青常の事……三〇〇
保輔盜人たる事……三〇四
晴明を心みる僧の事付晴明蛙を殺

す事……三〇五
河内守頼信平忠恒をせむる事……三〇七
白河法皇北面受領の下ゐのまれの事……三一〇
藏人得業猿澤池の龍の事……三一二
清水寺御帳たまはる女の事……三一三
則光盗人をきる事……三一六
空入水したる僧の事……三二〇
日藏上人吉野山にて鬼に逢ふ事……三二二
丹後守保昌下向の時致經が父に逢ふ事……三二五
出家功德の事……三二六

卷第十二

逢磨天竺の僧行を見る事……三二九
提婆菩薩龍樹菩薩の許に參る事……三三〇
慈惠僧正受戒の日を延引の事……三三三
内記上人法師陰陽師の紙冠を破る事……三三四
持經者叡實効驗の事……三三五
空也上人の臂觀音院僧正祈りなほす事……三三七
增賀上人三條の宮に參り振舞の事……三三八
聖寶僧正大路をわたる事……三四〇
穀斷の聖不實露顯の事……三四二
季直少將歌の事……三四三
樵夫の小童隱題の歌よむ事……三四三
高忠の侍うたよむ事……三四四
貫之うたの事……三四六
東人うたの事……三四六
河原院に融公の靈住む事……三四七
八歳の童孔子と問答の事……三四八
鄭大尉の事……三四九
貧俗佛性を觀じて富める事……三四九
宗行の郎等虎を射る事……三五〇
遣唐使の子虎に食はるゝ事……三五四

或上達部中將の時召人に逢ふ事……三五五
陽成院妖物の事……三五八
水無瀨殿むさゝひの事……三五九
一條樓敷屋鬼の事……三六〇

卷第十三

上綾の主金を得る事……三六一
元輔落馬の事……三六四
利延迷神にあふ事……三六七
龜を買ひてはなす事……三六八
夢買ふ人の事……三七〇
大井光遠の妹强力の事……三七二
或唐人女の羊に生れたるを知らずして殺す事……三七四
出雲寺別當の鯰になりたるを知りながら殺して食ふ事……三七六
念佛の僧冥往生の事……三七九
慈覺大師穎穎城に入り給ふ事……三八二
渡天の僧穴に入る事……三八五
寂照上人鉢を飛ばす事……三八六
清瀧川聖の事……三八八
優婆崛多弟子の事……三九〇

卷第十四

海雲比丘弟子童の事……三九三
寛朝僧正勇力の事……三九六
經賴蛇に逢ふ事……三九八
魚養の事……四〇二
新羅國の后金の榻の事……四〇三
珠の價量りなき事……四〇四
北面の女雜使六の事……四一〇
仲胤僧都連歌の事……四一一
大將つゝしみの事……四一二
御堂關白の御犬晴明等きどくの事……四一四

宇治拾遺物語

高階俊平が弟入道算術の事……四一七

卷第十五

清見原天皇大友皇子と合戰の事……四二三
賴時が胡人見たる事……四二六
賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事……四二九
門部府生海賊射かへす事……四三〇
土佐の判官代通清人たがひして關白殿に逢ひ奉る事……四三二
極樂寺の僧仁王經の驗を施す事……四三三
伊良縁の世恒毘沙門御下文の事……四三六
相應和尙都卒天にのぼる事付染殿の后祈り奉る事……四三八
仁戒上人往生の事……四四一
秦始皇天竺より來たる僧禁獄の事……四四四
後の千金の事……四四五
盜跖孔子と問答の事……四四六

今物語

四五一——四九〇

東齋隨筆

四九一——五三四

音樂類……四九一
草木類……四九七
鳥獸類……五〇一
人事類……五〇五
詩歌類……五〇九
政道類……五一三
佛法類……五一四
神道類……五二三
禮儀類……五二五
好色類……五二八
興遊類……五三一

內容細目

五三五——五五〇

世に宇治大納言物語といふ物あり、此大納言は隆國といふ人なり、西宮殿高明也の孫俊賢大納言の第二の男なり、年たかうなりては、あつさをわびていとまを申して、五月より八月までは平等院一切經藏の南の山ぎはに南泉房といふ所にこもりゐられけり、さて宇治大納言とはきこえけり。もとどりをゆひわけてをかしげなる姿にて、むしろを板にしきてすどみゐはべりて、大なるうちはをもてあふがせなどして、往來の者たかきいやしきをいはずよびあつめ、むかし物語をせさせて、我はうちにそひふして、かたるにしたがひておほきなる双紙にかゝれけり。天竺のこともあり、大唐のこともあり、日本のこともあり、それがうちにたふときこともあり、あはれなる事もあり、きたなき事もあり、少々はそら物語もあり、利口なることもあり、さまゞ〳〵樣々なり。世の人これをけうじ見る、十五帖なり。その正本はつたはりて、侍從俊貞といひし人のもとにぞありける。いかになりにけるにか、後にさかしき人々かきいれたるあひだ、物語おほくなれり、大納言よりのちの事かき入れたる本もあるにこそ、さるほどに今の世に又物がたりかきいれたるいできたれり、大納言

の物語にもれたるをひろひあつめ、またその後の事などかきあつめたるなるべし、名を宇治拾遺の物語といふ。宇治にのこれるをひろふとつけたるにや、又侍從を拾遺といへば宇治拾遺物語といへるにや、差別しりがたし、おほつかなし。

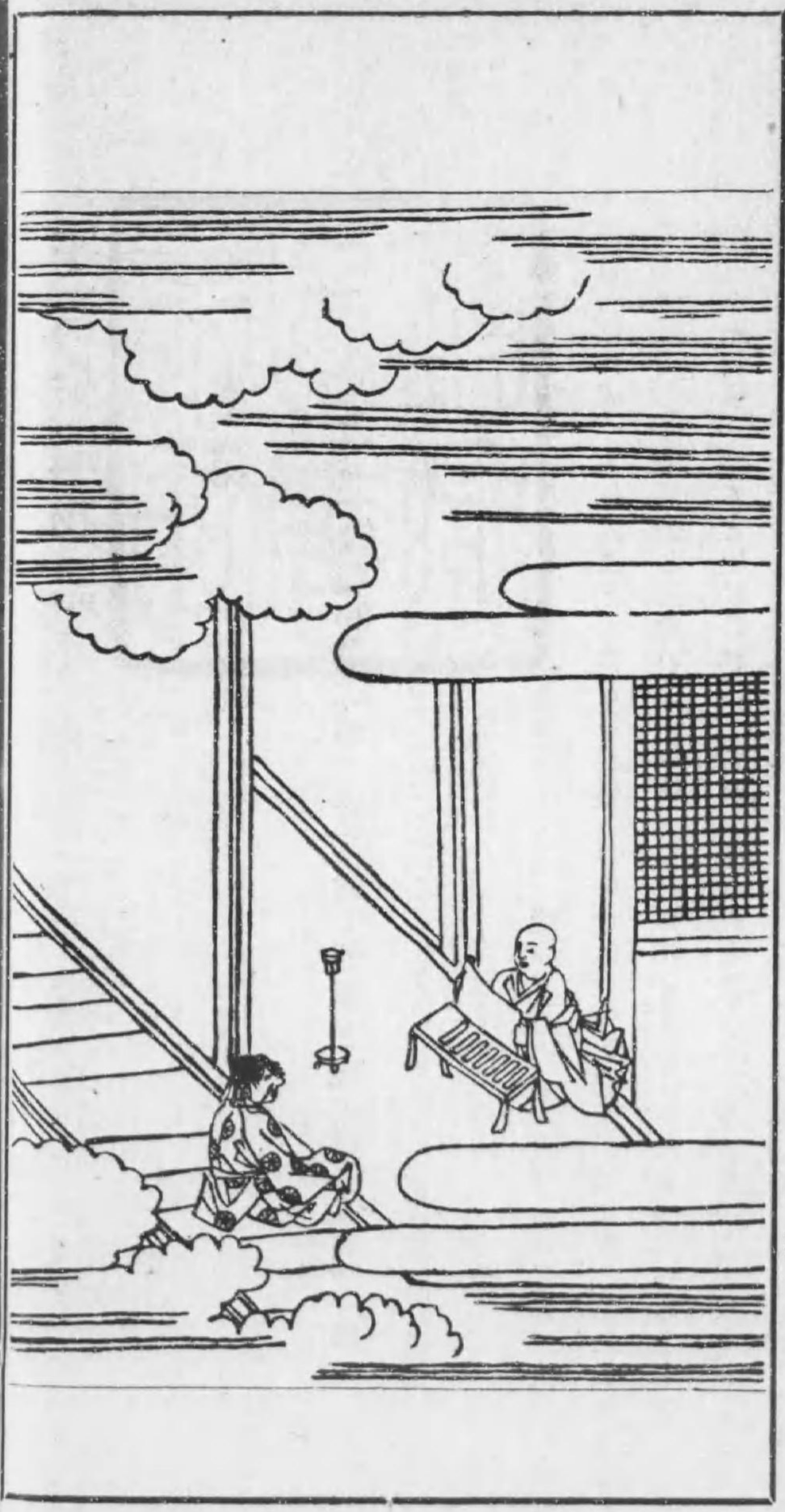
宇治拾遺物語

○此話古事談卷三及び東齋隨筆好色部に出づ傳殿―東宮の傅藤原道綱

卷第一

道命阿闍梨和泉式部の許に於て讀經五條道祖神聽聞の事

今は昔、道命阿闍梨とて、傳殿の子に色にふけりたる僧ありけり。和泉式部に通ひけり。經をめでたく讀みけり。それが和泉式部がり行きて臥したりけるに、目覺めて、經を心をすまして讀みけるほどに、八巻讀みはてて、曉にまどろまんとするほどに、人のけはひのしければ、あれは誰ぞと問ひければ、おのれは五條西洞院の邊に候ふ翁に候ふと答へければ、こは何事ぞと道命いひければ、この御經を今宵うけたまはりぬることの、生世々忘れ難く候ふといひければ、道命、法華經を讀み奉る事は常のことなり、など今



五條の齋―いはゆる道祖神（サヘノカミ）なり

さは―一本なし

四威儀―行住坐臥をいふ

惠心―慈惠僧正の弟子源信

平茸―茸の一種

おつかみ―髪の五六分のびたるをいふにや、此語義經記にも見ゆ

宵しもいはるゝぞといひければ、五條の齋いはく、清くて讀みまゐらせ給ふ時は、梵天帝釋を始め奉りて聽聞せさせ給へば、翁などは近づきまゐりて承るに及び候はず、今宵は御行水も候はで讀み奉らせ給へば、梵天帝釋も御聽聞候はぬひまにて、翁まゐりよりて、承りて候ひぬることの忘れ難く候ふなりとの給ひけり。さればはかなくさは讀み奉るとも、清くて讀み奉るべきことなり。念佛、讀經、四威儀を破ることなかれと、惠心の御房も誡め給ふにこそ。

丹波國篠村平茸生の事

これも今は昔、丹波國篠村といふ所に、年比平茸やるかたもなく多かりけり。里村の者これを取りて、人にもこゝろざし、またわれも喰ひなどして年比過ぐるほどに、その里にとりて主とある者の夢に、頭おつかみなる法師どもの二三十人ばかり出で來て、申すべき事の候ふといひければ、いかなる人ぞと問ふに、この法師ばらは、この年比も宮仕よ

くして候ひつるが、この里の緣盡きて、今は他所へ罷り候ひなんずることの、且は哀にも候ふ、又事の由を申さではと思ひて、このよしを申すなりといふと見て、うち驚きて、こは何事ぞと妻や子やなどに語る程に、又その里の人の夢にも、この定に見えたりとて、數多同樣にかたれば、心も得で年も暮れぬ。さて次の年の九十月にもなりぬるに、さきざき出で來る程なれば、山に入りて茸を覓むるに、すべて蔬大方見えず、いかなることにかと、里國の者おもひて過ぐるほどに、故仲胤僧都とて、說法ならびなき人いましけり。この事を聞きて、こはいかに不淨說法する法師、平茸にうまるといふことのあるものをと、のたまひてけり。さればいかにも〳〵、平茸は喰はざらんに事缺くまじきものとぞ。

蔬―クサビラと讀むべし

不淨說法―肉食女犯の身にて人に說法すること

鬼に瘤取らるゝ事

これも今は昔、右の顏に大なる瘤ある翁ありけり。大かう山へ行きぬ。雨風はしたなく

大かう―一本「大よそ」とあり、

て歸るに及ばで、山の中に心にもあらずとまりぬ、又樵夫もなかりけり。おそろしさすべきかたなし。木の空虛のありけるに匐ひ入りて、目も合はず屈まりて居たる程に、遙より人の聲多くして、とどめき來るおとす。いかにも山の中に唯ひとり居たるに、人のけはひのしければ、少しいき出づる心地して見出しければ、大方やう〳〵さま〴〵なるものども、赤き色には青き物を著、黑き色には赤き物を著、たふさぎにかき、大かた目ひとつあるものあり、口なきものなど、大方いかにも言ふべきにあらぬものども、百人ばかりひしめき集りて、火をてんの目の如くに燈して、我居たる空虛木の前にゐまはりぬ。大方いとど物おぼえず、主とあると見ゆる鬼横座に居たり。うらうへに、二列に居竝みたる鬼數を知らず、そのすがたおの〳〵いひ盡し難し。酒まゐらせ遊ぶありさま、この世の人のする定なり。度々土器はじまりて、むねとの鬼殊の外に醉ひたるさまなり。末より若き鬼一人立ちて、折敷をかざして、何といふにかくどきくせゝることをいひて、横座の鬼の前にねり出でてくどくめり。横座の鬼、盃を左の手に持ちてゐみこだれたる

又別本に「大かうと(柑子)程なり人にまじるに及ばねば薪をとりて世を過ぐる程に」とあり

とゞめき―どやどやいふ

たふさぎ―犢鼻褌

てんの目―天の目又は貂の目なるべし

うらうへ―左右

くどきく―くどきくどきの誤か、或は口說き具せざるにて言ふ事のわかちぬ意にや

せゝる―一本「せざる」とあり

ゐみこだれ―笑み傾く

恐しく舞ふもあり―原本「舞ふもあり」の五字なし

かなで―舞ひかなでること となり、珍しき踊をせよと所望するなり

よき―斧

すぢりもぢり―身をねぢまぐること

あざみ―感歎すること

をさめの手―祓殿の鼠の手

さま、唯この世の人の如し。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。悪しく舞ふもあり、善く舞ふもあり。あさましと見る程に、この横座に居たる鬼のいふやう、今宵の御遊こそいつにも勝れたれ、たゞしさもめづらしからんかなでを見ばやなどいふに、この翁物のつきたりけるにや、又神佛の思はせ給ひけるにや、あはれ走り出でて舞はゞやと思ふを、一度は思ひ返しつ。それに何となく、鬼どもが打ち揚げたる拍子のよげに聞えければ、さもあれ、たゞ走り出でて舞ひてん、死なばさてありなんと思ひ取りて、木の空虚より、烏帽子は鼻に垂れかけたる翁の腰に、よきといふ木切るものさして、横座の鬼の居たる前に躍り出でたり。この鬼ども躍り上りて、こは何ぞと騒ぎあへり。翁伸びあがり屈まりて、舞ふべきかぎり、すぢりもぢり、えいごゑを出して一庭を走り廻り舞ふ。横座の鬼より始めて、集り居たる鬼どもあざみ興ず。横座の鬼のいはく、多くの年比この遊をしつれども、いまだかゝるものにこそ逢はざりつれ、今よりこの翁、かやうの御遊に必ずまゐれといふ。翁申すやう、沙汰に及び候はずまゐり候ふべし、このたび俄にて、を

さめの手も忘れ候ひにたり、かやうに御覽にかなひ候はど、靜に仕うまつり候はんといふ。横座の鬼、いみじう申したり必ず參るべきなりといふ。奥の座の三番に居たる鬼、此翁はかくは申し候へども、參らぬ事も候はんずらんとおぼえ候ふ、質をや取らるべく候ふらんといふ。横座の鬼、しかるべし〳〵といひて、何をか取るべきと、おの〳〵言ひ沙汰するに、横座の鬼のいふやう、かの翁が面にある瘤をやとるべき、瘤は福の物なれば、それをや惜み思ふらんといふに、翁がいふやう、唯目鼻をばめすとも、この瘤はゆるし給ひ候はん、年比持ちて候ふ物を、故なくめされ、すぢなき事に候ひなんといへば、横座の鬼、かう惜み申すものなり、唯それを取るべしといへば、鬼よりて、さは取るぞとて、捻ぢて引くに大方痛きことなし。さて必ずこの度の御遊に參るべしとて、曉に鳥など鳴きぬれば、鬼どもかへりぬ。翁顔をさぐるに、年比ありし瘤跡形なく、搔い拭ひたるやうにつや〳〵なかりければ、樵らん事も忘れて家に歸りぬ。妻のうば、こはいかなりつる事ぞと問へば、云々とかたる。あさましき事かなといふ。隣にある翁、左の顔に大な

候はんずらんと―原本との字なし

瘤は福の物―諺

すぢなき事―せんかたなき事

る瘤ありけるが、この翁瘤の失せたるを見て、こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ、何處なる醫師の取り申したるぞ、我に傳へ給へ、この瘤取らんといひければ、これは醫師の取りたるにもあらず、云々の事ありて鬼の取りたるなりといひければ、我その定にして取らんとて、事の次第を細に問ひければ教へつ。この翁いふまゝにして、その木の空虚に入りて待ちければ、誠に聞くやうにして鬼ども出で來たり。居まはりて、酒呑み遊びて、いづら翁は參りたるかといひければ、この翁、恐しと思ひながらゆるぎ出でたれば、鬼ども此所に翁參りて候ふと申せば、横座の鬼、こち參れ疾く舞へといへば、前の翁よりは、天骨もなく、おろ〳〵かなでたりければ、横座の鬼、この度はわろく舞ひたり、かへす〳〵わろし、その取りたりし質の瘤返したべといひければ、末つ方より鬼出で來て、質の瘤返したぶぞとて、今片方の顔に擲げつけたりければ、うらうへに瘤附きたる翁にこそなりたりけれ、物羨はせまじき事なりとか。

天骨もなく―無器用に

返したぶぞ―返し給ふぞ

○伴大納言の事　三代實錄江談抄古事談等に見ゆ

あはする—妻を判斷する

わらふだ—圓座

犯罪—應天門を燒きて罪をえし事十卷に見ゆ

伴大納言の事

これも今は昔、伴の大納言善男は、佐渡國の郡司が從者なり。彼の國にて善男夢に見るやう、西大寺と東大寺とを跨げて立ちたりと見て、妻の女にこのよしをかたる。妻のいはく、そこの股こそ裂かれんずらめとあはするに、善男驚きて、よしなき事を語りてけるかなと恐れ思ひて、主の郡司が家へ行き向ふ所に、郡司極めたる相人なりけるが、日比はさもせぬに、殊の外に饗應して、わらふだとりいで、對ひて召しのぼせければ、善男あやしみをなして、我をすかしのぼせて、妻のいひつるやうに、股などさかんずるやらんと懼れ思ふほどに、郡司がいはく、汝やんごとなき高相の夢見てけり、それによしなき人にかたりてけり、必ず大位には至るとも、事出で來て罪を蒙らんぞといふ。しかる間善男緣に附きて、上京して大納言に至る。されども犯罪をかうぶる、郡司が詞にたがはず。

御嶽—金峰山

齋料—山に籠りて齋戒する間の資料

隨求陀羅尼額に籠むる法師の事

これも今は昔、人のもとに、ゆゑしくことぐしく斧負ひ、法螺貝腰につけ、錫杖つきなどしたる山伏の、ことぐしげなる入り來て、侍の立蔀の内の小庭に立ちけるを、侍、あれはいかなる御房ぞと問ひければ、これは日比白山に侍りつるが御嶽へ參りて、今二千日候はんと仕り候ひつるが、齋料盡きて侍り、まかり預らんと申し上げ給へといひて立てり。見れば、額眉の間のほどに、髮際によりて二寸ばかり疵あり、いまだ生癒にて赤みたり。侍問うていふやう、その額の疵は如何なる事ぞと問ふ。山伏いとたふとくしく聲をなしていふやう、これは隨求陀羅尼をこめたるぞと答ふ。侍のものども、ゆゑしき事にこそ侍れ、足手の指など斬りたるは數多見ゆれども、額破れて陀羅尼こめたるこそ見るとも覺えねといひあひたる程に、十七八ばかりなる小侍の、ふと走り出でうち見て、あなかたはらいたの法師や、なんでふ隨求陀羅尼をこめんずるぞ、あれは七條町に、江

おほひんがし―正東
いもじ―鑄物師にて典鑄司の官人をいふ
さひづる―和名抄に「農耕具鑄(佐比那恵)鋤屬也」とあり
まのし―とぼけたるやうにて顔を伸す意なるべし
不動袈裟―修驗者の頸よりかくるもの、即ち輪袈裟
せんずる所―所詮

冠者が家の、おほひんがしにあるいもじが妻を、密々に入り臥しくせしほどに、去年の夏入りふしたりけるに、男のいもじ歸りあひたりければ、取るものも取りあへず、逃げて西へ走る。冠者が家の前ほどにて、追ひつめられて、さひづるして額を打ち割られたりしぞかし。冠者も見しはといふを、あさましと人ども聞きて、山伏が顔を見れば、少しも事と思ひたる氣色もせず、少しまのしたるやうにて、その次にこめたるぞと、つれなう言ひたる時に、集れる人ども、一度にはと笑ひたるまぎれに、逃げて去にけり。

中納言師時法師の玉莖檢知の事

これも今は昔、中納言師時といふ人おはしけり。その御許に、殊の外に色黑き墨染の衣の短きに、不動袈裟といふ袈裟かけて、木練子の念珠の大なる、繰りさげたる聖法師入り來て立てり。中納言、あれは何する僧ぞと尋ねらるゝに、殊の外に聲をあはれげになして、假の世にはかなく候ふを忍びがたくて、無始よりこのかた、生死に流轉するは、せんずる所煩惱にひかへられて、今にかくてうき世を出でやらぬにこそ、これを無益なりと思ひとりて、煩惱を切り捨てて、偏にこのたび生死のさかひを出でなんと、思ひ取りたる聖人に候ふといふ。中納言、さて煩惱を切り捨つとはいかにと問ひ給へば、くはこれを御覽ぜよといひて、衣の前を搔き上げて見すれば、誠にまめやかのは無くてひげばかりあり。こは不思議のことかなと見給ふほどに、下にさがりたる袋の殊の外に覺えて、人やあると呼び給へば、侍二三人出で來たり。中納言、その法師ひきはれとの給へば聖まのしをして、阿彌陀佛申して、疾く〳〵如何にもしたまへといひて、哀げなる顏氣色をして、足をうち廣げておろねぶりたるを、中納言、足を引き廣げよとの給へば、二三人寄りて引き廣げつ。さて小侍の十二三計なるがあるを召し出でて、あの法師の股の上を、手を廣げて上げ下しさすれとの給へば、そのまゝにふくらかなる手して上げ下しさする。とばかりある程に、この聖まのしをして、今はさておはせといひけるを、中納言、善げになりにたり、たどさすれ、それ〳〵とありければ、聖、さまあしく候ふ、今は

くは―「こは」といふに同じ
下にさがりたる袋―陰囊のことなり
おろねぶり―微睡
とばかり―暫時

そこち―許多
そくひ―續飯

さてといふを、あやにくぞさすり伏せける程に、毛の中より松茸の大きやかなるものの、ふら〳〵と出で來て、腹にすは〳〵と打ちつけたり。中納言を始めて、そこら集ひたるものども諸聲に笑ふ。聖も手を打ちて、臥しまろび笑ひけり。早うまめやかものを、下の袋へひねり入れて、そくひにて毛を取りつけて、さりげなくして人を謀りて、物を乞はんとしたりけるなり。枉惑の法師にてありける。

○此話古事談三に出づ
龍門―吉野郡にあり

龍門の聖鹿にかはらんとする事

大和國に、龍門といふ所に聖ありけり。住みける所を名にて、龍門の聖とぞいひける。その聖の親しく知りたりける男の、明暮鹿を殺しけるに、照射といふことをしけるころ、いみじう暗かりける夜、照射に出でにけり。鹿を覓めありくほどに、目を合せたりければ、鹿ありけりとて、押しまはし〳〵するに、たしかに目を合せたり。矢比にまはしよりて、火串に引き懸けて、矢をはげて射んとて弓ふりたて見るに、この鹿の目のあひの、

押しまはし―松火をふりまはすなり

例の鹿の目のあはひよりも近くて、目の色も變りたれば、怪しと思ひて、弓を引きさしてよく見けるに、猶怪しかりければ、矢をはづして、火を取りて見るに、鹿の目にはあらぬなりけりと見て、起きば起きよと思ひて、近くまばし寄せて見れば、身は一ちやうの皮にてあり、猶鹿なりとて、又射んとするに、猶目のあらざりければ、たどうちに打ち寄せて見るに、法師の頭に見做しつ。こはいかにと見て、おり走りて火うち吹きてしひをりとて見れば、この聖の目うちたゝきて、鹿の皮をひき被きて添ひふし給へり。こはいかにかくてはおはしますぞといへば、ほろ〳〵と泣きて、わぬしが制することを聞かず、いたくこの鹿をころす、われ鹿に代りて殺されなば、さりとも少しは留まりなんと思へば、かくて射られんとして居るなり。くちをしう射ざりつとの給ふに、この男伏しまろび泣きて、かくまで思しける事を、あながちにし侍りける事とて、そこにて刀を抜きて弓うち切り、箙皆折り挫きて髻切りて、やがて聖に具して法師になりて、聖のおはしけるかぎり聖に使はれて、聖うせ給ひければ、代りて又そこにぞ行ひて居たりけ

一ちやう―一張か

しひをりとて―「鹿居りとて」の誤か、博文館本には「火をとりて」とあり

るとなん。

易のうらなひして金取り出したる事

旅人の宿覓めけるに、大きやかなる家のあばれたるがありけるによりて、こゝに宿し給ひてんやといへば、女聲にて、善きこと宿り給へといへば、皆おり居にけり。屋大きなれども人のありげもなし、たゞ女一人ぞあるけはひしける。かくて夜明けにければ、物喰ひ認めて出でて行くを、この家にある女出で來て、え出でおはせじ、留り給へといふ。こはいかにと問へば、おのれが金千兩負ひ給へり、そのわきまへしてこそ出で給はめといへば、この旅人の從者共笑ひて、あらしやさんなめりといへば、この旅人暫しといひて、又おり居て、皮子を乞ひ寄せて、幕ひきめぐらして、暫時ばかりありて、この女を呼びければ出で來にけり。旅人問ふやうは、この親は、若し易の占といふことやせられしと問へば、いささや侍りけん、そのし給ふやうなる事はし給ひきといへば、さるなるといひて、さても何事にて千兩金負ひたる、その辨明せよとはいふぞと問へば、おのれが親のうせ侍りし折に、世の中にあるべき程の者など、得させ置きて申しょやう、今なん十年ありてその月に、こゝに旅人來て宿らんとす、其人は我金を千兩負ひたる人なり、それにその金を乞ひて、堪へ難からん折は、賣りて過ぎよと申しょかば、今までは親の得させて侍りしものを、少しづつも賣り使ひて、今年となりては賣るべき物も侍らぬまゝに、いつしか我親の言ひし月日の疾く來かしと待ち侍りつるに、今日に當りておはして宿り給へれば、金負ひ給へる人なりと思ひて申すなりといへば、金の事はまことなり、さることあるらんとて、女を片隅に引きて行きて、人にも知らせで柱を叩かすれば、空虛なる聲のする所を、くはこれが中にの給ふ金はあるぞ、開けて少しづつ取り出でて使ひ給へと、教へて出でいにけり。この女の親の易の占の上手にて、この女の有樣を考へけるに、今十年ありて貧しくならんとす。その月日易の占する男、來て宿らんずると考へて、かゝる金あると告げては、まだしきに取り出でて、使ひ失ひては貧しくならん

○此話晉書藝術傳に見えたる隗炤の故事に基く
あばれたる―荒廢せること
わきまへ―辨償
あらしやさんなめり―あらは驚歎の詞、しやは嘲詞、「さんなめり」は「さあるなめり」の意
さるなる―一本「さりなむ」とあり
くは―感詞
まだしきに―いまだ時到らざるに

程に、使ふ物なくて惑ひなんと思ひて、しか言ひ教へ死にける後にも、この家をも失はずして、今日を待ちつけて、この人をかく責めければ、これも易の占するものにて、心を得て占ひ出して、教へ出でて往にけるなりけり。易のうらかたは、行末を掌のやうにさして、知ることにてありけるなり。

宇治殿倒れさせ給ひて實相房僧正驗者に召さるゝ事

宇治殿―頼通
心譽僧正―三井寺の長吏、藤原重輔の男
目見入れ―物の怪が見入れし也
護法―法のために使役せらるゝ鬼神
いみじかりぬる事―殊勝なる事

これも今は昔、高陽院造らるゝ間、宇治殿御騎馬にて渡らせ給ふ間、倒れさせ給ひて、心地違はせ給ふ。心譽僧正に祈られんとて、召しにつかはす程に、いまだ參らざるさきに、女房の局なる小女に物つきて申していはく、別の事にあらず、きと目見入れ奉るによりてかくおはしますなり。僧正參られざるさきに、護法先立ちて參りて、追ひはらひさぶらへば、逃げ終りぬとこそ申しけれ。即ちよくならせ給ひにけり。心譽僧正いみじかりぬる事。

通俊―中納言經平の子
兼久―袋草紙、金葉集等には兼方とあり
圓宗寺―本名圓明寺、後三條帝の御願所
いとしもなき―あまりよくもなき
四條の大納言―藤原公任

秦兼久通俊卿の許に向つて惡口の事

これも今は昔、治部卿通俊卿後拾遺を撰ばれける時、秦兼久行き向ひて、おのづから歌などや入ると思ひて伺ひけるに、治部卿出でゐて物がたりして、如何なる歌か詠みたるといはれければ、はかゞしき歌候はず、後三條院隱れさせ給ひて後、圓宗寺に參りて候ひしに、花のにほひは昔に變らず侍りしかば、つかうまつりて候ひしなりとて、

去年見しに色もかはらず咲きにけり花こそものは思はざりけれ

とこそ仕りて候ひしかといひければ、通俊卿よろしく詠みたり、但しけれ、けり、けるなどいふことはいとしもなき詞なり、それはさることにて、花こそといふ文字こそ、女の童などの名にしつべけれとて、いとも譽められざりければ、言葉ずくなにて立ちて、侍どもありける所によりて、この殿は、大かた歌の有樣知り給はぬにこそ、かゝる人の撰集うけ給はりておはするは、あさましきことかな、四條の大納言の歌に、

春來てぞ人も問ひける山里は花こそやどのあるじなりけれ

と詠み給へるはめでたき歌とて、世の人口にのりて申すめるは、その歌に人もとひけるとあり、又宿の主人なりけれとあめるは、花こそといひたるは、それには同じさまなるに、いかなれば四條大納言のはめでたく、兼久のはわろかるべきぞ、かゝる人の撰集う け給はりて撰び給ふ、あさましき事なりと言ひて出でにけり。侍通俊の許へ行きて、兼久こそかう〳〵申して出でぬれと語りければ、治部卿うちうなづきて、さりけり〳〵、物ないひそとぞいはれける。

源大納言雅俊一生不犯の金うたせたる事

これも今は昔、京極の源大納言雅俊といふ人おはしけり。佛事をせられけるに、佛前にて僧に鐘を打たせて、一生不犯なるを撰びて講を行はれけるに、ある僧の禮盤に登りて、少し顏氣色違ひたるやうになりて、鐘木を取りてふりまはして、うちもやらで暫時ばかりありければ、大納言いかにと思はれける程に、やゝ久しく物もいはでありければ、人ども覺束なく思ひけるほどに、この僧わなゝきたる聲にて、かはつるみはいかゞ候ふべきといひたるに、諸人頤を放ちて笑ひたるに、一人の侍ありて、かはつるみはいくつばかりにて候ひしぞと問ひたるに、この僧頸を捻りて、きと昨夜もして候ひきと言ふに、大かたどよみあへり。そのまぎれに早う逃げにけりとぞ。

雅俊―右大臣顯房公の男、母は美濃守良任の女

かはつるみ―雜姦とも手淫ともいへり

いくつばかり―一本「いつばかり」とあり

兒のかいもちするに空寢したる事

これも今は昔、比叡の山に兒ありけり。僧たち宵の徒然に、いざかいもちひせんといひけるを、この兒心よせに聞きけり。さりとてし出さんを待ちて寢ざらんも、わろかりなんと思ひて、片方によりて、寢たるよしにて出來るを待ちけるに、既にし出したるさまにてひしめきあひたり。この兒定めて、驚かさんずらんと待ち居たるに、僧の物申しさぶらはん、驚かせ給へといふを、嬉しとは思へども、唯一度に答へんも、待ちけるかと

心よせに―耳よりな事に思ひて

ひしめきあひたり―騒ぎ合ふ

驚かさん―呼び起す

念じて―こちへ忍びて

むごの後―無期の後にて久しく程經て後

やはら―徐々と

我てゝ―我父

もぞ思ふとて、今一聲呼ばれて答へんと、念じて寢たるほどに、や、な起し奉りそ、幼き人は寢入り給ひにけりといふ聲のしければ、あな侘しと思ひて、今一度起せかしと思ひねに聞けば、ひし〳〵とたゞくひに喰ふ音のしければ、すべなくて、むごの後にえいと答へたりければ、僧たちわらふことかぎりなし。

田舍の兒櫻の散るを見て泣く事

これも今は昔、田舍の兒の比叡の山へ登りたりけるが、櫻のめでたく咲きに咲きたりけるに、風の烈しく吹きけるを見て、この兒さめ〴〵と泣きけるを見て、僧のやはら寄りて、などかうは泣かせ給ふぞ、この花の散るを惜しう覺えさせ給ふか、櫻ははかなきものにて、かくほどなくうつろひ候ふなり、されどもさのみぞさぶらふと慰めければ、櫻の散らんはあながちにいかゞせん、苦しからず、我てゝの作りたる麥の花散りて、實のいらざらんを思ふが侘しきといひて、さくりあげてよゝと泣きけるは、うたてしやな。

殿の沙汰―家事向のとりさばき
なまりやうけし―生良家子の惹か、一本「なまずりやう」（生受領）とあり
提―酒器

小藤太智におどされたる事

これも今は昔、源大納言定房といひける人の許に、小藤太といふ侍ありけり。やがて女にあひ具してぞありける。女も女房にて使はれけり。この小藤太は殿の沙汰をしければ、三とほり四とほりに居廣げてぞありける。この女の女房に、なまりやうけしの通ひけるありけり。宵に忍びて局へ入りにけり。曉より雨降りて、え歸らで局に忍びて臥したりけり。この女の女房は、上へのぼりにけり。この聟の君、屏風を立て廻して寢たりける。春雨いつとなく降りて、歸るべきやうもなくて臥したりけるに、この舅の小藤太、この聟の君徒然にておはすらんとて、肴折敷に据ゑて持ちて、今片手に提に酒を入れて椽より入らんは人見つべしと思ひて、奥の方よりさりげなくて持て行くに、この聟の君は衣を引き被きて、のけざまに臥したりけり。この女房の疾くおりよかしと、徒然に忌ひて臥したるほどに、奥の方より遣戸を開けたれば、疑なくこの女房の上よりおるゝぞと思ひて、衣をば顔に被きながら、前の物をかき出して、腹をそらしてけし〳〵と起しければ、小藤太おびえてのけざまにかへりけるほどに、肴もうちちらし、酒もさながらうちこぼして、大鬚をさゝげてのけざまに臥して倒れたり。頭を荒う打ちて、まくれ入りて臥せりけりとか。

前の物―一本「あの物」とあり
のけざまかへる―仰様に倒るゝこと
まくれ―目のくちゐること

大童子―寺院に召使ひたる童子に年齢により大中小の名あり
まみしぐれて―眉目のあたりうちしぐれて見にくきをいふ
わせんじやう―わはわぬしのわなり、せんじやうはいかで

大童子鮭ぬすみたる事

これも今は昔、越後の國より鮭を馬に負せて、二十駄ばかり粟田口より京へ追ひ入れけり。それに粟田口の鍛冶が居たるほどに、頂禿げる大童子のまみしぐれて、物むつかしゝうらゝかにも見えぬが、この鮭の馬の中に走り入りにけり。道は狹くて、馬なにかとひしめきける間、この大童子走りそひて、鮭を二つ引き抜きて、懐へひき入れてんげり。さてさりげなくて走り先立ちけるを、この鮭に具したる男見てけり。走り先立ちて、童の腕頸を取りて、ひき留めていふやう、わせんじやうはいかでこの鮭を盗むぞといひけ

うは先生なり、今君といふがごとし

かうちやう―綱丁にて荷宰領のこと

さまあし―外聞わるし

鮭の一二尺―鮭を刻にかけたる戯言なり、尺は隻の假借にて匹に同じ

そこら―あまた

れば、大童子さることなし、何を證據にてかうはの給ふぞ、わぬしが取りてこのわらはに負ふするなりといふ。かくひしめく程に、上り下るもの市をなして行きもやらで見合ひたり。さるほどに、この鮭のかうちやう、まさしくわせんじやう取りて懐に引き入れつといふ。大童子はまたわぬしこそ盗みつれといふ。時にこの鮭に附きたる男、せんずる所我も人も懐を見んといふ。大童子、さまでやはあるべきなどいふ程に、この男袴を脱ぎて、懐を廣げて、くは見給へといひてひし〳〵とす。さてこの男大童子に抓みつきて、わせんじやう、はや物脱ぎ給へといへば、童、さまあしとよ、さまであるべきことかと言ふを、この男たどぬがせにぬがせて、前をひきあけたるに、腰に鮭を二つ腹に添へてさしたり。男くは〳〵といひて引き出したる時に、この大童子はうち見て、あれ勿體なき主かな、かうやうに裸體になしてあさらんには、いかなる女御后なりとも、腰に鮭の一二尺なきやうはありなんと言ひたりければ、そこら立ちとまりて見ける者ども、一度にはつと笑ひけるとか。

尼地藏見たてまつる事

地藏菩薩は云々―延命地藏經に「菩薩毎日晨朝入於諸定、遊化大道、拔苦與樂、云々」

一世界―あたり界隈

博打―博徒

今は昔、丹波國に老いたる尼ありけり。地藏菩薩は、曉ごとにありき給ふ事を仄に聞きて、曉ごとに地藏見奉らんとて、一世界惑ひありくに、博打のうちほうけて居たるが見て、尼公は寒きに何事し給ふぞといへば、地藏菩薩の曉にありき給ふなるに、逢ひまゐらせんとてかくありくなりといへば、地藏のありかせ給ふ道は我こそ知りたれ、いざたまへ、逢はせ參らせんといへば、あはれ嬉しきことかな、地藏ありかせ給はん所へ、我を率ておはせよといへば、我に物を得させ給へ、やがて率て奉らんといひければ、この著たる衣奉らんといひければ、いざ給へとて、隣なる所へ率て行く。尼悦びて急ぎ行くに、其所の子にぢざうといふ童ありけるを、それが親を知りたりけるによりて、ぢざうはと問ひければ、親、あそびにいぬ、今來なんといへば、くはこゝなり、地藏のおはします所はといへば、尼うれしくて、紬の衣を脱ぎて取らすれば、博打は急ぎて取りていぬ。尼

は地藏見參らせんとて居たれば、親どもは心得ず、などこの童を見んと思ふらんと思ふほどに、十ばかりなる童の來たるを、くはぢざうといへば、尼見るまゝに、是非をも知らず伏し轉びて拜み入りて土にうつぶしたり。童楚を持ちて遊びけるまゝに來りけるが、その楚して、手すさびのやうに額をかけば、額より顏の上までさけぬ。さけたる中よりえもいはずめでたき地藏の御顏見え給ふ。尼拜み入りてうち見上げたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拜み入り參らせて、やがて極樂へ參りけり。されば心にだにも深く念じつれば、佛も見え給ふなりけりと信ずべし。

楚―眞直に伸びたる若枝、鞭、笞などをいふ

かくて立ち給へれば―弥陀が立ちたまふ也

やがて極樂へ云云―尼が極樂往生を遂げたりとなり

修行者百鬼夜行に逢ふ事

今は昔、修行者のありけるが、津の國までいきたりけるに、日暮れて龍泉寺とて大なる寺のふりたるが、人もなきありけり。これは人宿らぬ所といへども、そのあたりに又宿るべき所なかりければ、いかゞせんと思ひて、笈うちおろして内に入りてけり。不動

不動の咒―不動

舞の陀羅尼慈教呪をいふ

の呪を唱へ居たるに、夜半ばかりになりぬらんと思ふ程に、人々の聲數多して來る音すなり。見れば手ごとに火を燈して、百人ばかりこの堂の内に來集ひたり。近くて見れば、目一つつきたるなどさまゞなり。人にもあらず、あさましきものどもなりけり。或は角生ひたり、頭もえもいはずおそろしげなるものどもなり。おそろしと思へども、すべきやうもなくて居たれば、おの〳〵皆居ぬ。一人ぞ又所もなくて、え居ずして火をうち振りて、我をつら〳〵と見ていふやう、わが居るべき座に新しき不動尊こそ居給ひたれ、今宵ばかりは外におはせとて、片手してわれをひきさげて、堂の椽の下にすゑつ。さるほどに曉になりぬとて、この人々のゝしりて歸りぬ。誠にあさましく恐しかりける所かな、疾く夜の明けよかし往なんと思ふに、辛うじて夜明けたり。うち見廻したれば、ありし寺もなし。遙々とある野の來しかたも見えず、人の踏み分けたる道も見えず、行くべき方もなければ、あさましと思ひて居たる程に、稀々馬に乘りたる人どもの、人數多具して出で來たり。いとうれしくて、此處は何處とか申し候ふと問へば、などかくは問ひ給ふぞ、肥前國ぞかしといへば、あさましきわざかなと思ひて、事のやう委しくいへば、この馬なる人もいと希有のことかな、肥前の國に取りてもこれはおくの郡なり、これは御館へ參るなりといへば、修行者よろこびて、道も知り候はぬに、さらば道までも參らんといひて往きければ、これより京へ行くべき道など教へければ、船尋ねて京へのぼりにけり。さて人どもに、かゝるあさましき事こそありしか、津の國の龍泉寺といふ寺に宿りたりしを、鬼どもの來て、所狹しとて、新しき不動尊しばし留におはしませといひて、かき抱きて留についすゆと思ひしに、肥前の國のおくの郡にこそ居たりしか、かゝるあさましき事にこそ逢ひたりしかとぞ、京に來てかたりけるとぞ。

御館―國司の廳をいふ

ついさゆ―つき据ゑ

利仁薯蕷粥の事

今は昔、利仁の將軍の若かりける時、その時の一の人の御許に恪勤して候ひけるに、正月に大饗せられけるに、そのかみは大饗はてて、とりばみといふものを、拂ひて入れず

○今昔物語二十六、利仁將軍若時從京敦賀將行五位語參照
一の人―攝政關白をいふ
大饗―大臣大饗

して、大甕のおろし米とて、給仕したる恪勤の者どもの喰ひけるなり。その所に年比になりて、給仕したる者の中には、所得たる五位ありけり。そのおろし米の座にて芋粥すりて、舌打をして、あはれいかで芋粥に飽かんといひければ、利仁これを聞きて、大夫殿いまだ芋粥に飽かせ給はずやと問ふ。五位いまだ飽き侍らずといへば、飽かせ奉りてんかしといへば、かしこく侍らんとて止みぬ。さて四五日ばかりありて、曹司住にてありける所へ、利仁來ていふやう、いざさせたまへ、湯浴に大夫殿といへば、いとかしこきことかな、今宵身のかゆく侍りつるに、乘物こそは侍らねといへば、こゝにあやしの馬具して侍りといへば、あなうれし〳〵といひて、薄綿の衣二つばかりに、青鈍の指貫の裾破れたるに、おなじ色の狩衣の肩少し落ちたるに、したの袴も著ず、鼻高なるものの先は赤みて、穴のあたりぬればみたるは、すゝばなを拭はぬなめりと見ゆ。狩衣のうしろは、帶にひきゆがめられたるまゝに、ひきもつくろはねば、いみじう見苦し。をかしけれども、先に立てて、我も人も馬に乘りて、河原ざまにうち出でぬ。五位の供には、あやしの童だにになし。利仁が供には、調度掛、舍人、雜色、ひとりぞありける。河原うち過ぎて、粟田口にかゝるに、いづくへぞと問へば、唯こゝぞとて山科も過ぎぬ。こはいかに、こゝぞ〳〵とて山科も過しつるはといへば、あしこ〳〵とて關山も過ぎぬ。こゝぞ〳〵とて、三井寺に、知りたる僧のもとにいきたれば、此所に湯わかすかと思ふだにも、物ぐるほしう遠かりけりと思ふに、こゝにも湯ありげもなし。いづら湯はといへば、實は敦賀へ率て奉るなりといへば、物ぐるほしうおはしける、京にてさとの給はましかば、下人なども具すべかりけるをといへば、利仁あざわらひて、利仁一人侍らば千人と思せといふ。かくて物など喰ひて急ぎ出でぬ。其所にて利仁、箙取りて負ひける。かくて行くほどに、三津の濱に、狐の一つ走り出でたるを見て、よき使出で來たりとて利仁狐押しかくれば、狐身を投げて逃ぐれども、追ひ責められてえ逃げず、落ちかゝりて、狐の後足を取りて引上げつ。乘りたる馬、いとかしこしとも見えざりつれども、いみじき逸物にてありければ、若干も延さずして挿へたる所に、この五位走らせて息つき

とて年始に饗應するをいふ
とりばみ—饗應のあまりを庭に投げ出すを乞食の取りて食ふをいふ
青鈍—はなだ色の青みあるもの
肩少し落ちたる—肩の折目くづれたるをいふ
調度掛—武具を持つもの
關山—逢坂山
三津の濱—下坂本の濱邊
身を投げて逃ぐれども—一生懸命に逃ぐれども

わ狐―狐を呼びかくる詞なり、おのれ狐といふがごとし

もしいはぬものならば―此下に辛き目見せんの語を含めて心得べし

世に―一本「よもゝとあり

あはせて―同時に

こりて來る―かたまりて來る

たれば、狐を引き上げていふやうは、わ狐、今宵の中に利仁が家の敎賀に罷りていはんやうは、俄に客人を具し奉りて下るなり、明日の巳の時に、高島邊に男ども迎へに馬に鞍を置きて、二疋具してまうで來といへ、もしいはぬものならば、わ狐只心みよ、狐は變化あるものなれば、今日の中に行きつきて言へとて放てば、荒涼の使かなといふ。よし御覽ぜよ、罷らでは世にあらじといふに、早く狐見返り〳〵して前に走り行く。能く罷るめりといふに、あはせて走り先立ちて失せぬ。かくて其夜は道にとどまりて、翌朝疾く出で行くほどに、誠に巳の時ばかりに、三十騎ばかりこりて來るあり。なににかあらんと見るに、男どもまうで來たりといへば、不定の事かなといふ程に、たどちかに近くなりてばら〳〵と下るゝ程に、これ見よ誠におはしたるはといへば、利仁うち微笑みて何事ぞと問ふ。大人しき郎等進み來て、希有の事の候ひつるなりといふ。まづ馬はありやといへば、二疋さぶらふといふ。食物などしてきたりければ、その程におり居て喰ふ序に、大人しき郎等のいふやう、昨夜希有の事のさぶらひしなり、戌の時ばかりに大

大盤所―利仁の北の方をさす、

正しくは臺盤所と書く

胸をきりに切りて―胸の苦しくせつなくて

例ざまに―本の通に快くなちせられしとなり

くらぐら―くれぐれにて薄暮のこと

身のうちしすきたる―空腹

盤所の胸をきりに切りてやませ給ひしかば、いかなる事にかとて、俄に僧召さんなど騒がせ給ひしほどに、手づから仰せ候ふやう、何かさわがせ給ふ、おのれは狐なり、べちのことなし、この五日三津の濱にて殿の下らせ給ひつるに、逢ひ奉りたりつるに、逃げつれど、得逃げで捕へられ奉りたりつるに、今日の中に我家にいきつきて、客人具し奉りてなんくだる、明日巳の時に、馬二つに鞍置きて、具して、男ども高島の津に參り逢へといへ、もし今日の中にいきつきて言はずば、辛きめ見せんずるぞと仰せられつるなり、男ども疾く〳〵出で立ちて參れ、遲くまゐらば、我は勘當かうぶりなんと懼ぢ騒がせ給ひつれば、男どもに召し仰せ候ひつれば、例ざまにならせ給ひにき。その後、烏と共に參り候ひつるなりといへば、利仁うちゑみて、五位に見合すれば、五位あさましと思ひたり。物など喰ひはてて、急ぎ立ちてくらぐらに行き著きぬ。これ見よ、誠なりけりとあざみあひたり。五位は馬よりおりて、家のさまを見るに、賤はゝしくめでたき事物にも似ず、もと著たる衣二つがうへに、利仁が宿直衣を著せたれども、身のうちしすき

練色―薄黄色

これにあはせて―これと共にうへ―奥方

なにのあるにか―虱などの居るをいふ

たるべければ、いみじう寒げに思ひたるに、長炭櫃に火を多うおこしたり。疊厚らかに敷きて、菓物食物し設けて樂しく覺ゆるに、道の程寒くおはしつらんとて、練色の衣の綿厚らかなる、三つ引き重ねて持て來て、うちおほひたるに樂しとは愚なり。物喰ひなどして事しづまりたるに、舅の有仁出で來ていふやう、こはいかでかくは渡らせ給へるぞ、これにあはせて、御使のさま物ぐるはしうて、うへ俄にやませ奉り給ふ、希有の事なりといへば、

うち笑ひて、物の心みんと思ひてしたりつることを、誠にまうできて、告げて侍るにこそあんなれといへば、舅も笑ひて、希有の事なりといふ。具し奉らせ給ひつらん人は、このおはします殿の御事かといへば、さに侍り、芋粥にいまだ飽かずと仰せらるれば、飽かせ奉らんとて率て奉りにたるといへば、やすき物にもえ飽かせ給はざりけるかなとて戲るれば、五位東山に湯わかしたりとて、人をはかりいでかくの給ふなりなど言ひ戲れて、夜少し更けぬれば舅も入りぬ。寢所とおぼしき所に、五位入りて寢んとするに、綿四五すばかりある直垂あり。我もとの薄綿はむつかしう、なにのある

出で來るきぬかれば―今昔に「田來にたれば」とあるよろし

汗水にて臥したるに―直垂の綿あつきために汗水になりて臥したりとなり

おほのかに―おほどかに同じ、大樣の意

屋と均しく置きなしつ―芋を澤田に持ちこしたるが屋と同じ高さになれ

五石なはの釜―五石ばかり入るべき釜をいふ、「なは」は納の音しほぎぬ―今昔に「白き布」とあり

襖―綿入の衣

みせん―味煎と書く、甘葛の煎汁なるべし

かへらかして―今昔に「煑返して」とあり

且一―いざ一つと讀むべきか

御德に―御蔭で

にか、かゆき所も出で來るきぬなれば、脫ぎ置きて、練色の衣三つが上に、この直垂ひき著て臥したる心、いまだならはぬに氣もあげつべし。汗水にて臥したるに、又傍に人の働けば、誰ぞと問へば、御あしたまへと候へば、參りつるなりといふ。けはひにくからねば、かきふせて風の透く所に臥せたり。かゝる程に物高く言ふ聲す。何事ぞと聞けば、男のさけびていふやう、この邊の下人うけたまはれ、明日の卯の時に、切口三寸長さ五尺の、芋各一筋づつ持て參れといふなりけり。あさましう、おほのかにもいふものかなと聞きて寢入りぬ。曉方に聞けば、庭に莚敷く音のするを、何事するにかあらんと聞くに、小屋當番より初めて、起き立ちて居たる程に、蔀あげたるに見れば、長莚をぞ四五枚敷きたる。何の料にかあらんと見る程に、下種男の木のやうなる物を肩にうち掛けてきたりて、一筋置きて去ぬ。その後うち續き持て來つゝ置くを見れば、誠に口三寸ばかりの芋の五六尺ばかりなるを、一筋づつ持て來て置くとすれど、巳の時まで置きければ、居たる屋と均しく置きなしつ。昨夜さけびしは、早うその邊にある下人のかぎりに物言ひ聞かすとて、人呼の岡とてある塚の上にていふなりけり。唯その聲の及ぶかぎりの、めぐりの下人の限持て來るにだにさばかり多かり、まして立ち退きたる從者どもの多さを思ひやるべし。あさましと見たるほどに、五石なはの釜を五六舁持て來て、庭に杭ども打ちて据ゑ渡したり。何の料ぞと見る程に、しほきぬの襖といふ物著て帶して、若やかにきたなげなき女どもの、白く新しき桶に水を入れて、この釜どもにさく〳〵といる。何ぞの湯わかすかと見れば、この水と見ゆるはみせんなりけり。若き男どもの袂より手出したる、薄らかなる刀の長やかなるもたるが、十餘人ばかり出で來て、この芋をむきつゝ透切に切れば、早く芋粥煑るなりけりと見るに、喰ふべき心地もせず、かへりてうとましくなりにけり。さら〳〵とかへらかして、芋粥出でまうできにたりといふ。まゐらせよとて、まづ大なる土器具して、金の提の一斗ばかり入りぬべきに、三四に入れて、且一とてもてきたるに、飽きて一盛をだにえ食はず、飽きにたりといへば、いみじう笑ひて集りて居て、客人殿の御德に、芋粥喰ひつといひあへり。かやうにする

ほどに、むかひの長家の軒に、狐のさし覗きて居たるを、利仁見つけて、かれ御覽ぜよ、候ひし狐の見參するをとて、かれに物喰はせよといひければ、喰はするにうち喰ひてけり。かくて萬の事、たのもしといへばおろかなり。一月ばかりありてのぼりけるに、けをさめの裝束ども數多くだり、又たどの八丈、綿、絹など、皮子共に入れて取らせ、初の夜の直垂はた更なり、馬に鞍を置きながら取らせてこそ送りけれ。きう者なれども所につけて、年比になりて許されたるものは、さるもののおのづからあるなりけり。

けをさめの裝束―裘納の裝束にて裘は常に著るをいひ納ははれの時用ふるをいふ。八丈―絹の名。きう者―窮者なるか、猶考ふべし。さるもののの―今昔に「かゝる事なむ」とあり

宇治拾遺物語　卷第二

清德聖きどくの事

今は昔、清德聖といふ聖のありけるが、母の死にたりければ、棺に打入れて、唯一人愛宕の山に持ちて行きて、大なる石を四つの隅に置きて、其上にこの棺を打ち置きて、千手陀羅尼を、片時息む時もなくうち寢る事もせず、物も食はず湯水も飲まで、聲絶もせず誦し奉りて、この棺を廻ること三年になりぬ。その年の春、夢ともなく現ともなく、仄に母の聲にて、この陀羅尼をかく夜晝よみ給へば、我は早く男子となりて天に生れにしかども、同じくは佛になりて告げ申さんとて、今までは告げ申さどりつるぞ、今は佛になりて告げ申すなり、といふと聞ゆる時、さ思ひつることなり、今は早う成り給ひぬらんとて、取りいでて其所にて燒きて、骨取り集めてうづみて、上に石の卒都婆など立

千手陀羅尼―千手觀音の咒文

てて、例のやうにして、京へ出づる道に、西の京に水葱いと多く生ひたる所あり。この聖困じて、物いとほしかりければ、道すがら折りて食ふほどに、主の男出で來て見れば、いと尊げなる聖の、かくすどろに折り喰へば、あさましと思ひて、いかにかくはめすぞといふ。聖、困じて苦しきまゝに喰ふなりといふ時に、さらば參りぬべくは、今少しもめさまほしからん程めせといへば、三十筋ばかりむず〳〵と折り喰ふ。この水葱は三町ばかりぞ植ゑたりけるに、かく喰へばいとあさましく、喰はんやうも見まほしくて、めしつべくはいくらもめせといへば、あなたふととて、うちゐざり〳〵をりつゝ、三町をさながら喰ひつ。主の男、あさましう物喰ひつべき聖かなと思ひて、暫し居させ給へ、物してめさせんとて、白米一石取り出でて、飯にして喰はせたれば、年比物も喰はで困じたるにとて、皆喰ひて出でていぬ。この男いとあさましと思ひて、これを人に語りけるを聞きつゝ、坊城の右の大殿に、人の語り參らせければ、いかでかさはあらん、心得ぬことかな、呼びて物喰はせて見んと思して、結緣のために物參らせて見んとて、呼ば

めさまほしからん程―食ひたしと思ふ程

坊城の右の大殿―師輔

せ給ひければ、いみじげなる聖歩み參る。その尻に、餓鬼、畜生、虎狼、犬烏、萬の鳥獸など、千萬と歩み續きて來けるを、他人の目に大かたえ見ず、唯聖一人とのみ見けるに、この大殿見つけ給ひて、されば、こそいみじき聖にこそありけれ、めでたしとおぼえて、白米十石を御膳にして、新しき莚筵に折敷桶櫃などに入れて、いく〳〵と置きて喰はせさせ給ひければ、後に立ちたるものどもに喰はすれば、集りて手をさゝげ皆喰ひつ。聖はつゆ喰はで悅びて出でぬ。されば、こそ凡人にはあらざりけれ、佛などの變じてありき給ふにやとおぼしけり。他人の目には唯聖一人して喰ふとのみ見えければ、いとどあさましき事に思ひけり。さて出でて行く程に、四條の北なる小路に糞どをまる。この後に具したるものしちらしたれば、唯墨のやうに黑きゐどを、隙もなく遙々としちらしたれば、下種なども穢がりて、その小路を糞小路とつけたりけるを、帝聞かせ給ひて、その四條の南をば何といふと言はせ給ひければ、綾の小路となんと申すと申しければ、これを錦の小路といへかし、あまり穢き名かなと仰せられけるよりしてぞ、錦の小路といい

いく〳〵と―心の行くほど食はせ給ふなり

ゐど―穢土にて糞のこと

黒煙―護摩壇などの煙なるべし

壁のもと―垣の下

南殿―紫宸殿

北向―龍神は北方を司るを以て也

ひける。

靜觀僧正雨を祈る法驗の事

今は昔、延喜の御時旱魃したりけり。六十人の貴僧を召して、大般若經讀ましめ給ひけるに、僧ども黒煙を立てて、驗現さんと祈りけれども、いたくのみ晴れまさりて日強く照りければ、帝を始めて、大臣公卿、百姓人民、この一事より外の嘆なかりけり。藏人頭を召し寄せて、靜觀僧正に仰せ下さるゝやう、殊更思し召さるゝやうあり、かくの如く方の御祈ども、させる驗なし、座を立ちて別に壁のもとに立ちて祈れ、思し召すやうあれば、取り分け仰せつくるなりと仰せ下されければ、靜觀僧正、其時は律師にて、上に僧都、僧正、上﨟どもおはしけれども、面目限なくて、南殿の御階より降りて、屏のもとに北向に立ちて、香爐取りくびりて、額に香爐を當てて祈請し給ふ事、見る人さへ苦しく思ひけり。熱き日の暫しもえさし出でぬに、涙を流し黒煙を立てて祈請し給ひければ、香爐

弓場殿―校書殿
御前―前庭
群なく―一面に

の煙空へあがりて、扇ばかりの黑雲になる。上達部は南殿に列び居、殿上人は弓場殿に立ちて見るに、上達部の御前は美福門よりのぞく。かく見るほどに、その雲群なく大空に引塞ぎて、龍神震動し電光大千界に滿ち、車軸の如くなる雨降りて、天下忽にうるほひ、五穀豐饒にして萬木果をむすぶ。見聞の人歸依せずといふことなし。さて帝大臣公卿等隨喜して僧都になし給へり。不思議の事なれば、末の世の物語にかく記せるなり。

そひ―添ひにて
傍の義
大嶽―大比叡と
もいふ

同僧正大嶽の岩いのる事

今は昔、靜觀僧正は、西塔の千手院といふ所に住み給へり。その所は南に向うて、大嶽を守る所にてありけり。大嶽の乾の方のそひに大なる巖あり、その岩の有樣龍の口をあきたるに似たりけり。その岩の筋に向ひて住みける僧ども、命もろくして多く死にけり。しばらくはいかにして死ぬるやらんと、心も得ざりけるほどに、この岩のあるゆゑぞと言ひ立ちにけり。この岩を毒龍の巖とぞ名づけたりける。これによりて西塔の有樣、唯あれにのみ荒れまさりけり。この千手院にも、人多く死にければ住み煩ひけり。この巖を見るに誠に龍の大口をあきたるに似たり。人のいふことは、實にもさありけりと僧正思ひ給ひて、この巖の方に向ひて、七日七夜加持し給ひければ、七日といふ夜半ばかりに、空曇り震動する事夥し。大嶽に黑雲かゝりて見えず、暫間ありて空晴れぬ。夜明けて大嶽を見れば、毒龍巖碎けて散り失せにけり。それより後、彼の西塔に人住みけれども祟なかりけり。西塔の僧どもは、件の座主を今に至るまで尊み拜みけるとぞ語り傳へたる、不思議のことなり。

箔打―金銀箔を打つ職人
金崩―金峯山の難所

金峯山箔打の事

今は昔、七條に箔打あり、御嶽詣しけり。參りて金崩を行いて見れば、實の金のやうにてありけり。嬉しく思ひて、件の金を取りて袖に包みて家にかへりぬ。おろして見ければ、きらゝとして實の金なりければ、不思議の事なり。この金取れば、雷鳴、地震、雨

まろげて―一纏めにして
箔屋召すといひければ―此下に脱文あるべし
げんにあり―現に在り
看督長―検非違使廳に屬す、検非違使とは警察を掌る役所なり
大理―検非違使

降りなどして、少しも得取らざんなるに、これはさることもなし。この後もこの金を取りて、世の中を過ぐべしと、嬉しくて秤にかけて見れば、十八兩ぞありける。これを箔に打つに、七八千枚に打ちつ。これをまろげて、皆買はん人もがなと思ひて暫く持ちたるほどに、検非違使なる人の東寺の佛造らんとて、箔を多く買はんといふと告ぐる者ありける。喜びて、懐にさし入れて行きぬ。箔屋召すといひければ、いくらばかり持ちたるぞと問ひければ、七八千枚ばかり候ふといひければ、持ちて參りたるかといへば、候ふとて懐より紙に包みたるを取り出したり。見れば、破れず廣く色いみじかりければ、廣げて數へんとて見れば、ちひさき文字にて、金御嶽云々とこと〴〵く書かれたり。心もえで、この書付は何の料の書付ぞと問へば、箔打書付も候はず、何の料の書付かは候はんといへば、げんにあり、これを見よとて見するに、箔打見ればまことにあり。あさましきことかなと思ひて、口もえあかず。検非違使、これはたゞごとにあらず、樣あるべきとて、友を呼び具して、金をば看督長に持たせて、箔打具して大理のもとへ參りぬ。

別當の唐名
別當―検非違使の長官
田で行きて―あて行きての誤か
よせばしら―罪人を繋ぐ柱
かうじ―勘事又は拷じならん
みさ〴〵―びしやびしや
○今昔二十八左京屬紀茂經鯛荒卷逃太夫語參照
下わたり―下京のこと
さくわん―屬官
をこづり―機嫌をとること

件の事どもを語り奉れば、別當驚きて、早く河原に出で行きて問へと言はれければ、検非違使ども河原に行いて、よせばしら掘り立てて、身を動かさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、背中は紅の練單衣を水にぬらして著せたるやうに、みさ〴〵となりてありけるを、重ねて獄に入れたりければ、僅に十日ばかりありて死にけり。箔をば金峯山に返して、もとの所に置きけると語り傳へたり。それよりして人のおぢて、いよ〴〵件の金取らんと思ふ人なし、あなおそろし。

用經あらまきの事

今は昔、左京の大夫なりける古上達部ありけり。年老いて、いみじうふるめかしかりけり。下わたりなる家に、歩行もせで籠り居たりけり。その司のさくわんにて、紀用經といふ者ありけり。長岡になん住みける。司の目なれば、この大夫の許にも來てなんをこづりける。この用經大殿にまゐりて、贄殿に居たるほどに、淡路の守頼親が鯛の苞苴を

間木―横木
かんの君―大夫の君
出居―客間

おほく奉りたりけるを、贄殿に持て參りたり。贄殿の預義澄に、二卷用經乞ひ取りて、間木にさゝげて置くとて、義澄にいふやう、これ人して取りに奉らん折に、遣せ給へといひおく。さて殿を出でて心の中に思ひけるやう、これ我司のかみに奉りて、をこづり奉らんと思ひて、これを間木に捧げて、左京の大夫の許にいきて見れば、かんの君、出居に客人二三人ばかり來て、饗應せんとて、地火爐に火おこしなどして、我がもとにて、物喰はんとするに、はかゞしき魚もなし。鯉鳥など用ありげなり。それに用經が申すやう、用經が許にこそ、津の國なる下人の鯛の苞苴、三つけさ持てまうで來たりつるを、一卷たべ試み侍りつるが、えもいはずめでたく候ひつれば、今二卷はけがさで置きてさぶらふ、急ぎてまうでつるに、下人の候はで持て參り候はざりつるなり、只今取りにつかはさんはいかにと、聲高くしたりがほに袖をつくろひて、口脇かい拭ひなどして、ゐあがりのぞきて申せば、大夫さるべき物のなきに、いと善きことかな、疾く取りに遣れとの給ふ。客人どもも喰ふべき物の候はざりつるに、九月ばかりの頃なれば、

時かはさず―時を移さず即刻
眞魚箸―料理の時魚を取扱ふに用ふる大なる箸
くゝり引きゆひ―狩衣の袖括りの紐をしむること
尻切―草履

この頃鳥の味ひいとわろし、鯉はまだ出で來ず、善き鯛は奇異のものなりなどいひあへり。用經、馬控へたる童を呼び取りて、馬をば御門の脇に繋ぎて、只今走りて大殿の贄殿にゆきて、贄殿の預の主に、その置きつる苞苴、只今遣せ給へとさゝめきて、時かはさずもてこ、外によるな、疾く走れとてやりつ。さて、俎洗ひて持て參れと聲高くいひて、やがて用經、今日の庖丁は仕らんといひて、眞魚箸けづり、鞘なる刀拔いて設けつゝ、あな久し、いづら來ぬやなど心もとながり居たり。遲し〳〵と言ひ居たる程に、遣りつる童、木の枝に苞苴二つ結ひつけて持て來たり。いとかしこく、あはれ飛ぶがごと走りて參うで來たる童かなと譽めて、取りて俎の上に打ち置きて、事々しく大鯉つくらんやうに、左右の袖つくろひ、くゝり引きゆひ、片膝立ていま片膝伏せて、いみじくつきづきしく居なして、苞苴の繩をふつ〳〵と押し切りて、刀して藁を押し開くに、ほろ〳〵と物どもこぼれて落つるものは、平足駄、古尻切、古草鞋、古沓、かやうの物のかぎりあるに、用經あきれて、刀も眞魚箸もうち捨てて、沓もはきあへず逃げて去ぬ。左京の大

物惡しき人―下劣なる人
きいちかーきだやか
白地―ついちょつと

夫も客人も、あきれて目も口もあきて居たり。前なる侍共もあさましくて、目を見かはして居なみたる顔ども、いと怪しげなり。物喰ひ酒飲みつる遊も、皆すさまじくなりて、一人立ち二人立ち皆立ちて去ぬ。左京の大夫のいはく、この男をば、かくえもいはぬ癡物狂とは知りたりつれども、司のかみとて來睦びつれば、よしとは思はねど、追ふべき事もあらねばさと見てあるに、かゝるわざをして謀らんをばいかゞすべき、物惡しき人は、はかなき事につきてもかゝるなり、いかに世の人聞き傳へて、世の笑種にせんとすらんと、空を仰ぎて歎き給ふ事限なし。用經は馬に乘りて、馳せ散して殿に參りて、贄殿の預義澄に逢ひて、この苞苴をば惜しと思さば、おいらかに取り給ひてはあらで、かゝる事をし出で給へると、泣きぬばかりに怨み詈る事限なし。義澄がいはく、こはいかにの給ふ事ぞ、苞苴は奉りて後、白地に宿に罷りつとて、おのが男にいふやう、左京の大夫の主の許から、苞苴とりに遣せたらば、取りてそれに取らせよと言ひ置きて、まかでて只今還り參りて見るに、苞苴なければ、何方いぬるぞと問ふに、しかゞ〳〵の御使ありつれば、の

わかぬし―贄殿掛の若者
切り參り―料理して食ひ

給はせつるやうに取りて奉りつるといひつれば、さにこそはあんなれと聞きてなん侍る、事のやうを知らずといへば、さらばかひなくとも、言ひ預けつらん主を呼びて問ひ給へといへば、男を呼びて問はんとするに、出でていにけり。膳部なる男がいふやう、おのれが部屋に入り居て聞きつれば、このわかぬしたちの、ま木に捧げられたる苞苴こそあれ、こは誰が置きたるぞ、何の料ぞと問ひつれば、誰にかありつらん、左京のさくわんの主なりといひつれば、さては事にもあらず、すべきやうありとて、取りおろして、鯛をば皆切り參りて、かはりに古尻切、平足駄などをこそ入れて、ま木に置かると聞き侍りつれと語れば、用經聞きて、叱り罵る事かぎりなし。この聲を聞きて、人々いとほしとはいはで笑ひのゝしる。用經しわびて、かく笑ひ罵られん程はありかじと思ひて、長岡の家に籠り居たり。その後左京の大夫の家にもえ往かずなりにけるとかや。

○今昔二十、下毛野敦行從我門出死人語參照

おぼえ―寵遇

無爲―無事

厚行死人を家より出す事

昔、右近將監下野厚行といふ者ありけり、競馬によく乘りけり。帝王より始め奉りておぼえ殊に勝れたりけり。朱雀院の御時より、村上の帝の御時なんどは、盛にいみじき舍人にて、人も許し思ひけり。年高くなりて、西の京に住みけり。隣なりける人俄に死にけるに、この厚行弔問に行きて、その子に逢ひて、別の間の事ども弔ひけるに、この死にたる親を出さんに、門惡しき方に向へり、さればとてさてあるべきにあらず、門よりこそ出すべき事にてあれといふを聞きし、厚行がいふやう、惡しき方より出さん事殊に然るべからず、かつは數多の御子たちのため、殊にいまはしかるべし、厚行が隔の垣を破りて、それより出し奉らん、かつは生き給ひたりし時、事に觸れて情のみありし人なりかゝる折だにもその恩を報じ申さずば、何をもつてか報い申さんといへば、子どものいふやう、無爲なる人の家より出さん事あるべきにあらず、忌の方なりとも、我門よりこそ出さめといへども、僻事なしたまひそ、唯厚行が門より出し奉らんと言ひてかへりぬ。我子どもにいふやう 隣の主の死にたるいとほしければ、弔問に行きたりつるに、あの子どものいふやう、忌の方なれども、門は一つなれば、これよりこそ出さめといひつれば、いとほしく思ひて、中の垣を破りて、我門より出し給へといひつるといふに、妻子ども聞きて、不思議の事し給ふ親かな、いみじき絶穀の聖なりとも、かゝる事する人やはあるべき、身思はぬといひながら、我家の門より隣の死人出す人やある、かへすゞもあるまじき事なりと皆いひあへり。厚行僻事な言ひ合ひそ、たゞ厚行がせんやうに任せて見給へ、物忌し、奇しく忌むやつは、命も短くはかゞしきことなし、たゞ物忌まぬは、命も長く子孫も榮ゆ、いたく物いみ奇しきは人といはず、恩を思ひ知り、身を忘るゝをこそ人とはいへ、天道もこれをぞ惠み給ふらん、よしなき事な侘びあひそとて、下人ども呼びて、中の檜垣を唯こぼちに毀ちて、それよりぞ出させける。さてその事世に聞えて、殿ばらもあざみ譽め給ひけり。さてその後、九十ばかりまで保ちてぞ死にける。そ

絶穀の聖云々―絶穀木食の聖僧も斯かる事をなすべけんやとなり

檜垣―檜の薄板にて編みたる垣

れが子どもに至るまで、皆命長くて、下野氏の子孫は、舎人の中にもおほくあるとぞ。

鼻長き僧の事

○今昔二十八池尾禪珍内供鼻語参照
池の尾―山城宇治郡にあり
内供―僧官

昔池の尾に禪珍内供といふ僧住みけり。眞言などよく習ひて、年久しく行ひて尊かりければ、世の人々様々の祈をせさせければ、身の徳ゆたかにて、堂も僧坊も少しも荒れたる所なし。佛供御燈などもたえず、折節の僧膳、寺の講演しげく行はせければ、寺中の僧坊に隙なく僧も住み賑ひけり。浴室には湯沸さぬ日なく沐みのゝしりけり。又其あたりには、小家ども多く出で來て里も賑ひけり。さてこの内供は鼻長かりけり。五六寸計なりければ、腮よりさがりてぞ見えける。色は赤紫にて、大柑子の膚のやうに粒立ちてふくれたり。痒がる事かぎりなし。提に湯をかへらかして、折敷を鼻さし入るばかりゐりとほして、火の炎の顔に當らぬやうにして、その折敷の穴より鼻をさしいでて、提の湯にさしいれて、能くゆでて引き上げたれば、色は濃き紫色なり。それを側ざまに臥せ

湯をかへちかして―湯を煮立てて
ゐりとほし―彫り通しにて、折敷を鼻の入るば

下に物をあてて人に踏ますれば、粒立ちたる穴ごとに煙のやうなる物出づ。それを痛く踏めば、白き蟲の穴毎にさし出づるを、毛抜にて抜けば、四分計なる白き蟲を穴毎に取りいだす、その跡は穴だにあきて見ゆ。それを又同じ湯に入れて、さらめかし沸すに、ゆづれば鼻小く凋みあがりて、唯人の鼻のやうになりぬ。又二三日になれば、前の如くに膨れて大きになりぬ。かくの如くしつゝ、膨れたる日數は多くありければ、物喰ひける時は弟子の法師に、平なる板の一尺計なるが、廣さ一寸計なるを鼻の下にさし入れて、對ひゐて、上ざまへもてあげさせて、物喰ひはつるまではありけり。他人してもてあげさする折は、荒くもて上げければ、腹を立てて物も喰はず。さればこの法師一人を定めて、物喰ふたびごとに持て上げさす。それに心地悪しくて、この法師出でざりける折に、朝粥喰はんとするに、鼻を持て上ぐる人なかりければ、いかにせんなんどいふ程に、使ひける童よく持て上げ參らせてん、更にその御房にはよも劣らじといふを、弟子の法師聞きて、この童のかくは申すといへば、中大童子にて、みめも穢げなくありければ、上

かり穴あけたるなり
さらめかし―さらさらと音たてて
中大童子―今昔には中童子とあり

鼻をひん―くさめすること

ひとものー「ひたものの」の誤なちん

やごつなきーやんごとなき

に召し上げてありけるに、この童鼻持上の木を取りて、うるはしく對ひ居て、よきほどに高からず低からずもたげて、粥をすゝらすれば、この内供、いみじき上手にてありけり、例の法師には優りたりとて、粥をすゝるほどに、この童鼻をひんとて、側様に向きて鼻をひる程に、手震ひて、鼻持上の木ゆるぎて、鼻外れて粥の中へふたりとうち入れつ。内供が顔にも、童の顔にも、粥とばしりてひとものかゝりぬ。内供大に腹立ちて、頭顔にかゝりたる粥を紙にて拭ひつゝ、おのれはまが〳〵しかりける心持ちたる者かな、心なしの乞兒とはおのれがやうなる者をいふぞかし、我ならぬやごつなき人の御鼻にもこそまゐれ、それにはかくやはせんずる、うたてなりける心なしの癡者かな、おのれ立て立てとて追ひてければ、立つまゝに、世の人のかゝる鼻持ちたるがおはしまさばこそ、鼻持上にも參らめ、愚戯の事の給へる御房かなと言ひければ、弟子ども物の後に逃げ退きてぞ笑ひける。

陣―禁中に公事ある時諸卿の參著する所

しきにうてける―陰陽師のつかふ神をしき神といふ、それに打たれけるにやとなり

しかるべくて―然るべき因縁ありて

晴明藏人少將を封ずる事

昔、晴明陣に參りたりけるに、前驅花やかにおはせて、殿上人の參りけるを見れば、藏人の少將とて、まだ若く花やかなる人の、容體まことに清げにて、車より下りて内裏に參りたりける程に、この少將の上に烏の飛びて通りけるが、糞をしかけけるを晴明きと見て、あはれ世にも逢ひ、年なども若くて容體もよき人にこそあんめれ、しきにうてけるにか、この烏はしき神にこそありけれとおもふに、しかるべくて、この少將の生くべき報やありけん、いとほしう晴明がおぼえて、少將の側へ歩みよりて、御前へ參らせ給ふか、さかしく申すやうなれど、何か參らせ給ふ、殿は今夜えすぐさせ給はじと見奉るぞ、しかるべくて、おのれには見えさせ給へるなり、いざさせ給へ、物試みんとてこのひとつの車に乘りければ、少將わなゝきて、あさましきことかな、さらば助け給へとて、一つ車に乘りて少將の里へ出でぬ。申の時ばかりの事にてありければ、かく出でなどし

つぶ〳〵と夜一夜いもねず―くどくどとつぶやきて一夜寢入りもせず

しきをふせたりける―しき神を使ひて調伏するなり

まもり強かりける人―神佛の守護強き人にて少將をさす

つる程に日も暮れぬ。晴明、少將をつと抱きて身がためをし、又何事にか、つぶ〳〵と夜一夜いもねず、聲絶もせず讀み聞かせ加持しけり。秋の夜の長きによく〳〵したりければ、曉方に戸をはた〳〵と叩けるに、あれ人出して聞かせ給へとて、聞かせければ、この少將のあひ聟にて、藏人の五位のありけるも、同じ家にあなたこなたに据ゑたりけるが、この少將をば善き聟とてかしづき、今一人をば殊の外に思ひ落したりければ、ねたがりて、陰陽師を語らひて、しきをふせたりけるなり。さてその少將は死なんとしけるを、晴明が見つけて夜一夜祈りたりければ、そのふせける陰陽師の許より人の來て、高やかに心の惑ひけるまゝに、由なくまもり強かりける人の御爲に、仰せを背かじとてしきふせて、既にしき神かへりて、おのれ只今しきにうてて死に侍りぬ、すまじかりける事をしてと言ひけるを、晴明これ聞かせ給へ、昨夜見つけ參らせざらましかば、かやうにこそ候はまじといひて、その使に人を添へて遣りて聞きければ、陰陽師はやがて死にけりとぞいひける。しきをふせさせける聟をば、舅やがて追ひ捨てけるとぞ。晴明には

泣く〳〵喜びて、多くの事どもして飽かずぞ喜びける。誰とは覺えず、大納言までなり給ひけるとぞ。

季通殃に逢はんと欲する事

○今昔二十三、駿河前司橘季通欄迄語參照

昔、駿河前司橘季通といふ者ありき。それが若かりける時、さるべき所なりける女房を、忍びて行き通ひけるほどに、其所にありける侍ども、なま六位の家人にてあらぬが、宵暁にこの殿へ出で入る事わびし、これ閉て籠めて勘ぜんといふ事を、集りて言ひ合せけり。かゝる事をも知らで、例の事なれば、小舍人童一人具して局に入りぬ。童をば、あかつき迎へに來よとて返しやりつ。この打たんとする男ども伺ひ護りければ、例のぬし來て、局に入りぬるはと告げまはして、彼方此方の門どもを閉し廻して、鑰取り置きて、侍ども曳杖して、築土の崩などのある所に立ち塞がりて護りけるを、その局の女の童けしきどりて、主の女房にかゝる事のさぶらふは、いかなる事にか候ふらんと告げければ、

勘ぜん―苦め懲らさん

曳杖して―杖を後に隠して曳きあるくなり

主の男―女房の仕ふる男主人

主の女も聞き驚き、二人臥したりけるが、起きて季通も裝束して居たり。女房上に昇りて尋ぬれば、侍共の心合せてするとは言ひながら、主の男も、空しらずしておはする事と聞き得て、すべきやうなくて局に歸りて泣き居たり。季通いみじきわざかな、恥を見てんずと思へどもすべきやうなし。女の童を出して、出でて往ぬべき少しの隙やあると見せけれども、さやうの隙ある所には、四人五人づつくゝりをあげそばを夾みて、太刀を佩き杖を脇夾みつゝ皆立てりければ、出づべきやうもなしと言ひけり。この駿河前司は、いみじう力ぞ強かりける。いかゞせん明けぬとも、この局に籠り居てこそは、引出に入り來んものと取り合ひて死なめ、さりとも夜明けて後、我ぞ人ぞと知りなん後には、兎も角もえせじ、從者ども呼びに遣りてこそ、出でても行かめと思ひ居たりけり。暁にこの童の來て、心も得ず門叩きなどして、我小舍人童と心得られて、捕へ縛られやせんずらんと、それぞ不便に覺えければ、女の童を出して、もしや聞きつくるとも、侍どもはしたなくいひければ、泣きつゝ歸りて屈まり居たり。かゝるほどに、暁方に

もしや聞きつくると―今昔には「若や來ると」とあり

うるせきやつ―巧慧なる者
引剝―追剝
けしうはあらず―其方に赴くも不都合なし
かたへ―少數の者

なりぬらんと思ふ程に、この童いかにしてか入りけん、入り來る音するを、侍、誰ぞその童はと、けしきどりて問へば、惡しく答へなんずと思ひ居たる程に、御讀經の僧の童子に侍りと名のる。さ名のられて疾く過ぎよといふ。賢く答へつる者かな、寄り來て、例呼ぶ女の童の名や呼ばんずらんと、又それを思ひ居たる程に、寄りも來で過ぎていぬ。この童も心得てけり、うるせきやつぞかし、さ心得ては、さりともたばかる事あらんずらんと、童の心を知りたれば、たのもしく思ひたる程に、大路に女の聲して、引剝ありて人殺すやとをめく。それを聞きて、この立てる侍ども、あれ搦めよや、けしうはあらじと言ひて、皆走りかゝりて、門をもえあけあへず、崩より走り出でて、何方へ去ぬるぞ、此方彼方と尋ね騷ぐ程に、此童の謀ることよと思ひければ、走り出でて見るに、門をば閉したれば門をば疑はず、崩のもとに、かたへは留りてとかくいふ程に、門のもとに走りよりて、鏁を捻ぢて引き抜きて、上ぐるまゝに馳せ退きて、築土走り過ぐる程にぞ、この童は馳せあひたる。具して三町計走り延びて、例のやうにのどかに歩みて、い

かにしつる事ぞといひければ、門共の例ならず閉されたるに合せて、崩に侍どもの立ち塞がりて、嚴しげに尋ね問ひさぶらひつれば、其所にては、御讀經の僧の童子と名のり侍りつれば、いで侍りつるを、それより罷り歸りて、とかくやせましと思ひ給へつれども、參りたりと知られ奉らでは、惡しかりぬべく覺え侍りつれば、聲を聞かれ奉りて、歸り出でて、この隣なる女の童のくぼまり居て侍るを、しや頭を取りて打ち伏せて、衣を剝ぎ侍りつれば、をめき候ひつる聲につきて、人々出でまうで來つれば、今はさりとも出でさせ給ひぬらんと思ひて、此方ざまに參りあひつるなりとぞいひける。童なれども、賢くうるせき者はかゝる事をぞしける。

いで侍りつる―今昔に「入れて候ひつる」とあるよろし

くぼまり―うづくまり

○今昔二十五、藤原保昌朝臣値袴垂語參照

袴垂保昌に逢ふ事

昔、袴垂とていみじき盜人の大將軍ありけり。十月ばかりに衣の用ありければ、衣少しまうけんとて、さるべき所々窺ひありきけるに、夜中ばかりに、人皆しづまりはてて後、月の朧なるに、衣數多著たりけるぬしの、指貫のそばはさみて、きぬの狩衣めきたる著て、唯一人笛吹きて、行きもやらずねり行けば、あはれこれこそ、我に衣得させんとて出でたる人なめれとおもひて、走りかゝりて衣を剝がんと思ふに　怪しく物の恐しく覺えければ、添ひて二三町ばかり往けども、我に人こそ附きたれと思ひたる氣色もなし。いよ〳〵笛を吹きて往けば、試みんと思ひて、足を高くして走り寄りたるに、笛吹きながら見かへりたる氣色、取りかゝるべくも覺えざりければ走り退きぬ。かやうに數多度とさまかうさまにするに、露ばかりも騷ぎたる氣色なし。希有の人かなと思ひて、十餘町ばかり具して行く。さりとてあらんやはと思ひて、刀を拔きて走りかゝりたる時にそのたび笛を吹き止みて、立ちかへりて、こは何者ぞと問ふに、心も失せて、我にもあらでついゐられぬ。又いかなる者ぞと問へば、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、引剝にさぶらふといへば、何者ぞと問へば、字袴垂となんいはれさぶらふと答ふれば、さいふ者ありと聞くぞ、危ふげに希有のやつかなといひて、共にまうでことばかり

そばはさみて―股立をとりてはさむなり

足を高くして―今昔に「足音を高くして」とあり

いひかけて、又同じやうに笛吹きて行く。この人の氣色、今は逃ぐともよも逃さじと覺えければ、鬼に神取られたるやうにて、共に行くほどに家に行きつきぬ。何所ぞと思へば、攝津前司保昌といふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚き衣一つを賜はりて、衣の用あらん時は參りて申せ、心も知らざらん人に取りかゝりて、汝あやまちすなとありしこそ、あさましくむくつけく恐しかりしか。いみじかりし人の有樣なりと、捕へられて後かたりける。

○今昔二十六、藤原明衡朝臣若時行女許語參照

明衡殃に逢はんと欲する事

昔博士にて、大學頭明衡といふ人ありき。若かりける時、さるべき所に宮仕しける女房をかたらひて、その所に入り臥さん事便なかりければ、その傍にありける下種の家を借りて、女房かたらひ出して臥さんといひければ、男あるじはなくて妻ばかりありけるが、いと易き事とて、おのれが臥す所より外に臥すべき所なかりければ、我臥し所を去りて、女房の局の疊を取り寄せて寢にけり。家あるじの男、我妻の密男すると聞きて、その密男、今宵なん逢はんと構ふると告ぐる人ありければ、來んを構へて、殺さんと思ひて、妻には遠く物へ行きて、今四五日かへるまじきといひて、そらいきをして伺ふ夜にてぞありける。家あるじの男、夜更けて立ち聞くに、男女の忍びて物言ふ氣色しけり。されば隱男來にけりと思ひて、密に入りて伺ひ見るに、我寢所に男女と臥したり。暗ければ慥にけしき見えず。男の鼾聲する方へやをらのぼりて、刀を逆手に拔き持ちて、腹の上と思しきほどを、探りて突かんと思ひて、腕を持ち上げて突き立てんとする程に、月影の板間より洩りたりけるに、指貫のくゝり長やかにて、ふと見えければ、それにきと思ふやう、我妻の許には、かやうに指貫著たる人はよも來じものを、若し人たがへしたらんは、いとほしく不便なるべき事と思ひて、手をひき返して、著たる衣などを探りける程に、女房ふと驚きて、此所に人の音するは誰ぞと、忍びやかにいふけはひ、我妻にあらざりければ、さればよと思ひて居退きけるほどに、この臥したる男も驚きて、誰ぞ

そらいきー虚行にて、偽りて他行の風をなすなり

思ひけるやう畫—此七字今昔によりて補ふ

宿にこそ—一本「こゝにこそ」とあり

誰ぞと問ふ聲を聞きて、我妻の下なる所に臥して思ひけるやう、畫我男の氣色の怪しかりつる、それが密に來て人違などするにやと覺えける程に、驚きさわぎて、あれは誰ぞ、盗人かなと罵る聲の我妻にてありければ、他人々の臥したるにこそと思ひて、走り出でて、妻が許にいきて髻をとりて引き伏せて、如何なる事ぞと問ひければ、妻さればよと思ひて、かしこういみじき過すらん、彼所には上臈の今宵ばかりとて借らせ給ひつれば、貸し奉りて、我は宿にこそ臥したれ、希有のわざする男かなと罵る時にぞ、明衡も驚きて、いかなる事ぞと問ひければ、その時に男出で來ていふやう、おのれは甲斐殿の雜色某と申す者にて候ふ、一家の君おはしけるを知り奉らで、ほと〳〵過をなん仕るべく候ひつるに、希有に御指貫のくゝりを見つけて、しか〳〵思ひ給へてなん、腕をひきしゞめて候ひつるといひて、いみじう詫びける。甲斐殿といふ人は、この明衡の妹の男なりけり。思ひかけぬ指貫のくゝりの德に、希有の命をこそ生きたりけれ。かゝれば人は忍ぶといひながら、あやしの所には立ち寄るまじきなり。

○今昔十、嫗毎日見卒堵婆付血語参照

しみこほり―さゆる意

唐卒都婆に血つくる事

昔、唐土に大なる山ありけり。その山の巓に、大なる卒都婆一つ立てりけり。その山の麓の里に、年八十ばかりなる女の住みけるが、日に一度、その山の峯にある卒都婆を必ず見けり。高く大なる山なれば、麓より峯へ登るほど、嶮しく岨しく道遠かりけるを、雨降り雪降り、風吹き雷鳴り、しみこほりたるにも、又暑く苦しき夏も一日も缺かず、必ず登りてこの卒都婆を見けり。かくするを人え知らざりけるに、若き男どもも童も、夏暑かりけるころ峯にのぼりて、卒都婆のもとに居つゝ涼みけるに、この女汗を拭ひて、腰二重なるものの杖にすがりて、卒都婆のもとに來て、卒都婆を廻りければ、拜み奉るかと見れば、卒都婆をうち廻りては、即ち返り〳〵する事一度にもあらず、數多度この涼む男どもに見えにけり。この女は、何の心ありて、かくは苦しきにするかと怪しがりて、今日見えば、この事問はんと言ひ合せける程に、常の事なれば、この女匂ふ〳〵登りけり。男ども女にいふやう、わ女は何の心によりて、我等が涼みに來るだに、暑く苦しく大事なる道を、涼まんと思ふによりて登り來るだにこそあれ、涼むこともなし、別にする事もなくて、卒都婆を見廻るを事にて、日々に登りおるゝこそ怪しき女のわざなれ、この故知らせ給へと言ひければ、この女、若き主たちは實にあやしと思ひ給ふらん、かく詣で來てこの卒都婆見ることは、この頃の事にしも侍らず、物の心知り始めてより後この七十餘年、日毎にかく登りて卒都婆を見奉るなりといへば、その事の怪しく侍るなり、その故をの給へと問へば、おのれが親は、百二十にてなん亡せ侍りにし、祖父は百三十ばかりにてぞ失せ給へりし、それに又父祖父などは、二百餘年までぞ生きて侍りける、其人々の言ひ置かれたりけるとて、此卒都婆に血の附かん折になん、此山は崩れて深き海となるべきとなん父の申し置かれしかば、麓に侍る身なれば、山崩れなで打掩はれて死にもぞすると思へば、若し血附かば逃げて退かんとて、かく日毎に見侍るなりといへば、この聞く男どもをこがり嘲りて、恐しきことかな、崩れん時は告げ給へなど笑

親―今昔に父とあり
それに又父祖父などは―今昔に「又それが父や祖父などは」とあるよろし

をこがり―馬鹿にすること

ひけるをも、我をあざけりていふとも心得ずして、さらなり、いかでかは我一人逃げんと思ひて、告げ申さざるべきといひて、歸り降りにけり。この男ども、この女は今日はよも來じ、明日又來て見んに、威して走らせて笑はんと言ひ合せて、血をあやして卒都婆に能く塗り附けて、この男ども歸りおりて、里の者どもに、この麓なる女の日毎に峯に登りて、卒都婆見るを怪しさに問へば、云々なんいへば、明日おどして走らせんとて、卒都婆に血を塗りつるなり、さぞ崩るらんものやなど言ひ笑ふを、里の者ども聞き傳へて、をこなることのためしに引き笑ひけり。かくて又の日女登りて見るに、卒都婆に血のおほらかにつきたりければ、女うち見るまゝに色を違へて仆れまろび、走り歸りて叫び言ふやう、この里の人々、疾く逃げ退きて命生きよ、この山は只今崩れて、深き海になりなんとすと、曽く告げ廻して、家に行きて、子孫共に家の具足どもおほせ持たせて、おのれも持ちて、手惑して里うつりしぬ。これを見て血附けし男ども、手打ちて笑ひなどする程に、その事ともなくさどめき罵りあひたり。風の吹き來るか、雷の鳴るかと思ひ

血をあやして―血を滿らしそめて

もはらかー多く

具足―道具

怪むほどに、空もつゝ闇になりて、あさましく恐しげにて、この山震ぎ立ちにけり。こはいかに〳〵と罵り合ひたる程に、唯崩れに崩れもてゆけば、女は實しけるものをなど言ひて、逃げ得たる者もあれども、親の行方も知らず、子をも失ひ、家の物の具も知らずなどして、をめき叫びあひたり。この女一人ぞ子孫も引き具して、家の物の具一つも失はずして、かねて逃げ退きて靜に居たりける。かくてこの山皆崩れて、深き海となりにければ、これを嘲り笑ひし者どもは皆死にけり。あさましき事なりかし。

つゝ闇―まつくらやみ

○此話述異記搜神記等にいづ

業村強力の學士に逢ふ事

昔、業村といふ相撲ありけり。時に國々の相撲どものぼり集りて、相撲節待ちけるほど、朱雀門に集りて涼みけるが、その邊遊び行くに、大學の東門を過ぎて、南ざまに行かんとしけるを、大學の衆共も數多東の門に出でて、涼みて立てりけるに、この相撲どもの過ぐるを通さじとて、なりせいせん、なりたかしといひて、立ち塞がりて通さどりけれ

○今昔二十三、大學衆試相撲人成村語參照

相撲節―古は七月に相撲人を禁苑に召して角力せしめらるゝことあり、其を相撲節會といふ

大學の衆―大學の學生

なりせいせん―

ば、さすがにやごつなき所の衆共のする事なれば、破りてはえ通らぬに、長矮らかなる衆の、冠袍衣、他人よりは少しよろしきが、中に優れて出で立ちて、痛く制するがありけるを、業村は見つめてけり。いざ〳〵歸りなんとて本の朱雀門に歸りぬ。そこにていふ、この大學の衆惡しき奴どもかな、何の心に我等をば通さじとはするぞ、唯通らんと思ひつれども、さもあれ、今日は通らで明日通らんと思ふなり、長矮やかにて、中に優れてなりせいせんといひて、通さじと立ち塞がる男、にくきやつなり、明日通らんにも、必ず今日のやうにせんずらん、何主、その男が尻鼻、血あゆばかり必ず蹴給へといへば、さいはるゝ相撲脇をかきて、おのれが蹴てんには、いかにも生かじものを、敖議にてこそ生かめといひけり。この尻蹴よと言はるゝ相撲は、おほえある力他人よりは優れ、走りとくなどありけるを見て、業村もいふなりけり。さてその日は、各家にかへりぬ。又の日になりて、昨日參らざりし相撲など數多召し集めて、人がちになりて通らんと構ふるを、大學の衆もさや心得にけん、昨日よりは人多くなりて、かしがましうなりせいせん

聲高し靜にせよといはんが如し

尻鼻―尻べた

脇をかきて―腕の脇をかくにて自負得意のさま

敖議にてこそ云云―今昔に「辛くてこそ生かめ」とあり

と言ひ立てりけるに、この相撲共うち群れて歩みかゝりたり。昨日優れて制せし大學の衆、例の事なれば、優れて大路の中に立ちて、過さじと思ふ氣色したり。業村尻蹴よといひつる相撲に、目をくはせければ、この相撲人より長高く、大きにわかく勇みたる男にて、くゝり高やかに搔き上げて、さし進み歩みよる。それに續きて、他相撲も唯とほりに通らんとするを、かの衆共も通さじとする程に、尻蹴んとする相撲、かくいふ衆に走りかかりて、蹴倒さんと足をいたくもたげたるを、この衆は目をかけて、背を撓めて違ひければ、蹴外して足の高くあがりて、のけざまになるやうにしたる足を、大學の衆取りてけり。その相撲を、細き杖などを人の持ちたるやうに引下げて、かたへの相撲に走りかゝりければ、それを見てかたへの相撲逃げけるを追ひかけて、其手に下げたる相撲をば擲げければ、振りぬきて、二三段ばかり擲げられて仆れ伏しにけり。身碎けて、起き上るべくもなくなりぬ。それをば知らず、業村がある方ざまへ走りかゝりければ、業村も目をかけて逃げけり。心もおかず追ひければ、朱雀門の方ざまに走りて、脇の門より走り入る

目をくはせ―目くばせすること

かたへの―一方の

振りぬきて―振り飛ばされて

心もおかず―今昔に「所もおかず」とあり

を、やがてつめて走りかゝりければ、抻へられぬと思ひて、式部省の築土越えけるを、引き留めんとて手をさしやりたりけるに、早く越えければ、他所をばえ抻へず、片足少し下りたりける踵を、沓加へながら抻へたりければ、沓の踵に足の皮を取り加へて、沓の踵を、刀にて斬りたるやうに、引き切りて取りけり。業村、築土の内に立ちて足を見ければ、血走りて留まるべくもなし。沓の踵切れて失せにけり。我を追ひける大學の衆、あさましく力あるものにてぞありけるなめり。尻蹴つる相撲をも、人杖につかひて擲げ碎くめり。世の中廣ければ、かゝる者のあるこそ恐しきことなれ。投げられたる相撲は、死に入りたりければ、物にかき入れて、荷ひて持て行きけり。この業村、かたの助に云々の事なん候ひつる、かの大學の衆は、いみじ相撲にさぶらふめり。業村と申すとも、あふべき心地仕らずと語りければ、かたの助は宣旨申し下して、式部丞なりとも、その道に堪へたらんはと言ふ事あれば、まして大學の衆はなんでふことかあらんとて、いみじう尋ね求められけれども、その人とも聞えずして止みにけり。

沓加へながら―沓はきたるまゝ

人杖―人間を杖のやうにふりまはすこと

かたの助―今昔に「方の將」とあり、相撲の官人にて左方右方の取締なるべし

○今昔二十、天狗現佛座木末語参照

畳の装束―東帯

檳榔の車―檳榔の葉をさきて屋方の簾に垂れたる車

あからめ―脇目

ふためく―バタバタするさま

柿木に佛現ずる事

昔、延喜の帝の御時五條の天神のあたりに、大なる柿の木の實ならぬあり。その木のうへに、佛現れておはします。京中の人擧りて參りけり。馬車も立てあへず、人もせきあへず拜みのゝしりけり。かくするほどに五六日あるに、右大臣殿心得ず思し給ひける間實の佛の世の末に出で給ふべきにあらず、我行きて試みんとおぼして、畫の裝束麗しくして、檳榔の車に乘りて、御前多く具して、集りつどひたる者ども退けさせて、車かけはづして、榻を立てて、木末を目もたゝかずあからめもせずして、まもりて一時ばかりおはするに、この佛誓しこそ花もふらせ、光をも放ち給ひけれ。あまりに〳〵守られて、しわびて、大なるくそとびの羽折れたる、土に落ちて惑ひふためくを、童ども寄りて打ち殺してけり。大臣は、さればこそとて還り給ひぬ。さて時の人この大臣を、いみじく賢き人にておはしますとぞのゝしりける。

あばれ―荒れ

あたけなる―頬敗せる

八丈―絹布の名、尾張八丈美濃八丈等の名あり

大太郎盗人の事

昔大太郎とて、いみじき盗人の大將軍ありけり。それが京へ上りて、物取りぬべき所あらば、入りて物取らんと思ひて、窺ひ歩きけるほどに、周圍もあばれ、門などもかたへは倒れたる、横ざまに寄せ懸けたる所のあたけなるに、男といふ者は一人も見えずして女のかぎりにて、張物多く取り散してあるに合せて、八丈賣るものなど數多呼び入れて、絹多く取り出でて、選り換へさせつゝ物どもを買へば、物多かりける所かなと思ひて、立ちとまりて見入るれば、折しも風の、南の簾を吹きあげたるに、簾の内に何の入りたりとは見えねども、皮子のいと高くうち積まれたる前に、蓋開きて、絹なめりと見ゆる物取り散してあり。これを見て、うれしきわざかな、天道の我に物を賜ふなりけりと思

たぎり湯―沸騰したる湯

見ふせて―見伏せてにて、見すます意かけしきけなるもの―怪しき氣なるもの

ひて、走りかへりて、八丈一疋、人に借りて持て來て賣るとて、近く寄りて見れば、内にも外にも男といふ者は一人もなし。唯女どもの限して、見れば皮子も多かり。物は見えねど、うづだかく蓋掩はれ、絹なども殊の外にあり。布うち散らしなどして、いみじく物多くありげなる所かなと見ゆ。たかくいひて、八丈をば賣らで持ちてかへりて主に取らせて、同類どもに、かゝる所こそあれと言ひ廻して、その夜來て門に入らんとするに、たぎり湯を面にかくるやうに覺えて、ふつとえ入らず。こはいかなる事ぞとて、集りて入らんとすれど、せめて物の恐しかりければ、あるやうあらん、今宵は入らじとて歸りにけり。翌朝、さてもいかなりつる事ぞとて、同類など具して、賣物なぞ持たせて來て見るに、いかにも煩しき事なし。物多くあるを、女どものかぎりして取出で取納めすれば、事にもあらずと返す〳〵思ひ見ふせて、又くるれば、よく〳〵認めて入らんとするに、猶恐しく覺えてえ入らず、わぬしまづ入れ〳〵と言ひたちて、今宵もなほ入らずなりぬ。又翌朝も同じやうに見ゆるに、猶けしきけなるものと見えず、唯我憶病にて覺ゆるなめ

身をなきになして―身をなきものに思ひなしてかたへ―自餘の者

矢をつまよるおと―爪にて矢を捻る音背をそらしたるやう―背をうしろへ引戻さるゝやう

りとて、又その夜よく認めて行き向ひて立てるに、日比よりなほ物おそろしかりければ、こはいかなる事ぞといひて、かへりていふやうは、事を起したらん人こそはまづ入らめ、まづ大太郎が入るべきといひければ、さもいはれたりとて、身をなきになして入りぬ。それに取りつきて、かたへも入りぬ。入りたれども、猶物の恐しければ、やはら歩み寄りて見れば、あばらなる屋の内に火燈したり。母屋の際に懸けたる簾をば下して、簾の外に火をば燈したり、誠に皮子おほかり。かの簾の中の恐しく覺ゆるに合せて、簾の内に矢をつまよるおとのするが、その矢の來て、身に立つ心地して、いふばかりなく恐しく覺えて、歸り出づるも背をそらしたるやうに覺えて、構へて出でえで、汗を拭ひて、こはいかなることぞ、あさましく恐しかりつる爪よりの音かなと、言ひ合せてかへりぬ。そのつとめて、その家の傍に、大太郎が知りたりける人のありける家に行きたれば、見つけていみじく饗應して、いつのぼり給へるぞ、覺束なく侍りつるなどいへば、只今參うで來つるまゝに參うで來るなりといへば、土器參らせんとて酒沸して、黑き土器の大

立ち走りたちけるものは云々―立ち走りけるものか、うつぶしに倒れにけるの誤なるべし

忠家―道長の孫にして長家の子

びゝしき―美々しき

なるを盃にして、土器取りて大太郎にさして、家あるじ飲みて土器渡しつ。大太郎取りて、酒を一土器受けて持ちながら、この北には誰が居給へるぞといへば、驚きたる氣色にて、まだ知らぬか、大矢のすけたけのぶの、この頃上りて居られたるなりといふに、さは入りたらましかば、皆數を盡して射殺されなましと思ひけるに、物もおぼえず臆して、その受けたる酒を、家あるじに頭よりうちかけて、立ち走りたちけるものは、うつぶしに倒れにけり。家あるじあさましと思ひて、こはいかに〳〵に言ひけれど、かへりみだにもせずして逃げて去にけり。大太郎がとられて、武者の城の恐しきよしを語りける なり。

藤大納言忠家物言ふ女放屁の事

今は昔、藤大納言忠家といひける人、いまだ殿上人におはしける時、びゝしき好色なりける女房と物言ひて、夜更くるほどに、月は晝よりも明かりけるに、堪へ兼ねて御簾を

扇をかきて―扇を女の身にかけてくるめき―慌て騒ぎ　ならしてけり―放屁したること　あやまち―放屁の事をさす

うちかづきて、長押の上に昇りて、扇をかきて引き寄せられける程に、髪を振りかけて、あなあさましと言ひてくるめきける程に、いと高くならしてけり。女房は言ふにも堪へず、くだ〳〵として寄り臥しにけり。この大納言、心憂き事にも逢ひぬるかな、世にありても何にかはせん、出家せんとて、御簾の裾を少し搔き上げて抜足をして、疑なく出家せんと思ひて、二間ばかりは行くほどに、そも〳〵その女房あやまちせんからに、出家すべきやうやあると思ふ心またつきて、たど〳〵と走り出でられにけり。女房はいかがなりけん知らずとか。

○古事談巻二参照　定頼―公任の子　時の關白―教通公なり

小式部内侍定頼卿の經にめでたる事

今は昔、小式部の内侍に、定頼中納言物言ひわたりけり。それにまた時の關白通ひ給ひけり。局に入りて臥し給ひたりけるを知らざりけるにや、中納言寄り來て叩きけるを、局の人かくとや言ひたりけん、沓をはきて行きけるが、少し歩み退きて、經をはたとうちあけて讀みたりけり。二聲ばかりまでは、小式部内侍、きと耳を立つるやうにしければ、この入りて臥し給へる人、怪しと思しけるほどに、少し聲遠うなるやうにて、四聲五聲ばかり、行きもやらで讀みたりける時、うといひて後ざまにこそふしかへりたりけれ。この入り臥し給へる人のさばかり堪へ難う、恥しかりしことこそなかりしかと、後にの給ひけるとかや。

山伏船祈りかへす事

これも今は昔、越前の國かふらぎのわたりといふ所に、渡せんとてものども集りたるに、山伏あり、けいたう房といふ僧なりけり。熊野御嶽はいふに及ばず、白山、伯耆の大山、出雲の鰐淵、大方修行し残したる所なかりけり。それにこのかふらぎの渡に行きて渡らんとするに、渡りせんとする者雲霞の如し。各物を取りて渡す。このけいたう房渡せといふに、渡守聞きも入れで漕ぎ出づ。其時にこの山伏、いかにかくは無下にはあるぞといい

かふちぎ―南條郡甲樋城浦　物―渡賃　無下にはあるぞ―甚だ無情なるをいふ

へども、大方耳にも聞き入れずして漕ぎ出す。その時にけいたう房、齒をくひ合せて、念珠をもみちぎる。この渡守見かへりて、をこの事と思ひたる氣色にて、三四町ばかり行くを、けいたう房見遣りて、足を砂子に脛の半ばかり踏み入りて、目も赤く睨みなして、數珠を碎けぬともみちぎりて、召し返せ〳〵と叫ぶ。猶行き過ぐる時に、けいたう房、袈裟と念珠とを取り合せて、汀近く歩み寄りて、護法召しかへせ、召し返さずば、長く三寶に別れ奉らんと叫びて、この袈裟を海に投げ入れんとす。それを見て、この集ひ居たる者ども、色を失ひて立てり。かく言ふ程に風も吹かぬに、この行く船のこなたへよりく。それを見てけいたう房、よるめるは〳〵、早う率ておはせ〳〵と、すはなちをして、見る者色を違へたり。かくいふほどに、一町ばかりが内に寄り來たり。その時けいたう房、さて今はうち返せ〳〵と叫ぶ。その時に集ひて見る者ども、一聲にむざうの申すやうかな、ゆゑしき罪にも候ふ、さておはしませ〳〵といふ時、けいたう房今少し氣色變りて、はやうち返し給へと叫ぶ時に、この渡船に二十餘人乘りたる者、つぶり

數珠を碎けぬと—數珠をも碎けよとばかり
早う率てもはせ—護法にいふなり
すはなち—誤字なるべし
むざう—無慙の字音

となげ返しぬ。その時けいたう房汗を押し拭ひて、あないたのやつばらや、まだ知らぬかといひて立ち歸りにけり。世の末なれども、三寶おはしましけりとなん。

あないたのやつばら云々—あゝ愚かの者や、我法力の程を知らぬか

鳥羽僧正國俊と戯るゝ事

これも今は昔、法輪院大僧正覺猷といふ人おはしけり。その甥に陸奥前司國俊、僧正の許へ行きて、參りてこそ候へといはせければ、只今見參すべし、そなたに暫しおはせとありければ、待ち居たるに、二時ばかりまで出であはねば、生腹だたしう覺えて、出でなんと思ひて、供に具したる雜色を呼びければ、出で來たるに、沓もてこと言ひければ持て來たるをはきて、出でなんといふに、この雜色がいふやう、僧正の御房の陸奥殿に申したれば、とうのれとあるぞ、その車率て來とて、小御門より出でんと仰事候ひつれば、やうぞ候ふらんとて、牛飼載せ奉りて候へば、待たせ給へと申せ、時のほどぞあらんずる、やがて歸りこんずるぞとて、早う奉りて出させ給ひ候ひつるに、今はかうて一

覺猷—源隆國の子
國俊—中納言隆俊の子
生腹だたしう—ムズ〳〵と腹だたしくおもふなり
とうのれ—疾く乘れ

時には過ぎ候ひぬらんといへば、わ雑色は不覺のやつかな、御車をかくめしのさぶらふはと、我にいひてこそ貸し申さめ、不覺なりといへば、うちさしのきたる人にもおはしまさず、やがて御尻切奉りて、きと〳〵よく申したるぞと仰事候へば、力及び候はざりつるといひければ、陸奥の前司歸り上りて、いかにせんと思ひ廻すに、僧正は定りたる事にて、湯槽に藥をこまぐ〳〵と切りて、一はた入れて、それが上に莚を敷きて、歩き廻りてはさうなく浴室へ行きて、裸體になりて、えさいかさいとりふすまといひて、湯槽にさくとのけざまに臥すことをぞし給ひける。陸奥前司よりて、莚を引き上げて見れば、誠に藥をこまぐ〳〵と切り入れたり。それを浴室の垂布を解きおろして、この藥を皆取り入れて、能く包みて、その湯槽に湯桶を下に取り入れて、それが上に碁盤を裏返して置きて、莚を引き掩ひて、さりげなくて、垂布に包みたる藥をば、大門の脇に隠し置きて待ち居たる程に、二時あまりありて、僧正小門より歸る音しければ、違ひて大門へ出でて、歸りたる車呼び寄せて　車の尻にこの包みたる藥を入れて、家へはやらかに遣りておりて、

うちさしのきー叔父甥の中なればよそ〳〵しき人ならずと也

一はたー一パイといふに同じ

えさいかさいとりふすまー僧正が湯槽に入る時誦する咒文と見えたり

さくとーチャット

違ひてー行きちがひに

はやらかー早く

この藥を牛のあちこち歩き困じたるに喰はせよとて、牛飼童に取らせつ。僧正は例の事なれば、衣ぬぐ程もなく例の浴室へ入りて、えさいかさいとりふすまといひて、湯槽へ躍り入りて、仰けざまにゆくりもなく臥したるに、碁盤の足のいかりさしあがりたるに、尻骨を荒うつきて、年たかうなりたる人の死に入りて、さしそりて臥したりけるが、その後音なかりければ、近う仕ふ僧寄りて見れば、目をかみに見つけて死に入りてねたり。こはいかにといへど答もせず。寄りて顔に水吹きなぞして、とばかりありてぞ息の下におろ〳〵いはれける。このたはぶれいとはしたなかりけるにや。

繪佛師良秀家の燒くるを見てよろこぶ事

これも今は昔、繪佛師良秀といふありけり。家の隣より火出で來て、風おし掩ひて責めければ、逃げ出でて大路へ出でにけり。人の書かする佛もおはしけり。また衣絹妻子なども、さながら内にありけり。それも知らず、唯逃げ出でたるをことにして、向ひのつら

ゆくりもなくー不意にいかりー錨の形に似たるよりいふか、又は突起したるさまを怒りといへるにや

人の書かする佛もおはしけりー人より佛を書きてくれよと頼まれ

れたるものもありとなり

せうとくー所得なり、この炎のために軍法を悟り得たれば所得とはいふなり

わたうたちー和冨達にて、汝等の意

よぢり不動ー火災のよぢれもぢれて眞に迫りたるより此名あり し也

に立てり見れば、既に我家に移りて、烟炎くゆりけるまで、大方向ひのつらに立ちてながめければ、あさましき事とて、人ども來訪ひけれど騒がず。いかにと人言ひければ、向ひに立ちて家の燒くるを見て、うちうなづきて時々笑ひけり。あはれしつるせうとくかな、年比はわろく書きけるものかなといふ時に、訪問に來たる者ども、こはいかにかくては立ち給へるぞ、あさましきことかな、物のつき給へるかといひければ、なんでふ物のつくべきぞ、年比不動尊の火餤を惡しく書きけるなり、今見れば、かうこそ燃えけれと心得つるなり、これこそせうとくよ、この道を立てて世にあらんには、佛だによく書き奉らば、百千の家も出できなん、わたうたちこそさせる能もおはせねば、物をも惜み給へといひて、嗤笑ひてこそ立てりけれ。その後にや、良秀がよぢり不動とて、今に人々めであへり。

虎の鰐とりたる事

○今昔二十九、鎮西人渡新羅値

虎語參照

三四十丈云々ー今昔には「三四丈ばかりたるに」とあり

つゞまりゐてー蹲り居て

ひちがりをるーひちびたくなりて居る

これも今は昔、筑紫の人商しに新羅に渡りけるが、商ひはてて歸る路に、山の根に添ひて船に水汲み入れんとて、水の流れ出でたる所に船を留めて水を汲む。その程船に乘りたるもの、舷に居てうつぶして海を見れば、山のかげ寫りたり。高き峰の三四十丈ばかり餘りたる上に、虎つゞまりゐて物を伺ふ、その影水にうつりたり。その時に人々に告げて、水汲むものを急ぎ呼び乘せて、手ごとに艫を押して急ぎて船を出す。その時に虎躍りおりて船に乘るに、船は疾くいづ。虎は落ち來るほどのありければ、今一丈ばかりを、え躍りつかで海に落ち入りぬ。船を漕ぎて急ぎて行くまゝに、この虎に目をかけて見る。暫時ばかりありて、虎海より出で來ぬ。泳ぎて陸ざまに上りて、汀に平なる石の上に登るを見れば、左の前足を、膝より嚙み食ひ切られて血あゆ。鰐にくひ切られたるなりけりと見る程に、その切れたる所を、水に浸してひらがりをるを、如何にするかと見るほどに、沖の方より、鰐、虎の方をさして來ると見る程に、虎右の前足をもて、鰐の頭に爪を打ち立てて、陸ざまに投げ上ぐれば、一丈ばかり濱に投げあげられぬ。の

なえ〳〵―なよなよ

手を立てたるやうー斷崖の形容

力強く早からには―今昔には「力の強く足の早からんには」とあり

よきを取られて―善きと斧とをかけていへり、わりは 斧の 縁

けざまになりてふためく顧の下を躍り懸りて、食ひて二度三度ばかりうち振りて、なえなえとなして、肩にうち懸けて、手を立てたるやうなる岩の五六丈あるを、三つの足を持ちて、くだり坂を走るが如く登りて行けば、船の内なる者ども、これが所業を見るに、なからは死に入りぬ。船に飛びかゝりたらましかば、いみじき劔刀を抜きて合ふとも、かばかり力強く早からんには、何事をすべきと思ふに、肝心失せて船漕ぐそらもなくてなん、筑紫にはかへりけるとかや。

樵夫歌の事

今は昔、樵夫の山守に斧を取られて、わびし心うしと思ひて、頬杖つきて居りける。山守見て、さるべきことを申せ、取らせんといひければ、

悪しきだになきはわりなき世の中によきを取られて我いかにせん

と詠みたりければ、山守返しせんと思ひて、こゝ〳〵とうめきけれど、えせざりけり。さ

て斧かへし取らせてければ、嬉しと思ひけりとぞ。人はたゞ歌をかまへて詠むべしと見えたり。

語、あしき、よきに木を含めたり

伯の母の事

たけの大夫―平維幹常陸多氣邑に居たるよりいふ

今は昔、たけの大夫といふ者の、常陸より上りてうれへするころ、むかひに、越前守といふ人の許に經誦しけり。この越前守は伯の母とて、世にめでたき人、歌よみのおやなり。妻は伊勢の大輔、姫君達數多あるべし。たけの大夫徒然に覺ゆれば、聽聞に參りたりけるに、御簾を風の吹きあげたるに、なべてならず美しき人の紅の一重かさね著たるを見るより、この人を妻にせばやと、いりもみ思ひければ、その家の上童を語らひて問ひ聞けば、大姫御前の紅は奉りたると語りければ、それに語らひつきて、我に盗ませよといふに、思ひかけずえせじと言ひければ、さらばその乳母を知らせよといひければ、それはさも申してんとて知らせてけり。さていみじく語らひて、金百兩取らせなどして、この

たけの大夫―平維幹常陸多氣邑に居たるよりいふ
うれへ―訴訟すること
越前守―越前守は筑前守の誤にて高階成順をさす、其女が即ち伯の母なり
伯の母―神祇伯康資王の母なれば
いふなり
世にめでたき人―一本「人」の字なし
いりもみ―さまざまに心を碎きて思ふこと

姫君を盗ませよと責めいひければ、さるべき契にやありけん、盗ませてけり。やがて乳母うち具して、常陸へ急ぎ下りにけり。跡に泣き悲めどかひもなし。程經て乳母音づれたり。あさましく心憂しと思へども、いふかひなき事なれば、時々うち音づれて過ぎけり。伯の母、常陸へかくいひやり給ふ。

にほひきやみやこの花は東路のこちのかへしの風の告げしは

かへし、姉、

吹き返すこちのかへしは身にしみき都の花のしるべと思ふに

年月へだたりて、伯の母常陸守の妻にて下りけるに、姉はうせにけり。女二人ありけるが、かくと聞きて參りたりけり。田舍の人とも見えず、いみじくしめやかに恥しげによかりけり。常陸守のうへを、昔の人に似させ給ひたりけるとて、いみじく泣き合ひたりけり。四年が間名聞にも思ひたらず、用事などもいはざりけり。任はてて上るをりに、常陸守、無下なりける者どもかな、かくなん上ると言ひに遣れと、男にいはれて、伯の母

風の告げしは―後拾遺には「風につけしは」とあり
姉―前に大姫御前とありし人なり
こちのかへし―西風
うへ―奥方
四年が間云々―常陸守任期四年の間二人の女國司の妻を伯母にもつ事を名譽にも思はず

上るよし言ひに遣りたりければ、うけたまはりぬ、參り候はんとて、明後日上らんとての日參りたりけり。えもいはぬ馬、一つを寶にするほどの馬十匹づつ、二人して、又皮子おほせたる馬ども百匹づつ、二人して奉りたり。何とも思ひたらず、かばかりの事したりとも思はず、うち奉りて歸りにけり。常陸守のありける　常陸四年が間のものは、何ならず、その皮子のものどもしてこそ、萬の功德も何もし給ひけれ。ゆゝしかりけるものどもの、心の大きさ廣さかなと語られけるとぞ。この伊勢の大輔の子孫は、めでたき幸福人多く出で來給ひたるに、大姫君の、かく田舍人になられたりける、あはれに心憂くこそ。

常陸守のありける―常陸守の申されける

同人佛事の事

今は昔、伯の母佛供養しけり。永緣僧正を請じて、樣々の物どもを奉る中に、紫の薄樣に包みたるものあり。あけて見れば、

永緣僧正―式部丞永相の子

朽ちにける長柄の橋のはしばしら法のためにも渡しつるかな

長柄の橋のきれなりけり。又の日まだつとめて、若狹阿闍梨覺緣といふ人、歌よみなるが來たり。あはれこのことを聞きたるよと僧正おぼすに、御懷より名簿を引き出でて奉る。この橋のきれ給はらんと申す。僧正かばかりの希有のものは、いかでかとて、何しにか取らせ給はん、口惜しとてかへりにけり。すきゞしくあはれなる事ども也。

名簿―名刺

藤六の事

今は昔、藤六といふ歌よみありけり。下種の家に入りて、人もなかりける折を見つけて入りにけり。鍋にある物をすくひける程に、家あるじの女水を汲みて、大路の方より來て見れば、かくすくひ喰へば、いかにかく人もなき所に入りてかくはする、物をばまるぞ。あなうたてや、藤六にこそいましけれ、さらば歌詠み給へといひければ、

昔より阿彌陀佛のちかひにて煑ゆるものをばすくふとぞ知る

藤六―藤原輔相、弘經の第六子なる上り藤六といふ　鍋にある―活本「鍋ににける」とあり　ちかひにて云々―誓と甑(カヒ)　救ふと沙ふとに掛く

とこそよみたりけれ。

多田新發意郎等の事

○今昔十七、聊敬地藏菩薩得活人語參照

これも今は昔、多田滿仲の許に、猛く惡しき郎等ありけり。物の命を殺すをもて業とす。野に出で山に入りて、鹿を狩り鳥を捕りて、少かの善根する事なし。或時出でて狩する間、馬を馳せて鹿追ふ。矢をはげ弓をひきて、鹿に隨ひて走らせて行く道に寺ありけり。その前を過ぐる程に、きと見遣りたれば、内に地藏立ち給へり。左の手を持ちて弓を取り、右の手して笠をぬぎて、聊か歸依の心を出して馳せ過ぎにけり。其後いくばくの年をへずして、病つきて、日比よく苦み煩ひて命絶えぬ。冥途に行き向ひて、閻魔の廳に召されぬ。見れば多くの罪人、罪の輕重に隨ひて打ちせため、罪せらるゝ事いとみじ。我一生の罪業を思ひ續くるに、涙墮ちてせんかたなし。かゝる程に一人の僧出で來りて

せため―痛く責め

の給はく、汝を助けんと思ふなり、早く古鄕に歸りて、罪を懺悔すべしとの給ふ。僧に問ひ奉りていはく、これは誰の人のかくは仰せらるゝぞと。僧答へ給はく、我は汝鹿を追うて、寺の前を過ぎしに、寺の中にありて、汝に見えし地藏菩薩なり、汝罪業深重なりといへども、聊か我に歸依の心を起しし功によりて、我今汝を助けんとするなりとの給ふとおもひて、よみがへりて後は、殺生を長くたちて、地藏菩薩に仕う奉りけり。

因幡國別當地藏作りさしたる事

○今昔十七、養造地藏佛師得活人語參照

さかの里―今昔に「野坂の鄕」とあり

ちかなか―今昔に「千包」とあり

專當法師―一寺の事務をすべ掌る僧

これも今は昔、因幡の國高草の郡、さかの里に伽藍あり、黑龍寺と名づく。此國の前の國司ちかなか造れるなり。其所に年老いたる者語り傳へて曰く、この寺に別當ありき。家に佛師を呼びて、地藏を作らする程に、別當が妻異男に語らはれて、跡を暗うして失せぬ。別當心を惑はして、佛の事をも佛師をも知らで、里村に手を別ちて尋ね求むる間七八日を經ぬ。佛師ども檀那を失ひて、空を仰ぎて手を徒にして居たり。その寺の專當法師これを見て、善心を興して食物を求めて佛師に喰はせて、僅に地藏の木作ばかりをし

瓔珞―佛像の頭胸等にかくる珠玉の飾

たてまつりて、彩色瓔珞をばえせず。その後この專當法師、病づきて命終りぬ。妻子悲み泣きて、棺に入れながら、捨てずしておきて、猶これを見るに、死して六日といふ日の未の時ばかりに、俄にこの棺はたらく。見る人おぢ恐れて逃げ去りぬ。妻泣き悲みて、あけて見れば、法師よみがへりて水を口に入れ、やう〳〵ほど經て冥途の物がたりす。大なる鬼二人きたりて、我を捕へて、追ひ立てて廣き野を行くに、白き衣著たる僧出で來て、鬼ども、この法師疾くゆるせ、我は地藏菩薩なり、因幡の國の黑龍寺にて我を造りし僧なり、佛師等食物なくて日比經しに、この法師信心をいたして、食物を求めて、佛師等を供養して我像を造らしめたり、この恩忘れがたし、必ず許すべきものなりとの給ふほどに、鬼ども許し終りぬ。懇切に道をしへてかへしつと見て、いきかへりたるなりといふ。その後この地藏菩薩を、妻子ども彩色し供奉し奉りて、長く歸依し奉りける。今この寺におはします。

伏見修理大夫―俊綱、宇治殿は賴通

國行ひける―國司になりて其の國を治むることいちはやく―荒び給ふことなり

國にはちまれて―領内にありてむつかりて―憤怒していやみ―嫌ひ憎みしちん所ども點ぜよ―所領を差押へよ

伏見修理大夫俊綱の事

これも今は昔、伏見修理大夫は宇治殿の御子にておはす。あまり公達多くおはしければ、やうをかへて、橘俊遠といふ人の子になし申して、藏人になして、十五にて尾張守になし給ひてけり。それに尾張に下りて國行ひけるに、その頃熱田の神、いちはやくおはしまして、おのづから笠をもぬがず、馬の鼻を向け、無禮を致すものをば、やがて立所に罰せさせおはしましければ、大宮司の威勢國司にも勝りて、國のものどもおぢ恐れたりけり。それにこの國司下りて、國の沙汰どもあるに、大宮司我はと思ひて居たるを、國司咎めて、いかに大宮司ならんからに、國にはらまれては、見參にも參らぬぞといふに、先々さる事なしとて居たりければ、國司むつかりて、國司も國司にこそよれ、我等に逢ひてかうはいふぞとて、いやみ思ひて、知らん所ども點ぜよなどいふ時に、人ありて大宮司にいふ、誠にも國司と申すにかゝる人おはす、見參に參らせ給へといひければ、

衣冠にきぬ出して―衣冠は束帯より略式にて、袍に指貫の袴きて冠を被るをいふ、きぬ出すは表衣の襴の下に下襲の裾の美々しきを出すをいふ

ゆふ―捕縛捻束すること

答―返報

さらばといひて、衣冠にきぬ出して、供のものども三十人ばかり具して、國司のがり向ひぬ。國司出で逢ひて對面して、人共を呼びて、きやつ慥に召し籠めて勘當せよ、神宮といはんからに、國中にはらまれて、いかに奇怪をば致すとて、召し立ててゆふ程に、籠めて勘當す。その時大宮司、心憂き事に候ふ、御神はおはしまさぬか、下萬の無禮を致すだに、立所に罰せさせおはしますに、大宮司をかくせさせて御覽ずるはと、泣く〳〵くどきてまどろみたる夢に、熱田の仰せらるゝやう、この事におきては我力及ばぬなり、その故は僧ありき、法華經を千部讀みて、我に法樂せんとせしに、百餘部は讀み奉りたりき、國の者どもたふとがりて、この僧に歸依しあひたりしを、汝むつかしがりて、その僧を追ひはらひてき、それにこの僧惡心を起して、われこの國守になりて、この答(たふ)をせんとて生れ來て、今國司になりてければ、我力及ばず、その先生の僧を俊綱といひしに、この國司も俊綱といふなりと、夢に仰せありけり。人の惡心はよしなき事なりと。

常に人に逢ひ―惣夫に逢ひし所なりとの意

ひつ―「ひつぎ」の誤か

道におのづから―自然道に

長門前司女葬送の時本處にかへる事

今は昔、長門前司といひける人の女二人ありけるが、姉は人の妻にてありけり。妹はいと若くて宮仕ぞしけるが、後には家に居たりけり。わざとありつきたる男もなくて、唯時々通ふ人などぞありける。高辻室町わたりにぞ家はありける。父母もなくなりて、奥の方には姉ぞ居たりける。南の表の西の方なる妻戸口にぞ、常に人に逢ひ物など言ふ所なりける。二十七八ばかりなりける年、いみじく煩ひてうせにけり。奥は所狭しとて、その妻戸口にぞやがて臥したりける。さてあるべき事ならねば、姉などしたてて、鳥部野へ率ていぬ。さて例の作法に、とかくせんとて、車より取りおろすに、櫃かろ〳〵として蓋いさゝか開きたり。怪しくて開けて見るに、いかにも〳〵つゆ物なかりけり。道などにて落ちなどすべき事にもあらぬに、いかなる事にかと心得ずあさまし。すべき方もなくて、さりとてあらんやはとて、人々走りかへりて、道におのづからやと見れども、

落ちてあらんかと

おとなしき人―一族中のおもだちたる人

あるべきならねば家へ歸りぬ。もしやと見れば、この妻戸口に、もとのやうにてうち臥したり。いとあさましくも恐しくも、親しき人集りて、いかゞすべきと言ひ合せ騒ぐ程に、夜もいたく更けぬれば、いかゞせんとて、夜明けて又櫃に入れて、この度はよく誠に認めて、よさりいかにもなど思ひてある程に、夕つかた見るほどに、この櫃の蓋細めに開きたりけり。いみじく恐しくすぢなけれど、親しき人々、近くてよく見んとて寄りて見れば、櫃より出でて又妻戸口に臥したり。いとゞあさましきわざかなとて、又かき入れんとて萬にすれど、更に〳〵ゆるがず。土より生ひたる大木などを、引きゆるがさんやうなれば、すべき方なくて、唯ここにあらんとてかと思ひて、おとなしき人寄りていふ、唯此所にあらんとおほすか、さらばやがて此所にも置き奉らん、かくてはいと見苦しかりなんとて、妻戸口の板敷を毀ちて、其所に下さんとしければ、いと輕らかに下されたれば、すべなくて、その妻戸口一間を板敷など取り退け毀ちて、其所にうづみて高々と塚にてあり。家の人々も、さてあひゐてあらん、物むつかしく覺えて、みな外へ渡りに

けり。さて年月經にければ、寢殿も皆毀れ失せにけり。いかなる事にか、この塚の傍近くは、下種などもえ居つかず、むつかしき事ありと言ひ傳へて、大かた人もえ居つかねば、其所は唯その塚一つぞある。高辻よりは北、室町よりは西、高辻表に六七間ばかりがほどは小家もなくて、その塚一つぞ高々としてありける。如何にしたることにか、塚の上に神の社をぞ、一いはひするてあなる。このころも今にありとなん。

一いはひ―一座の意

雀恩を報ゆる事

今は昔、春つ方日うらゝかなりけるに、六十ばかりの女のありけるが、蟲うち取りて居たりけるに、庭に雀のしありきけるを、童石を取りて打ちたれば、當りて腰を打折られにけり。羽をふためかして惑ふ程に、烏のかけりありきければ、あな心う、烏取りてんとて、この女いそぎ取りて、息しかけなどして物喰はす。小桶に入れて夜はをさむ。明くれば米喰はせ、銅、藥にこそげて喰はせなどすれば、子ども孫ども、あはれ女刀自は

蟲―虱なるべし
しありき―寫歩きにて食を求めて歩く
銅藥にこそげ―銅を削りもろして藥とするなり、銅藥の二字活本に從ふ
よく喰へば―活本「よくつたへば」とあり、時日の經過する意か
雀見よ―雀に氣をつけよ

老いて、雀飼はるゝとて惡み笑ふ。かくて月比よく喰へば、やう〳〵躍りありく。雀の心にもかく養ひいけたるを、いみじく嬉しうれしと思ひけり。白地に物へ往くとても、人にこの雀見よ、物喰はせよなどいひ置きければ、子孫など、あはれなんでふ雀飼はるとて惡み笑へども、さばれいとほしければとて、飼ふ程に飛ぶ程になりにけり。今はよも烏に取られじとて、外に出でて手に据ゑて、飛びやする見んとて捧げたれば、ふらふらと飛びていぬ。女多くの月比日比、暮るればをさめ、明くれば物喰はせて習ひて哀や飛びていぬるよ、又來やすると見んなど、徒然に思ひて言ひければ、人に笑はれけり。さて二十日ばかりありて、この女の居たる方に、雀のいたく鳴く聲しければ、雀こそ痛く鳴くなれ、ありし雀の來るにやあらんと思ひて、出でて見ればこの雀なり。哀に忘れず來たるこそあはれなれといふ程に、女の顔うち見て、口より露ばかりの物を落し置くやうにして飛びていぬ。女何にかあらん、雀の落していぬる物はとて、寄りて見れば、瓢の種を唯一つ落して置きたり。持て來たるやうこそあらめとて、取りて持ちたり。あ

さばれ―さもあらばあれ

ないみじ、雀の物得て寶にし給ふとて、子ども笑へば、さばれ植ゑて見んとて植ゑたれば、秋になるまゝに、いみじく多く生ひ廣ごりて、なべての瓢にも似ず、大に多くなりたり。女悦び興じて、里隣の人にも喰はせ、取れども〳〵盡きもせず多かり。笑ひし子孫も、これを明暮喰ひてあり。一里配りなどして、はてには誠に勝れて、大なる七つ八つは匏にせんと思ひて、内につりつけて置きたり。さて月比へて、今はよく成りぬらんとて見ればよくなりにけり。取り下して口あけんとするに、少しおもし。怪しけれども切りあけて見れば、物ひとはた入りたり。何にかあるらんとて移して見れば、白米の入りたるなり。思ひかけずあさましと思ひて、大なる物に皆を移したるに、同じやうに入りてあれば、常事にはあらざりけり、雀のしたるにこそと、あさましく嬉しければ、物に入れて隠し置きて、残りの瓢どもを見れば、同じやうに入りてあり。これを移し〳〵つかへば、せんかたなく多かり。さて誠にたのもしき人にぞなりにける。隣里の人も見あざみ、いみじき事に羨みけり。この隣にありける女の、子どものいふやう、同じごとなれど、

ひとはた―一パイなり、物の瓢に入りたるをいふ

たのもしき人―富裕なる人　同じごとなれど―同様に見ゆる老婆なれど

人はかくこそあれ、はか〴〵しき事もえし出で給はぬなどいはれて、隣の女、この女房の許に來りて、さても〳〵こはいかなりしことぞ、雀のなどはほの聞けど、よくはえ知らねば、もとありけんまゝにの給へと言へば、瓢の種を一つ落したりし、植ゑたりしよりある事なりとて、細にもいはぬを、猶ありのまゝにこまかにの給へと切に問へば、心狹く隠すべき事かはと思ひて、かう〳〵腰折れたる雀のありしを、飼ひ生けたりしを嬉しと思ひけるにや、瓢の種を一つ持ちて來たりしを植ゑたれば、かくなりたるなりといへば、その種唯一つ賜べといへば、それに入りたる米などは參らせん、種はあるべき事にもあらず、更にえなん散らすまじとて取らせねば、我もいかで、腰折れたらん雀見つけて飼はんと思ひて、目を立てて見れど、腰折れたる雀更に見えず。早朝ごとに伺ひ見れば、せどの方に米の散りたるを喰ふとて、雀の躍りありくを、石を取りてもしやとて打てば、數多の中に度々打てば、おのづから打ち當てられてえ飛ばぬあり。喜びて寄りて、腰よくうち折りて後に、取りて物喰はせ、藥喰はせなどして置きたり。一つが徳をだにこそ

雀のなどは雖のきけど云々―雀の報いなどとはほのかに聞けど猶委しく語り聞せ上となり

一つが徳云々―一匹の雀を養ひてさへ果報あり

見れ、まして數多ならばいかに賴もしからん、あの隣の女には優りて、子どもに譽められんと思ひて、籠のうちに米蒔きて伺ひ居たれば、雀ども集りて喰ひに來たれば、又うちうちしければ、三つ打ち折りぬ。今はかばかりにてありなんと思ひて、腰折れたる雀三つばかり桶に取り入れて、銅こそげて喰はせなどして、月比經るほどに皆よくなりにたれば、喜びて外に取り出でたれば、ふら〳〵と飛びてみないぬ。いみじきわざしつと思ふ。雀は腰うち折られて、かく月比籠め置きたるを、世にねたしと思ひけり。さて十日ばかりありて、この雀ども來たれば喜びて、まづ口に物やくはへたると見るに、瓢の種一つづつ皆落して去ぬ。さればよと嬉しくて、取りて三所に植ゑてけり。例よりもするすると生ひ立ちて、いみじく大になりたり。これはいと多くもならず、七つ八つぞなりたる。女ゑみまけて見て、子どもにいふやう、はか〴〵しき事しいでずと言ひしかど、我は隣の女には優りなんといへば、實にさもありなんと思ひたり。これは數の少ければ、米多く取らんとて、人にも喰はせず我も喰はず。子どもがいふやう、隣の女房は里隣の人にも喰はせ、我も喰ひなどこそせしか、これはまして三つが種なり、我も人にも喰はせらるべきなりといへば、さもと思ひて近き隣の人にも喰はせ、我も子どもにも諸共に喰はせんとて、おほらかにて喰ふに、苦き事物にも似ず、きはだなどのやうにて心地惑ふ。喰ひと喰ひたる人々も、子どもも我も物をつきて惑ふほどに、隣の人どもも皆心地を損じて來集りて、こはいかなる物を喰はせつるぞ、あなおそろし、露ばかり烟の口に寄りたるものも、物をつき惑ひあひて、死ぬべくこそあれと、腹立ちて言ひせためんと思ひて來たれば、主の女をはじめて、子どもも皆物覺えず、つき散らしてふせりあひたり。いふかひなくて共にかへりぬ。二三日も過ぎぬれば、誰々も心地なほりにけり。女思ふやう皆米にならんとしけるものを、急ぎて喰ひたれば、かく怪しかりけるなめりと思ひて、殘をば皆つりつけて置きたり。さて月比へて今はよくなりぬらんとて、移し入れん料の桶ども具して部屋に入る。嬉しければ、齒もなき口して、耳のもとまで一人喚して、桶を寄せて移しければ、虻、蜂、蜈蚣、蝦蟆、蛇など出でて、目鼻ともいはず一身に取り

世にねたし―甚だ忌々し
ゑみまけて―笑みこぼれて
おほらか―多勢
きはだ―黄蘗
烟―湯氣
せためん―責めん

つきて刺せども、女いたさもおぼえず、唯米のこぼれかゝるぞと思ひて、暫し待ち給へ、雀よ、少しづつ取らんといふ。七つ八つの瓢よりそこらの毒蟲共出でて、子共をも刺しくひ、女をば刺し殺してけり。雀の腰をうち折られて、ねたしと思ひて、萬の蟲どもを語らひて入れたりけるなり。隣の雀はもと腰折れて、烏の命とりぬべかりしを養ひ生けたれば、うれしと思ひけるなり。さればもの羨みはすまじきことなり。

さがなくてよかちん―惡無くて善かちんにて嵯峨と通ずればなり

おのれ放ちて―おのれを除きて

小野篁廣才の事

今は昔、小野篁といふ人おはしけり。嵯峨の帝（みかど）の御時に、内裏に札を立てたりけるに、無悪善と書きたりけり。帝篁に讀めと仰せられたりければ、讀みは讀みさぶらひなん、されどおそれにて候へば、え申し候はじと奏しければ、唯申せと度々仰せられければ、さがなくてよからんと申して候ふぞ、されば君を呪（のろ）ひ參らせて候ふなりと申しければ、おのれ放ちては、誰か書かんと仰せられければ、さればこそ申して候はじとは、申して候ひ

はといふに同じ

○今昔三十、平定文假借本院侍從語參照
平仲―平好風の子にて兄弟三人の仲なるよりいふ
村上の御母后―穩子なり

つれと申すに、帝さて何も書きたらんものは、讀みてんやと仰せられければ、何にても讀み候ひなんと申しければ、片假字のねもじを十二書かせ給ひて、讀めと仰せられければ、ねこの、この、子ねこ、しゃの、この、子じしと讀みたりければ、帝ほゝゑませ給ひて、事なくてやみにけり。

平貞文本院侍從等の事

今は昔、兵衛佐平貞文をば平仲といふ。色ごのみにて、宮仕へ人はさらなり、人の女などを忍びて見ぬはなかりけり。思ひかけて、文やる程の人の靡かぬはなかりけるに、本院侍從といふは村上の御母后の女房なり。世の色好みにてありけるに、文やるに、にくからず返事はしながら、逢ふ事はなかりけり。暫しこそあらめ、遂にはさりともと思ひて、物の哀なる夕暮の空、又月の明き夜など、艶に人の目留めつべき程を計ひつゝ音づれければ、女も見知りて、情はかはしながら心ゐば許さず、つれなくて、はしたなからぬ程に

おどろ〳〵しく―仰山に大層ふることなり

薰籠―衣をうちかける籠にて中より香を焚きて衣にはひをとるなり

これにさはらん―雨のために躊躇するは

いらへつゝ、人居まじり、苦しかるまじき所にては、物いひなどはしながら、めでたく遁れつゝ心もゆるさぬを、男はさも知らで、かくのみ過ぐる心もとなくて、常よりもしげく音づれて、參らんと言ひ遣せたりけるに、例のはしたなからず答へたれば、四月の晦日頃に、雨おどろ〳〵しく降りて、物恐しげなるに、かゝる折に行きたらばこそ、哀とも思はめと思ひて出でぬ。道すがら堪へがたき雨を、これにいきたらんに、逢はでかへす事よもと、たのもしく思ひて局に行きたれば、人出で來て、上になれば案内申さんとて端の方に入れていぬ。見れば、物の後に火ほのかに燈して、宿直物と思しき衣薰籠にかけて、薰物しめたるにほひなべてならず。いとど心にくゝて、身にしみていみじと思ふに、人かへりて、只今も下りさせ給ふといふ。嬉しさかぎりなし。即ち下りたり。かゝる雨にはいかになどいへば、これにさはらんは、無下に淺き事にこそなど言ひかはして、近く寄りて髪を探れば、氷をのしかけたらんやうにひやゝかにて、あたりめでたき事限なし。何やかやとえもいはぬ事ども言ひ交して、疑ひなく思ふに、あはれ遣戸を

開けながら忘れて來にけり。翌朝、誰か開けながらは出でにけるぞなど、煩はしきことになりなんず、閉ててかへらん、程もあるまじといへば、さる事と思ひて、かばかりうち解けにたれば、心安くて、衣を留めて參らせぬ。誠に遣戸たつる音して、此方へくらんと待つ程に、音もせで奥ざまへ入りぬ。それに心もとなく、あさましくうつし心も失せはてて、はひも入りぬべけれと、すべき方もなくて、やりつる悔しさを思へど、かひなければ、泣く〳〵曉近く出でぬ。家に行きて思ひ明して、すかし置きつる心うさ、書き續けて遣りたれど、何しにかすかさん、歸らんとせしに召しょかば、後にもなど言ひて過しつ。大方間近き事はあるまじきなめり、今はさはこの人のわろく、疎ましからん事を見て思ひうとまばや、かくのみ心つくしに思はでありなんと思ひて、隨身を呼びて、その人のひすましの皮子もていかん、奪ひとりて我に見せよと言ひければ、日比添ひて伺ひて、辛うじて逃げたるを、追ひてばひとりて主に取らせつ。平仲よろこびて、かくれに持て行きて見れば、香なる薄物の三重がさねなるに包みたり、香しき事たぐひなし。

衣を留めて云々―今昔には「女起きて上に著たる衣をば脱ぎもきて單衣袴ばかりを著て行きぬ」とあり

後にもなどいひて―又後日御目にかゝちんなどいひて

大方間近き事―近日に逢はるゝ事

ひすまし―便器を洗ふ下女

皮子―今昔にし「笥」とあり

香なる薄物―香色（淡紅色）の薄様

引き解きて開くるに、香しさ譬へん方なし。見れば沈、丁子を濃く煎じて入れたり。又薫物をば、多くまろがしつょ數多入れたり。さるまょに、香しさ推し量るべし。見るにいとあさまし。ゆょしげにしおきたらば、それに見飽きて、心もや慰むとこそ思ひつれ、こは如何なることぞ、かく心ある人やはある、凡人とも覺えぬ有樣どもと、いとど死ぬばかり思へどかひなし。我見んとしもやは思ふべきにと、かょる心ばせを見て後は、いよいよほけ〳〵しく思ひけれど、遂にあはで止みにけり。我身ながらも、かれに世に恥ぢがましくねたく覺えしと、平仲密に人に忍びてかたりけるとぞ。

薫物云々―練香を大便のやう見せたるなり

ほけ〳〵しく―恍惚と

一條攝政歌の事

今は昔、一條攝政とは東三條殿の兄におはします。御容貌よりはじめ、心用ひなどめでたく、才ありさま誠しくおはしまし、また色めかしく、女をも多く御覽じ興ぜさせ給ひけるが、少しきやう〳〵に覺えさせ給ひければ、御名を隱させ給ひて、大藏の丞豐蔭と名の

一條攝政―伊尹

東三條殿―兼家

きやう〳〵―輕輕の字音、かろがろしき意

りて、上ならぬ女のがりは御文も遣はしける。けさうせさせ給ひ、逢はせ給ひもしけるに、皆人は心えて知りまゐらせたり。やんごとなく、よき人の姫君の許へおはしましそめにけり。乳母母などを語らひて、父には知らさせ給はぬ程に、聞きつけていみじく腹立ちて、母をせため爪はじきをして、いたくの給ひければ、さる事なしとあらがひて、まだしきよしの文書きて賜べと、母君の侘び申したりければ、

人しれず身はいそげども年を經てなど越え難き逢坂の關

とてつかはしたりければ、父に見すれば、さては虚言なりけりと思ひて、かへし、父のしける。

東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えん逢坂の關

と詠みけるを見て、ほゝゑまれけんかしと、御集にあり。をかしく。

けさう―懸想にて繁墓の義

あらがひて―諍ひて　まだしきよし―未だ其女に逢はぬ由　人しれず―此歌、後撰集にいづ

御集―此歌集今日傳はらず　をかしく―をかしくありきなど書くべきをわざと略したる也

狐家に火つくる事

今は昔、甲斐國に館の侍なりける者の、夕暮、館を出でて、家ざまに行きける道に、狐の逢ひたりけるを追ひかけて、引目して射ければ、狐の腰に射當ててけり。狐射まろばかされて、鳴きわびて腰を引きつゝ草に入りにけり。この男引目を取りて行く程に、この狐腰を引きて先に立ちて行くに、又射んとすれば失せにけり。家今四五町かと見えて行く程に、この狐二町ばかり先立ちて、火をくはへて走りければ、火をくはへて走るはいかなる事ぞとて、馬をも走らせけれども、家のもとに走り寄りて、人になりて火を家につけてけり。人のつくるにこそありけれとて、矢をはげてはしらせけれども、つけはてければ、狐になりて、草の中に走り入りて失せにけり。さて家燒けにけり。かゝるものも忽ちに讐を報ふなり。これを聞きて、かやうのものをば構へて打ずまじきなり。

館―國司の廳

引目―鏑矢の鏃に似たり　墓目とも書く、木製にて

宇治拾遺物語　巻第四

狐人につきてしとぎ食ふ事

昔もののけわづらひし所に、もののけ渡しょほどに、もののけ物につきて言ふやう、おのれは祟の靈氣にても侍らず、うかれて罷り通りつる狐なり、塚屋に子どもなど侍るが、物をほしがりつれば、かやうの所には、食物ちろばふものぞかしとて、まうで來つるなり、しとぎはらたべて罷りなんといへば、しとぎをせさせて、一折敷取らせたれば、少し食ひてあなうまや〳〵といふ。この女のしとぎほしかりければ、そらものづきてかくいふと惡みあへり。紙賜はりてこれ包みて罷りて、たうめや子どもなどに、喰はせんといひければ、紙を二枚引き違へて包みたれば、大きやかなるを腰につい挾みたれば、胸にさしあがりてあり。かくて追ひ給へ、罷りなんと驗者にいへば、追へ〳〵といへば、立ちあがりて仆れ伏しぬ。暫しばかりありて、やがて起き上りたるに、懐なるものさらになし。失せにけるこそ不思議なれ。

もののけ渡しょほどに―物怪を人に移しつけし時に

しとぎ―米粉にてつくれる餅

そちものづきて―偽りて物のつきたる樣して

たうめ―老女

驗者―修驗者

佐渡國にある金の事

能登の國には、鐵といふ物のすがねといふ程なるを取りて、守に取らする者六十人ぞあなる。實房といふ守の任に、鐵取六十人が長なりける者の、佐渡の國にこそ金の花咲きたる所はありしかと、人に言ひけるを、守傳へ聞きて、その男を守呼び取りて、物取らせなどして、すかし問ひければ、佐渡の國には誠に金の侍るなり、候ひし所を見置きて侍るなりといへば、さらば往きて取りて來なんやといへば、遣さば罷り候はんといふ。さらば船を出し立てんといふに、人をば賜はり候はじ、たゞ小舟一つと、食物すこしとを賜はり候ひて罷り至りて、若しやと取りて參らせんといへば、唯これがいふに任せて、人にも知らせず、小舟一つと喰ふべき物少しとを取らせたりければ、それをもて佐渡の國へ

○今昔二十六、能登國堀鐵者行佐渡國堀金語參照

すがね―素鐵にてきたはぬ鐵

金の花咲き―萬葉十八「すめろぎの御代榮えむと東なるみちのく山に金花さく」

若しやと取りて參らせん―今昔に「若しやと試み候はん」とあり

さいて―小きき れ

○今昔十五、藥師寺濟源僧都往生語參照

よろしうなりて―病少しくなはりて

渡りにけり。一月ばかりありて、打ち忘れたるほどに、この男ふときて、守に目を見合せたりければ、守心えて人傳には取らで、みづから出合ひたりければ、袖うつしに、黑ばみたるさいでに包みたる物を取らせたりければ、守重げに引き下げて、懷に引き入れて歸り入りにけり。その後その金取の男は、何方ともなく失せにけり。萬にたづねけれども、行方も知らず止みにけり。いかに思ひて失せたりといふ事を知らず、金のある所を問ひ尋ねやすると、思ひけるにやとぞ疑ひける。その金八千兩ばかりありけるとぞ語り傳へたる。かゝれば佐渡の國には、金ありけるよしと、能登の國のものども語りけるとぞ。

藥師寺別當の事

今は昔、藥師寺の別當僧都といふ人ありけり。別當はしけれども、殊に寺の物も使はで、極樂に生れん事をなん願ひける。年老い病して死ぬるきざみになりて、念佛して消え入らんとす。無下に限と見ゆるほどに、よろしうなりて、弟子を呼びていふやう、見るや

一石誦經―米一石を誦經の料にせよ

うに念佛は他念なく申して死ぬれば、極樂の迎へいますらんと待たるゝに、極樂の迎へは見えずして火の車を寄す。こはなんぞ、かくは思はず、何の罪によりて地獄の迎へは來たるぞといひつれば、車に附きたる鬼共のいふやう、この寺の物を、一とせ五斗かりていまだ返さねば、その罪によりてこの迎へは得たるなりと言ひつれば、我言ひつるは、さばかりの罪にては、地獄に墮つべきやうなし、その物を返してんといへば、火の車を寄せて待つなり、されば疾く〳〵一石誦經にせよといひければ、弟子ども手惑ひをして、いふまゝに誦經にしつ。その鐘の聲のするをり、火の車かへりぬ。さてとばかりありて火の車かへりて、極樂の迎へ今なんおはすると、手をすりて悅びつゝ終りにけり。其坊は藥師寺の大門の北の脇にある坊なり。今にそのかた失せずしてあり。さばかり程の物使ひたるにだに、火の車むかへに來る、まして寺物を心のまゝにつかひたる、諸寺の別當の地獄の迎へこそ思ひやらるれ。

○今昔二十六、土佐國妹兄行住不知島語參照

まもりめ―番人

はなつきに―今昔に「放つ風に」とあり　湊―今　に澳（オキ）とあるに從ふべし

妹背島の事

土佐國幡多の郡に住む下種ありけり。おのが國にはあらで他國に田を作りけるが、おのが住む國に苗代をして、植うべき程になりければ、その苗を船に入れて、植ゑん人どもに喰はすべき物より始めて、鍋釜、鋤鍬、唐鋤などいふものに至るまで、家の具を舟に取り積みて、十一二ばかりなる男子女子、二人の子を舟のまもりめに載せ置きて、父母は植ゑんといふもの雇はんとて、陸に白地に上りにけり。舟をば白地におもひて、少し引き据ゑて、繋がずして置きたりけるに、この童ども舟底に寢入りにけり。潮の滿ちければ、舟は浮きたりけるを、はなつきに少し吹き出されたりける程に、干潮に引かれて遙に湊へ出でにけり。沖にていとど風吹きまさりければ、帆を揚げたるやうにて行く。その時に童起きて見るに、かゝりたる方もなき沖に出でければ、泣き惑へどもすべき方もなし。何方とも知らず、唯吹かれて行きにけり。さるほどに、父母は人ども雇ひ集め

風がくれ―風のあたらぬ所

なりものの木云云―今昔に「生物の木時に隨ひて多かりければ」とあり

めをとこ―妻夫

て、舟に乗らんとて來て見るに舟なし。暫しは風がくれにさし隱したるかと見る程に、呼び騷げども誰かは答へん。浦々覓めけれども無かりければ、言ふかひなくて止みにけり。かくてこの舟は、遙の南の沖にありける島に吹きつけてけり。童ども泣く〳〵下りて、船繫ぎて見ればいかにも人なし。歸るべき方もおぼえねば、島に下りて言ひけるやう、今はすべきかたなし、さりとては命を捨つべきにあらず、この食物のあらん限こそ、少しづつも喰ひて生きたらめ、これ盡きなばいかにして命はあるべきぞ、いざこの苗の枯れぬさきに植ゑんといひければ、實にもとて、水の流のありける所の、田に作りぬべきを求め出して、鋤鍬ありければ、木切りて庵など造りける。なりものの木の、をりになりたる多かりければ、それを取り喰ひて、明し暮す程に、秋にもなりにけり。さるべきにやありけん、作りたる田のよくて、此方に作りたるにも殊の外優りたりければ、多く刈り置きなどして、さりとてあるべきならねば、めをとこになりにけり。男子女子數多產み續けて、又それが妻夫になり〳〵しつゝ、大なる島なりければ、田畠も多く作りて、この

雲林院―山城紫野にあり

菩提講―菩提の爲に法華經を講說する法會

中ゆひて―衣を掲げて腰帶すること

きり〳〵と―ぐるぐるとぐろ卷く也

頃はその妹背が產み續けたりける人ども、島にあまるばかりになりてぞあんなる。妹背島とて、土佐の國の南の沖にあるとぞ人かたりし。

石橋の下の蛇の事

この近くのことなるべし、女ありけり。雲林院の菩提講に、大宮をのぼりに參りける程に、西院の邊近くなりて石橋ありける水の邊を、二十あまり三十ばかりの女房、中ゆひて歩み行くが、石橋を踏み返して過ぎぬる跡に、踏み返されたる橋の下に、斑紋なる蛇のきりきりとして居たれば、石の下に蛇のありけるといふ程に、この踏み返したる女の後に立ちて、ゆら〳〵と此蛇の行けば、後なる女の見るにあやしくて、いかに思ひて行くにかあらん、踏み出されたるを惡しと思ひて、それが報答せんと思ふにや、これがせんやう見んとて、後に立ちて行くに、此女時々は見返りなどすれども、わが供に蛇のあるとも知らぬげなり。又同じやうに行く人あれども、蛇の女に具して行くを見つけいふ人も

なし。唯最初見つけつる女の目にのみ見えければ、これがしなさんやう見んと思ひて、この女の後を離れず歩み行く程に、雲林院に参りつきぬ。寺の板敷に昇りてこの女居ぬれば、この蛇も昇りて傍に蜿り伏したれど、これを見つけて騒ぐ人なし。希有のわざかなと、目を放たず見る程に、講はてぬれば、女立ち出づるに隨ひて、蛇もつきて出でぬ。この女、これがしなさんやう見んとて、後に立ちて京ざまに出でぬ。下ざまに行きとまりて家あり、その家に入れば、蛇も具して入りぬ。これぞこれが家なりける。思ふに晝は姿もなきなめり、夜こそとかくすることもあらんずらめ、たれか夜の有様を見ばやと思ふに、見るべきやうもなければ、その家に歩みよりて、田舎より上る人の行き泊るべき所も候はぬを、今宵ばかり宿させ給はなんやといへば、この蛇のつきたる女を家あるじと思ふに、こゝに宿り給ふ人ありといへば、老いたる女出で來て、誰かの給ふぞといへば、これぞ家のあるじなりけると思ひて、今宵ばかり宿借り申すなりといふ。よく侍りなん、入りておはせといふ。嬉しと思ひて入りて見れば、板敷のあるにのぼりてこ

姿もなきー「せんかた(爲かた)もなき」の誤なるべし

守りー見つめ

見るー「見ゆ」の誤ならん

の女居たり。蛇は板敷の下に柱のもとに蜿りてあり。目をつけて見れば、この女を守りあげてこの蛇は居たり。蛇つきたる女、殿にあるやうはなど物語し居たり。宮仕する者なりと見る。かゝる程に日唯暮れに暮れて暗くなりぬれば、蛇の有様を見るべきやうもなく、此家ぬしと覺ゆる女にいふやう、かく宿させ給へるかはりに、苧やある、うみて奉らん、火燈し給へといへば、嬉しくの給ひたりとて、火燈し苧取り出してあづけたれば、それをうみつゝ見れば、この女臥しぬめり、今や寄らんずらんと見れども近くは寄らず。この事やがても告げばやと思へども、告げたらば、我ためも悪しくあらんと思ひて、物も言はでしなさんやう見んとて、夜中の過ぐるまでまもり居たれども、終に見ゆる方もなき程に、火消えぬればこの女も寢ぬ。明けて後いかゞあらんと思ひて、惑ひ起きて見れば、この女よき程に寢起きて、ともかくもなげにて、家あるじと覺ゆる女にいふやう、今宵夢をこそ見つれといへば、いかに見給へるぞと問へば、この寢たる枕上に、人の居ると思ひて見れば、腰より上は人にて、下は蛇なる女、清げなるが居ていふやう、

おのれは人をうらめしと思ひし程に、かく蛇の身を受けて、石橋の下に多くの年を過して、侘しと思ひ居たる程に、昨日おのれがおもしの石を踏みかへし給ひしに、たすけられて、石の苦を免がれて、うれしと思ひ給へしかば、此人のおはしつかん所を見置き奉りて、悦びも申さんと思ひて、御供に参りし程に、菩提講の庭に参りたまひければ、その御供に参りたるによりて、逢ひ難き法をうけ給はり、事足るによりて、多く罪をさへ滅して、その力にて人に生れ侍るべき功徳の近くなり侍れば、いよ〳〵悦びを戴きて、かくて参りたるなり、この報には物よくあらせ奉りて、よき男などあはせ奉るべきなりと、いふとなん見つると語るに、あさましくなりて、この宿りたる女のいふやう、誠はおのれは、田舎より上りたるにも侍らず、そこ〳〵に侍る者なり、それが昨日菩提講に参り侍りし道に、その程に行き逢ひ給ひたりしかば、後に立ちて歩み罷りしに、大宮のその程の、河の石橋を蹈み返されたりし下より、斑紋なりし小蛇の出で來て、御供にまゐりしを、かくと告げ申さんと思ひしかども、告げ奉りては、我ためも悪しき事にてもあらんずらんと、恐しくて え申さざりしなり、まこと講の庭にも、その蛇侍りしかども、人も え見つけざりしなり、終てて出で給ひし折、又具し奉りたりしかば、なりはてんやうゆかしうて、思ひもかけず今宵爰にて夜を明し侍りつるなり、この夜中過ぐるまでは、此蛇柱のもとに侍りつるが、明けて見侍りつれば、蛇も見え侍らざりしなり、それに合せて、かゝる夢がたりをし給へば、あさましく恐しくて、かく顯し申すなり、今よりこれを序にて何事も申さんなどと言ひ語らひて、後は常に行き通ひつゝ、知る人になんなりにける。さてこの女、世にものよくなりて、このころは何とは知らず、大殿の下家司の、いみじく徳あるが妻になりて、よろづ事かなひてぞありける。尋ねばかくれあらじかしとぞ。

顯し申す―實際を語る

下家司―攝關大臣家の家事を取捌く者

○今昔十五、始雲林院菩提講聖人往生語參照

東北院菩提講聖の事

東北院の菩提講始めける聖は、もとはいみじき悪人にて、囚獄に七度ぞ入りたりける。

七度といひけるたび、檢非違使ども集りて、これはいみじき惡人なり、一二度囚獄にゐんだに、人としては善かるべき事かは、まして幾若干の犯罪をして、かくて七度までは、淺ましくゆゝしき事なり、この度これが足切りてんと定めて、足切に率て行きて切らんとする程に、いみじき相人ありけり。それが物へ往きけるが、この足斬らんとする者に寄りていふやう、この人おのれに免されよ、これは必ず往生すべき相ある人なりといひければ、よしなき事いふ物もおぼえぬ相する御房かなといひて、唯きりに切らんとすれば、その切らんとする足の上にのぼりて、この足のかはりに我足をきれ、往生すべき相ある者の足切られては、いかでか見んや、をう〳〵とをめきければ、切らんとする者ども、しあつかひて、檢非違使にかう〳〵の事侍りと言ひければ、やんごとなき相人の言ふ事なれば、さすがに用ひずもなくて、別當にかゝる事なんあると申しければ、さらば免してよとて、ゆるされにけり。その時この盗人心おこして、法師になりて、いみじき聖になりて、この菩提講は始めたるなり。誠に相にかなひて、いみじく終とりてこそう

淺ましく―原本「淺まし」とあり、活本に據り改む

足切られては―「足切らせては」の誤か

しあつかひて―もてあまして

心おこして―一念發起して

せにけれ。かゝれば高名せんずる人は、その相ありとも、おほろけの相人の見る事にてもあらざりけり。始め置きたる講も今日まで絶えぬは、誠にあはれなることなりかし。

○今昔十九、參河守大江定基出家語參照

參河入道―三河守定基、法名寂照

三河入道遁世世に聞ゆる事

參河入道、いまだ俗にてありける折、もとの妻をば去りつゝ、若く容貌よき女に思ひつきて、それを妻にて三河へ率て下りける程に、その女久しく煩ひて、善かりける容貌も衰へてうせにけるを、悲しさのあまりにとかくもせで、夜も晝も語らひ臥して、口を吸ひたりけるに、あさましき香の口より出で來たりけるにぞ、疎む心出で來て泣く〳〵葬りてける。それより世はうき物にこそありけれと思ひなりけるに、三河の國に風祭といふ事をしけるに、いけにへといふことに、猪を生ながらおろしけるを見て、この國退きなんと思ふ心つきてけり。雉子を生ながら掃へて、人の出で來たりけるを、いざこの雉子生ながらつくりて喰はん、今少し味ひやよきと、試みんといひければ、いかでか心に入

風祭―風神を祭り豐年を祈るなり

おろす―料理する

らんと思ひたる郎等の物もおぼえぬが、いみじく侍りなん、いかで味ひ勝らぬやうはあらんなどはやし言ひけり。少し物の心知りたる者は、あさましき事をもいふなど思ひけり。かくて前にて、生ながら毛をむしらせければ、暫しはふた〳〵とするを、抑へてたゞむしりければ、鳥の日より血の涙を垂れて、目をしばたゝきて、此彼に見合せけるを見て、え堪へずして立ちて退くものもありけり。これがかく鳴く事と興じ笑ひて、いとゞ情なげにむしる者もあり。むしりはてておろさせければ、刀に隨ひて血のつぶ〳〵と出で來けるを、拭ひ〳〵おろしければ、あさましく堪へ難げなる聲を出して、死にはてければ、おろしはてて、熬燒などして試みよとて、人々試みさせければ、殊の外に侍りけり。死にたるおろして熬燒したるには、勝りたりなどいひけるを、つく〴〵と見聞きて、涙を流して、聲を立ててをめきけるに、旨しなどいひける者ども、したくたがひにけり。さてやがてその日國府を出でて京に上りて、法師になりけり。道心の起りければ、能く心を固めんとて、かゝる希有の事をして見けるなり。乞食といふことしけるに、或家に食物

したくたがひにけり―したくは支度にて、心構へせしあてのはづれし也

えもいはずして、庭に疊を敷きて物を喰はせければ、この疊に居て喰はんとしける程に、簾を卷き上げたりける内に、善き裝束著たる女の居たるを見ければ、我去りにしふるき妻なりけり。あの乞兒かくてあらんを見んと、思ひしぞといひて見合せたりけるを、恥しとも苦しとも思ひたる氣色もなくて、あなたふとといひて、物よくうち喰ひてかへりにけり。ありがたき心なりかし。道心をかたく起してければ、さることに逢ひたるも、苦しとも思はざりけるなり。

○此話古事談卷二に見ゆ

清かりけり―不犯なるをいふ

うち任せたる事―尋常

進命婦清水まうでの事

今は昔、進命婦若かりける時、常に清水へ參りける間、師の僧清かりけり、八十のものなり、法華經を八萬四千餘部讀み奉りたるものなり。この女房を見て、欲心を興して、忽ちに病になりて既に死なんとする間、弟子共あやしみを爲して問うていはく、この病の有樣うち任せたる事にあらず、思召す事のあるか、仰せられずばよしなき事なりとい

ふ。この時語りていはく、誠は京より御堂へ参らるゝ女に近づき馴れて、物を申さばやと思ひしより、この三ヶ年不食の病になりて、今は既に蛇道に落ちなんずる、心憂き事なりといふ。こゝに弟子一人進命婦の許へ行きて、この事をいふ時に、女ほどなく來れり。病者頭を剃らで年月を送りたる間、鬚髪銀の針を立てたるやうにて、鬼のごとく、されどもこの女恐るゝ氣色なくしていふやう、年比頼み奉る心ざし淺からず、何事にさぶらふとも、いかでか仰せられん事背き奉らん、御身くづをれさせ給はざりしさきに、などか仰せられざりしといふ時、この僧掻きおこされて、念珠を取りて、推し揉みていふやう、嬉しく來らせ給ひたり、八萬餘部讀み奉りたる法華經の最第一の文をば御前に奉る、俗をうませ給はゞ關白攝政をうませたまへ、女をうませたまはゞ、女御后を生ませたまへ、僧をうませ給はゞ、法務の大僧正を生ませたまへと言ひ終りて、すなはち死ぬ。その後この女、宇治殿におもはれまゐらせて、はたして京極大殿、四條宮、三井の覺圓座主を産み奉れりとぞ。

蛇道―邪道の誤か

鬼のごとく―「鬼のごとし」の誤なちん

法務―法義を務むる意にて僧綱以外におかれたる最も顯要なる職なり、僧正僧都の之に補せらるゝを法務僧正法務僧都といふ

字治殿―賴通

京極大殿―師實

四條宮―寛子、冷泉帝の后

業遠朝臣蘇生の事

これも今は昔、業遠朝臣死ぬる時、御堂の入道殿おほせられけるは、言ひ置くべきことあらんかし、不便のことなりとて、解脱寺觀修僧正を召し、業遠が家に向ひ給ひて加持する間、死人忽ちに蘇生して、要事を言ひて後、また目を閉ぢてけりとか。

篤昌忠恒等の事

これも今は昔、民部大輔篤昌といふ者ありけるを、法性寺殿の御時、藏人所の所司に義助とかやいふ者ありけり。件の者、篤昌を役に催しけるを、我はかやうの役はすべき者にもあらずとて參らざりけるを、所司に舍人を數多つけて、苛法に催しければ參りにけり。さてまづこの所司に物申さんと呼びければ、出であひけるに、この世ならず腹立ちて、かやうの役に催し給ふは如何なることぞ、篤昌をば如何なる者と知り給ひたるぞ、

○古事談卷三參照

業遠―高階敏忠の子

御堂の入道―道長

法性寺殿―忠通

藏人所―關白家の藏人所なり

苛法に―きびしく

この世ならず―一通りならず

承らんと頻に責めけれど、暫しは物も言はで居たりけるを叱りて、の給へ、まづ篤昌がありやう承らんと痛う責めければ、別の事候はず、民部大輔五位の鼻赤きにこそ、知り申したれといひたりければ、をうといひて逃げにけり。又この所司が居たりける前を、忠恒といふ隨身、ことやうにてねり通りけるを見て、わりある隨身の姿かなと、忍びやかにいひけるを耳聰く聞きて、隨身所司が前に立ち返りて、わりあるとは如何にの給ふ事ぞと咎めければ、我は人のわりありなしもえ知らぬに、只今武正府生の通られつるを、この人々、わりなき者の容體かなと言ひ合せつるに、少しも似給はねば、さてはもしわりのおはするかと思ひて、申したりつるなりといひたりければ、忠恒をうといひて逃げにけり。この所司をば、あら所司とぞつけたりけるとか。

わりあり―わりなしの反對なり

あら所司―無遠慮の言をなすよといふ

○古事談卷五參照

後朱雀院丈六の佛作り奉り給ふ事

これも今は昔、後朱雀院例ならぬ御事、大事におはしましける時、後生の事恐れ思召しけり。それに御夢に、御堂入道殿參りて申し給ひていはく、丈六の佛を作れる人、子孫において更に惡道に落ちず、某多くの丈六をつくり奉れり、御菩提において疑ひ思召すべからずと、これによりて、明快座主に仰せ合せられて、丈六の佛をつくらる。件の佛、山の灌佛院に安置し奉らる。

丈六佛―一丈六尺の佛

○古事談卷五參照

式部大輔實重賀茂の御正體拜見の事

これも今は昔、式部大輔實重は、賀茂へ參る事ならびなき者なり。前生の運おろそかにして、身に過ぎたる利生にあづからず。人の夢に、大明神、又實重來たりとて、歎かせおはしますよし見けり。實重、御本地を見奉るべきよし祈り申すに、或夜下の御社につやしたる夜、夢に上へ參る間、なからきの邊にて行幸に逢ひ奉る、百官供奉常のごとし。實重片藪に隱れ居て見れば、鳳輦の中に金泥の經一卷おはしましたり。その外題に、一稱南無佛皆已成佛道と書かれたり。夢すなはちさめぬとぞ。

つや―通夜
なからき―半木又流木に作る、賀茂上下の社の中間にありて中賀茂といふ小社あり
一稱南無佛云々―法華方便品の偈句

○古事談卷三參照

有職―僧綱の下三綱の上に位し已講内供奉阿闍梨の三官を總じていふ

唯圓教意云々―法華文句記中の文にして、天台には藏通別圓の四教あり、就中圓教のみ逆縁卽順縁なりと許すとの意

南北二京―奈良京都

化人―神佛の權化

○古事談卷四參照

智海法印癩人と法談の事

これも今は昔、智海法印有職の時、清水寺へ百日參りて、夜更けて下向しけるに、橋の上に、唯圓教意、逆卽是順、自餘三教、逆順定故といふ文を誦する聲あり。尊きことかな、如何なる人の誦するならんと思ひて、近う寄りて見れば白癩人なり。傍に居て法文の事をいふに、智海ほと〳〵いひまはされけり。南北二京に、これほどの學生あらじものをと思ひて、いづれの所にあるぞと問ひければ、この坂に候ふなりといひけり。後にたび〳〵尋ねけれど、尋ね逢はずして止みにけり。若し化人にやありけんと思ひけり。

白河院御寢の時物におそはれさせ給ふ事

これも今は昔、白河院御殿ごもりて後、物におそはれさせ給ひける。しかるべき武具を、御枕の上に置くべきと沙汰ありて、義家朝臣に召されければ、眞弓の黑塗なるを一張參らせたりけるを、御枕に立てられて後、おそはせさせおはしまさどりければ、御感ありて、この弓は十二年の合戰の時や持ちたりしと、御たづねありければ、覺えざるよし申されけり。上皇しきりに御感ありけりとか。

おそはせさせ―おそはれさせの誤か

十二年の合戰―前九年後三年の役

○古事談卷三參照

時非時―正午以前僧の食ふを時といひ、しからざるを非時といふ

公請―官命又は勅命により講論に請ぜらるゝをいふ

なしま―山城綴喜郡梨間(奈島)

永超僧都魚食ふ事

これも今は昔、南の京の永超僧都は、魚なきかぎりは、時非時もすべて喰はざりける人なり。公請つとめて、在京の間久しくなりて、魚を喰はでくづをれて下る間、なしまの丈六堂の邊にて、晝破子喰ふに、弟子一人近邊の在家にて、魚を乞ひてすゝめたりけり。件の魚の主後に夢に見るやう、恐しげなるものども、その邊の在家をしるしけるに、我家をしるしのぞきければ、尋ねぬる所に使のいはく、永超僧都に魚を奉る所なり、さてしるしのぞくといふ。其年この村の在家、悉く疫病をして死ぬるもの多かりけり。この魚の主が家唯一字、その事を免がるゝによりて、僧都の許へ參り向ひてこのよしを申す。

僧都このよしを聞きて、被物一重たびてぞかへされける。

了延房に實因湖水の中より法文の事

これも今は昔、了延房阿闍梨日吉の社へ參りて歸る、唐崎の邊を過ぐるに、有相安樂行、此依觀思といふ文誦したりければ、浪中に散心誦法花、不入禪三昧と、末の句をば誦する聲あり。不思議の思をなして、如何なる人のおはしますぞと問ひければ、奥房僧都實因と名のりければ、汀に居て法文を談じけるに、少々僻事ども答へければ、これは僻事なり、いかにと問ひければ、よく申すところ思ひ候へども、生をへだてぬれば力及ばぬことなり、我なればこそ、このほども申せといひけるとか。

○古事談卷三參照
有相安樂行云々―涅槃法華懺法中の語

慈惠僧正戒壇つきたる事

これも今は昔、慈惠僧正は近江の國淺井郡の人なり。叡山の戒壇を、人夫かなはざりければ、えつかざりけるころ、淺井の郡司は親しき上に、戒壇にて佛事を修する間、この僧正を請じ奉りて、僧膳のれうに、前にて大豆を煎りて酢をかけけるを、何しに酢をばかくるぞと問はれければ、郡司いはく、暖かなる時、酢をかけつれば酢むつかりとて、にがみてよくはさまるゝなり、しからざれば滑りて挾まれぬなりといふ。僧正のいはく、いかなりとも、なじかは挾まぬやうやあるべき、投げやるとも挾み喰ひてんとありければ、いかでさる事あるべきとあらがひけり。僧正勝ち申しなば、こと事あるべからず、戒壇をつきて給へとありければ、易き事とて煎大豆を投げ遣るに、一間ばかり退きて居給ひて、一度も落さず挾まれけり。見るものあざまずといふことなし。柚の實の只今しほり出したるをまぜて、投げて遣りたるをぞ、挾みすべらかし給ひたりけれど、おとしもたてず、又やがて挾み留め給ひける。郡司一家廣きものなれば、人數をおこして、不日に戒壇をつきてけりとぞ。

○古事談卷三參照
僧正―原本「僧都」とあり、活本によりて改む

戒壇―戒を授受する壇場
酢むつかり―酢にあひて豆の怒る意よりいふ
にがみ―皺のよること
こと事―他事
あざまず―驚嘆せず

宇治拾遺物語　巻第五

袖くちべ―袖と袖とをさし合せて袖中にて指を握り價を定むるとりいふにや

天帝釋―帝釋天に同じ

四の宮河原地藏の事

これも今は昔、山科の道づらに、四の宮河原といふ所にて、袖くらべといふ商人集る所あり。その邊の下種のありける、地藏菩薩を一體作り奉りたりけるを、開眼もせで櫃にうち入れて、奥の部屋などおほしき所に納め置きて、世のいとなみに紛れて程經にければ、忘れにけるほどに、三四年ばかり過ぎにけり。或夜夢に大路を過ぐる者の、聲高に人呼ぶ聲のしければ、何事ぞと聞けば、地藏こそと高くこの家の前にていふなれば、奥の方より何事ぞと答ふる聲すなり。明日天帝釋の地藏會し給ふには參らせ給はぬかといへば、この小家のうちより、參らんと思へどまだ目のあかねばえ參るまじくといへば、かまへて參り給へといへば、目も見えねばいかでか參らんといふ聲すなり。うち驚きて

思ひまゐらすに―「思ひまゐらするに」の誤か

見え給ふ―夢に見え給ふ

沈地の机―沈香の木地にて作れる食卓

うつしの鞍―唐鞍を摸して作れる鞍

鞍懸―鞍を懸け置く臺

何のかくは夢に見えつるかと思ひまゐらすに、あやしくて、夜明けて奥の方をよく〳〵見れば、この地藏納めて置き奉りたりけるを、思ひ出して見出したりけり。これが見え給ふにこそと驚き思ひて、急ぎ開眼し奉りけりとなん。

伏見修理大夫の許へ殿上人ども行きむかふ事

これも今は昔、伏見修理大夫の許へ、殿上人二十人ばかり押し寄せたりけるに、俄にさわぎけり。さかなもとりあへず、沈地の机に時の物どもいろ〳〵、たゞ推し量るべし。盃たび〳〵になりて、おの〳〵戯れ出でける。厩に黒馬の額少し白きを、二十匹立てたりけり。うつしの鞍二十具、鞍懸にかけたりけり。殿上人醉ひ亂れて、おの〳〵この馬にうつしの鞍置きて、載せて返しにけり。つとめて、さても昨日いみじくしたるものかなといひて、いざ又押し寄せんといひて、又二十人押し寄せたりければ、このたびはさる體にして、俄なるさまは昨日にかはりて、炭櫃をかざりたりけり。厩を見れば、黒栗毛

なる馬をぞ二十匹まで立てたりける。これも額しろかりけり。大かたかばかりの人はなかりけり。これは宇治殿の御子におはしけり。されど君だち多くおはしましければ、橘俊遠といひて、世の中の徳人ありけり。その子になして、かゝるさまの人にぞなさせ給うたりけるとぞ。

徳人―富める人

以長物忌の事

これも昔、大膳亮大夫橘以長といふ藏人の五位ありけり。宇治左大臣殿より召しありけるに、今明日はかたき物忌を仕る事候ふと申したりければ、こはいかに、世にある者の物忌といふ事はある、慥に参られよと召し嚴しかりければ、恐れながら参りにけり。さるほどに十日ばかりありて、左大臣殿によにしらぬかたき物忌出で來にけり。御門のはざまにかいたてなどして、仁王講行はるゝ僧も、高陽院の方の土戸より童子なども入れずして、僧ばかりぞまゐりける。御物忌ありとこの以長聞きて、急ぎ参りて土戸より

以長―傍訓これながはもちながの誤なるべし、卷八にはもちながとあり
宇治左大臣―頼長
かいたて―書立にて、物忌と札に書きて戸につけ置く也
仁王講―仁王經を講説する法會

参らんとするに、舍人二人居て、人な入れそと候ふとて、立ち向ひたりければ、やうれおれらよ、召されて参るぞといひければ、これらもさすがに職事にて常に見れば、力およばで入れつ。参りて藏人所に居て、何となく聲高に物言ひ居たりたりけるを、左府聞かせ給ひて、この物言ふは誰ぞと問はせ給ひければ、盛兼まうすやう、以長に候ふと申しければ、いかにかばかりかたき物忌には、昨夜より参り籠りたるかと、尋ねよと仰せければ、行きて仰せの旨をいふに、藏人所は御所より近かりけるに、くはくと大聲して憚らず申すやう、過ぎ候ひぬる頃、私に物忌仕りて候ひしに召され候ひき、物忌のよしを申し候ひしを、物忌といふことやはある、慥に参るべきよし仰せ候ひしかば、参り候ひにき、されば物忌といふことは候はぬと、知りて候ふなりと申しければ、聞かせ給ひて、うちうなづき、物も仰せられで止みにけりとぞ。

やうれおれらよ―ヤア汝等よ
職事―藏人

山―獣山

臨終正念―臨終の際平常の志念錯亂せざるをいふ

往生傳に入るとか―續本朝往生傳にこの阿闍梨の傳あり

○十訓抄第七參照

陪從―賀茂春日八幡などの祭日勅使に連れて舞人樂人その社に參りて歌舞あり、舞人は近衛の將曹府生な

範久阿闍梨西方を後にせざる事

これも今は昔、範久阿闍梨といふ僧ありけり。山の楞嚴院に住みけり。偏に極樂を願ふ。行住坐臥西方をうしろにせず、唾大小便西に向はず、入日をせなかに負はず、西坂より山へのぼる時は、身をそばだてて歩む。常にいはく、仆るゝ事必ず傾く方にあり、心を西方にかけんに、何ぞ心ざしを遂げざらん、臨終正念疑はずとなん言ひける。往生傳に入るとか。

陪從家綱兄弟互に謀りたる事

これも今は昔、陪從はさもこそはといひながら、これは世になき程の猿樂なりけり。堀河院の御時、内侍所の御神樂の夜仰せにて、今宵めづらしからん事仕れと仰せありければ、職事家綱を召して、このよし仰せけり。承りて何事をかせましと按じて、弟行綱を片隅

り、その舞人に従ひて琴笛の役を動むるを陪従といふ

ふぐり―陰嚢
庭火―神樂の時禁庭にたく篝火

へ招き寄せて、かゝる仰せ下されたれば、わが按じたる事のあるはいかゞあるべきといひければ、いかやうなる事をせさせ給はんずるぞといふに、家綱がいふやう、庭火しろくきに、ふりちうふぐりをありちうあぶらんといひて、庭火を三回ばかり走り廻らんとおもふ、いかゞあるべきと言ふに、行綱がいはく、さも侍りなん、但しおほやけの御前にて、細脛搔き出してふぐりあぶらんなどさぶらはんは、便なくや候ふべからんと言ひければ、家綱誠にさいはれたり、さらば別事をこそせめ、かしこう申し合せてけりといひける。殿上人など仰せを奉りたれば、今宵いかなる事をせんずらんと、目をすまして待つに、人長家綱めすと召せば、家綱出でて、させる事なきやうにて入りぬれば、上よりもその事となきやうに思召すほどに、人長また進みて、行綱召すと召す時、行綱誠にさむけなる氣色をして、膝を股まで搔き上げて、細脛を出して、わなゝき寒げなる聲にて、よりによりに夜の更けて、さりに〳〵寒きに、ふりちうふぐりをありちうあぶらんといひて、

仰せを奉り―仰せを承りの誤か

人長―神樂の舞人陪従等の長

この事さのみぞある―彼の件はあれだけの事也
還立―祭典より還りて更に宮中にて神樂を催さるゝ事をいふ
竹の臺―清涼殿の前なる呉竹の臺
竹豹―飾抄に「尻鞘事、舞人之時竹豹皮不憚之云々」とあり、尻鞘より思ひつきし戯にや
家綱ことにもあちず云々―十訓抄には、「家綱面白かりなん手のかぎりはやさ

庭火を十回ばかり走り廻りたるに、上より下ざまに至るまで、大方どよみたりけり。家綱片隅に隠れて、きやつに悲しう謀られぬるこそとて中たがひて、目も見合はせずして過ぐる程に、家綱思ひけるは、謀られたるはにくけれど、さてのみ止むべきにあらずと思ひて、行綱にいふやう、この事さのみぞある、さりとて兄弟の中たがひはつべきにあらずといひければ、行綱喜びて行きむつびけり。賀茂の臨時の祭の還立に御神樂のあるに、行綱家綱にいふやう、人長めしたてん時、竹の臺のもとによりてそゝめかんずるに、あれはなんするものぞと囃い給へ、その時竹豹ぞ〳〵といひて、豹のまねを盡さんといひければ、家綱ことにもあらずて、のきゐ囃さんとこゝろうけしつ。さて人長立ち進みて、行綱めすといふ時に、行綱やをら立ちて、竹の臺のもとによりて、匐ひ歩きて、あれは何するぞやといはゞ、それにつきて、竹豹といはんと待つ程に、家綱、かれはなんぞのちくへうぞと問ひければ、只今いはんと思ふ竹豹をさきにいはれければ、言ふべきことなくて、ふと逃げて走り入りにけり。この事上まで聞召して、なか〳〵ゆゝしき

興にてありけるとかや。さきに行綱に謀られたるあたりとぞいひける。

ん」とあり「てのきゐ」は「てのかぎり」の誤かあたり―返報

陪從清仲の事

これも今は昔、二條の大宮と申しけるは、白河院の宮鳥羽院御母代におはしましける。二條の大宮とぞ申しける。二條よりは北、堀川よりは東におはしましけり。その御所破れにければ、有賢大藏卿、備後の國をしられける重任の功に修理しければ、宮も外へおはしましにけり。それに陪從清仲といふもの常にさぶらひけるが、宮おはしまさねども、猶御車やどりの妻戸に居て、古きものはいはじ、新しうしたるつか柱、立蔀などをさへ破りたきけり。この事を有賢、鳥羽院に訴へ申しければ、清仲を召して、宮渡らせおはしまさぬになほとまり居て、古物新物、毀ちたくなるはいかなることぞ、修理する者訴へ申すなり、宮しもおはしまさぬに、猶籠り居たるは何事によりてさぶらふぞ、子細を申せと仰せられければ、清仲申すやう、別の事に候はず、薪につきて候ふなりと申しけれ

二條の大宮―令子、白河帝の皇女

母代―母になりて後見する人をいふ

重任の功―國司重任として任期はてたる後再びその守となる時には相當なる資金を獻ずることなるが、その金をもて官門等を修翌するが例なり、これを功といふ

つか柱―梁と棟との間又は榱側の下などに立つる短き柱

ば、大方これほどの事、とかく仰せらるゝに及ばず、速に追ひ出せとて、笑はせおはしましけるとかや。この清仲は、法性寺殿の御時、春日の祭の乘尻に立ちけるに、神馬使おの〳〵さはりありて、事缺けたりけるに、清仲はかりかう勤めたりし者なれども、事かけにたり。あひかまへてつとめよ、せめて京ばかりをまれ、事なきさまに計らひ勤めよと仰せられけるに、畏まりて承りぬと申して、やがて社頭に參りたりければ、返すゞ感じ思召す。いみじう勤めて候ふとて、御馬を賜ひたりければ、伏し轉び喜びて、この定に候はど、定使を仕り候はどやと申しけるを、仰せつくものも候ひあふものどもも、ゐつほに入りて笑ひ罵りけるを、何事ぞとたづねありければ、云々と申しけるに、いみじう申したりとぞ仰事ありける。

春日の祭云々―春日の祭に神馬と共に走馬を奉納する例あり、その走馬に乘る者を乘尻といふ

清仲はかりかう―誤脱あるべし

假字暦あつらへたる事

これも今は昔、ある人の許になま女房のありけるが、人に紙乞ひて、そこなりける若き

僧に、假字暦書きてたべといひければ、僧易き事といひて書きたりけり。初つ方はうるはしく、かみほとけによし、かん日くゑ日など書きたりけるが、やう〳〵末ざまになりて、あるひは物喰はぬ日などかき、又これぞあればよく喰ふ日など書きたり。この女房やうがる暦かなとは思へども、いとかうほどには思ひよらず、さる事にこそと思ひてそのまゝに違へず。又あるひははこすべからずと書きたれば、いかにとは思へども、さこそあらめと、念じて過すほどに、ながくゑ日のやうにはこすべからず〳〵と續き書きたれば、二日三日までは念じ居たるほどに、大かた堪ゆべきやうもなければ、左右の手にてしりをかゝへて、いかにせん〳〵と、よぢりすぢりする程に、物も覺えずしてありけるとか。

假字暦―かなにて書ける暦

かん日、くゑ日―坎日凶會日にて、坎日は外出を凶とし、凶會日は萬事に凶なりといふ日

これぞあれば―品物あれば

やうがる　樣あるにて、一風變りたる意

はこ―大便

ながくゑ日―長く續く凶會日

よぢりすぢり―展轉煩悶すること

實子にあらざる人實子のよしたる事

これも今は昔、その人の一定子とも聞えぬ人ありけり。世の人はそのよしを知りて、を

○此話狂言二千石に似通へる所あり

一定―たしかに

こがましく思ひけり。その父と聞ゆる人亡せにける後、その人の許に年比ありける侍の、妻に具して田舍へ往にけり。その妻うせにければ、すべきやうもなくなりて京へ上りにけり。萬あるべきやうもなく便なかりけるに、この子といふ人こそ一定のよしいひて、親の家に居たなれと聞きて、この侍まゐりたりけり。故殿に年比候ひし某と申す者こそ參りて候へ、御見參に入りたかり候ふといへば、この子さる事ありとおほゆ、暫しさぶらへ御對面あらんずるぞといひ出したりければ、侍しおほせつと思ひて、ねぶり居たる程に、近う召し使ふ侍出で來て、御出居へ參らせ給へといひければ、喜びて參りにけり。この召しつぎしつる侍、暫し候はせ給へといひて、あなたへ行きぬ。見まはせば、御出居のさま、故殿のおはしましゝしつらひにつゆかはらず、御障子などは少しふりたるほどにやと見る程に、中の障子引きあくればきと見あげたるに、此子と名乘る人歩み出でたり。これをうち見るまゝに、此年比の侍さくりもよゝと泣く、袖もしぼりあへぬほどなり。このあるじ、いかにかくは泣くらんと思ひて、つい居て、こはなどかく泣くぞ

出居―客間

さくりもよゝと泣く―さくりあげて泣く

と問ひければ、故殿のおはしましに違はせおはしまさぬが哀に覺えてといふ。さればこそ我も故殿には違はぬやうに覺ゆるを、この人々のあらぬなど云ふなる、あさましき事と思ひて、この泣く侍にいふやう、おのれこそ殊の外に老いにけれ、世の中はいかやうにて過ぐるぞ、我はまだ幼くて母の許にこそありしかば、故殿のありやう能くも覺えぬなり、おのれをこそ故殿と頼みてあるべかりけれ、何事も申せ、又偏に頼みてあらんずるぞ、まづ當時寒げなり、この衣著よとて、綿ふくよかなるきぬ一つ脱ぎて賜びて、今はさうなし、これへ參るべきなりといふ。この侍しおほせて居たり。昨日今日のもののかく言はんだにあり、いはんや故殿の年比のもののかくいへば、家主笑みて、この男の年比すぢなくてありけん、不便のことなりとて、後見に召し出でて、これは故殿のいとほしくし給ひしものなり、まづかく京に旅立ちたるにこそ思ひはからひて、沙汰しやれといへば、ひげなるこゑにてむと答へて立ちぬ。この侍は、虚言せじといふをぞ佛に申し切りてける。さてこのあるじ、我を不定げにいふなる人々呼びて、この侍に、事の子細

綿ふくよかなるきぬ―綿の一杯入りたる厚き衣服
今はさうなし―もはや仔細なし
後見に―「に」は「を」の誤なるべし
ひげなる―「ひくげなる」の誤か

いはせて聞かせんとて、後見めし出でて、明後日これへ人々渡らんと言はるゝに、さるやうに引きつくろひて、もてなしすさまじからぬやうにせよと言ひければ、むと申して樣々に沙汰し設けたり。この得意の人々、四五人ばかり來集りにけり。あるじ常よりも引きつくろひて、出で合ひて、御酒度々參りて後言ふやう、我親の許に、年比生ひ立ちたる者候ふをや、御覽ずべからんといへば、この集りたる人々、心地よげに顔先赤め合ひて、もとも召し出さるべく候ふ、故殿に候ひけるも、かつは哀に候ふといへば、人やある、何がしまるれといへば、ひとり立ちて召すなり。見れば鬚はげたる男の六十餘ばかりなるが、まみのほどなど虚言すべうもなきが、打ちたる白き狩衣に、練色の衣のさるほどなる著たり、これは賜はりたる衣と覺ゆる、召し出されて、事うるはしく、扇を笏に取りてうづくまり居たり。家主のいふ、やうやくこゝの父のそのかみより、おのれは生ひたちたるものぞかしなどいへば、むといふ。見えにたるかいかにといへば、この侍いふやう、その事に候ふ、故殿には十三より參りて候ふ、五十まで夜晝離れまるらせ候はず、故殿

得意の人々―心やすき知人
もとも―至極よし
鬚はげ―「鬚はげ」又は「鬚はえ」の誤なるべし
練色―連黄色
事うるはしく―端然と
見えにたるか―故殿に親しく仕へたるか

無下に候ひし時―病重かりし時
大壺―便器

の小冠者〳〵と召しさぶらひき、無下に候ひし時も、御跡に臥せさせおはしまして、夜中暁、大壺参らせなど候ひしその時は、侘しう堪へ難く覺え候ひしが、後れ参らせて後は、などさ覺え候ひけんと、悔しうさぶらふなりといふ。あるじのいふやう、そも〳〵一日汝を呼び入れたりし折、我障子を引きあけて出でたりし折　うち見上げてほろ〳〵と泣きしは、いかなりし事ぞといふ。その時侍がいふやう、それも別の事に候はず、田舎にさぶらひて、故殿うせ給ひにきと承りて、今一度参りて、御有樣をだにも拜み候はんと思ひて、おそれ〳〵参り候ひし、さうなく御出居へ召し出させおはしまして候ひし、大方辱く候ひしに　御障子を引き開けさせ給ひ候ひしを、きと見上げ参らせて候ひしに、御烏帽子の眞黑にて、まづさし出でさせおはしまして候ひしが、故殿のかくの如く出させおはしましたりしも、御烏帽子は眞黑に見えさせおはしましょが、思ひ出でられおはしまして、覺えず涙のこぼれ候ひしなりといふに、この集りたる人々も笑を含みたり。又このあるじも氣色かはりて、さて又いづくか故殿には似たるといひければ、この侍その外は、大かた似させおはしましたる所おはしまさずと言ひければ、人々ほゝゑみて、一人二人づつこそ逃げ失せにけれ。

逃げ失せにけれ―原本「逃げわちひにげれ」とあり、活本により改む

御室戸僧正の事並一乘僧正の事

經輔―隆家の子

これも今は昔、一乘寺僧正、御室戸僧正とて、三井の門流にやんごとなき人おはしけり。御室戸の僧正は、隆家帥の第四の子なり。一乘寺僧正は、經輔大納言の第五の子なり。御室戸をば隆明といふ、一乘寺をば增譽といふ。この二人おの〳〵尊くて生佛なり。御室戸はふとりて修行するにおよばず、偏に本尊の御前を離れずして、夜晝行ふ鈴の音絶ゆる時なかりけり。おのづから人の行き向ひたれば、門をば常に鎖したる、門を叩く時、たま〳〵人の出で來て誰ぞと問ふ、云々の人の参らせ給ひたり、もしは院の御使にさぶらふなどいへば、申しさぶらはんとて、奥へ入りて、むごにある程鈴の音しきりなり。さてとばかりありて、門の關木をはづして、扉片つ方を人ひとり入るほどあけた

むご―無期の字音

明障子―今いふ障子のこと

り。見入るれば庭には草繁くして、道踏みあけたる跡もなし。露を分けて入りて上りたれば廣廂一間あり、妻戸に明障子立てたり。煤け通りたる事、いつの世に張りたりとも見えず。暫しばかりありて、墨染著たる僧足音もせで出で來て、暫しそれにおはしませ、行ひのほどに候ふといへば、待ち居たる程に、とばかりありて、内よりそれへ入らせ給へとあれば、煤けたる障子を引き開けたるに香の煙くゆり出でたり。萎え通りたる衣に、袈裟なども所々破れたり。物も言はで居られたれば、此人も如何にと思ひて向ひ居たるほどに、拱きて少しうつぶしたるやうにて居られたり。暫しあるほどに、行ひのほど能くなり候ひぬ、さらば疾く歸らせ給へとあれば、言ふべき事もいはで出でぬれば、又門やがて鎖しつ。これは偏に居おこなひの人なり。一乘寺の僧正は、大峯は二度通られたり。蛇を見る法行はる、又龍の駒などを見などして、あられぬ有樣をして行ひたる人なり。その坊は、一二町ばかりよりひしめきて、田樂猿樂などひしめき、隨身衞府の男どもなど出で入りひしめく。物賣ども入り來て、鞍太刀さまざまの物を賣るを、かれが

見つきしたりける―見そめたりと也

さきざきの云々―誤脫あるにや解し難し

この僧―活本に此三字なし

納殿―納戸の如き所

さうぞきて―裝束して

かぶとして―田樂師のかぶる烏兜の類をつけて

いふまゝに價を賜びければ、市をなしてぞ集ひける。さてこの僧正の許に、世の寶は集ひあつまりたりけり。それに呪師小院といふ童を愛せられけり。烏羽の田植に見つきしたりける、さきざきいくひにのりつゝ、みつきをしける男の、田植に僧正言ひ合せて、このごろするやうにあふきにたちまして、こはゝより出でたりければ、大方見る者も驚きざしあひたりけり。この童あまりに寵愛して、よしなし法師になりて、夜晝離れず附きてあれとありけるを、童いかゞ候ふべからん、今暫しかくて候はゞやと言ひけるを、僧正猶いとほしさに、たゞなれとありければ、童しぶしぶに法師になりにけり。さて過ぐる程に、春雨うちそゝぎて徒然なりけるに、僧正人を呼びて、あの僧の裝束はあるかと問はれければ、この僧、納殿にいまだ候ふと申しければ、取りて來といはれけり。持て來たりけるを、これを著よといはれければ、呪師小院見苦しう候ひなんといなみけるを、唯著よと責めの給ひければ、片方へ行きてさうぞきて、かぶとして出でたりけり。つゆ昔に變らず、僧正うち見てかひを作られけり。小院又おもがはりして立てりけるに、

かひを作られけり―泣顔すること
はしりて―田樂の曲の名なるべし
かたさらは―同上
せうのなか云々―不明

氷魚―白魚のごときもの
ようのこと―用事

僧正いまだはしりて御覺ゆやとありければ、覺えさぶらはず、但しかたさらはの調ぞ、よくしつけて來しことなれば、少し覺え候ふといひて、せうのなかわりてとほる程を走りてとぶ、かぶと持ちて一拍子に渡りたりけるに、僧正聲を放ちて泣かれけり。さてこちこよと呼び寄せて、うち撫でつゝ、何しに出家をさせけんとて泣かれければ、小院もさればこそ、今暫しと申し候ひしものをといひて、裝束ぬがせて、障子の内へ具して入られにけり。その後は、いかなる事かありけん知らず。

或僧人の許にて氷魚ぬすみくひする事

これも今は昔、ある僧人の許へ往きけり。酒など進めけるに、氷魚始めて出で來たりければ、主人めづらしく思ひてもてなしけり。主人ようのことありて内へ入りて、又出でたりけるに、この氷魚の殊の外に少くなりたりければ、主人いかにと思へども、いふべきやうもなかりければ、物語しゐたりけるほどに、この僧の鼻より、氷魚の一つふと出

でたりければ、主人怪しうおぼえて、その鼻より氷魚の出でたるは、いかなる事にかと言ひければ、とりあへず、此頃の氷魚は目鼻より降り候ふなるぞと言ひたりければ、人皆はとわらひけり。

仲胤僧都地主權現說法の事

これも今は昔、仲胤僧都を、山の大衆日吉の二宮にて、法華經を供養しける導師に、請じたりけり。說法えもいはずして、はてがたに地主權現の申せと候ふはとも、此經難持、若誓持者、我卽歡喜、諸佛亦然といふ文を、うちあげて誦して、諸佛といふ處を地主權現の申せとは、我卽歡喜、諸神亦然といひたりければ、そこら集りたる大衆異口同音にあめきて、扇を開きつかひたりげり。これを或人、日吉の社の御正體を顯はし奉りて、おのおの御前にて千日の講を行ひけるに、二宮の御料のをり、或僧、この句を少しも違へずしたりける。ある人仲胤僧都に、かゝる事こそありしかと語りければ、仲胤僧都きやらきやらと笑ひて、これはかう〳〵の時、仲胤がしたりし句なり。えい〳〵と笑ひて、大方は此頃の說經をば、犬の糞說經といふぞ、犬は人の糞を喰ひて糞をするなり、仲胤が說法を取りて、此頃の說經師はすれば、犬の糞說經といふなりといひける。

二宮―傳敎大師大物主神を山上に移し祭りて日吉大宮といひ、前よりありし本社を一宮といふ、地主權現はこの二宮なりはてがた―終り頃
此經難持云々―法華經見寶塔品の偈文
あめき―うめき

大二條殿に小式部內侍歌よみかけ奉る事

これも今は昔、大二條殿、小式部內侍おぼしけるが、絕間がちになりける頃、例ならぬ事おはしまして、久しうなりてよろしくなり給ひて、上東門院へ參らせ給ひたるに、小式部臺盤所に居たりけるに、出でさせ給ふとて死なんとせしは、など問はざりしぞと、仰せられて過ぎ給ひけるに、御直衣の裾を引き留めつゝ申しけり。

死ぬばかり歎きにこそは歎きしかいきて問ふべき身にしあらねば

堪へずおぼしけるにや、かきいだきて、局へおはしまして、寢させたまひにけり。

○袋草紙卷三參照
大二條殿―敎通
上東門院―彰子
死ぬばかり云々―此歌後拾遺にいグ

山横川賀能地藏の事

これも今は昔、山の横川に賀能知院といふ僧、極めて破戒無慙の者にて、晝夜に佛の物を取りつかふ事をのみしけり。横川の執行にてありけり。政所へ行くとて、塔のもとを常に過ぎありきければ、塔のもとに、ふるき地藏の物の中に棄て置きたるを、きと見奉りて、時々きぬかぶりしたるをうちぬぎ頭を傾けて、少しく敬ひ拜みつゝ行く時もありけり。かゝるほどに、かの賀能はかなく失せぬ。師の僧都これを聞きて、かの僧破戒無慙の者にて、後世定めて地獄に落ちん事疑なしと、心憂がり哀み給ふ事限なし。かゝるほどに、塔のもとの地藏こそこの程見え給はね、いかなる事にかと、院内の人々言ひ合ひたり。人の修理し奉らんとて、取り奉りたるにやなどいひける程に、この僧都の夢に見え給ふやう、この地藏の見え給はぬは、如何なる事ぞと尋ね給ふに、傍に僧ありていはく、この地藏菩薩、早う賀能知院が無間地獄に落ちしその日、やがて助けんとて、あひ

執行―事務を執る役
政所―莊園の貢米等を沙汰する役所
きぬかぶり―衣被なり、一體は女のなすべきものなれど僧家にも用ゐるなり
無間地獄―八大地獄の隨一にして極重罪業の者こゝに墮つ、阿鼻地獄ともいふ

具して入り給ひしなりといふ。夢心地にいとあさましくて、いかにして、さる罪人には具して入り給ひたるぞと問ひ給へば、塔のもとを常に過ぐるに、地藏を見やり申して、時々拜み奉りし故なりと答ふ。夢覺めて後、自ら塔のもとへおはして見給ふに、地藏誠に見え給はず。さはこの僧に、誠に具しておはしたるにやと思す程に、その後又僧都の夢に見給ふやう、塔のもとにおはして見給へば、この地藏立ち給ひたり。これは失せさせ給ひし地藏の、如何にして出で來給ひたるぞとの給へば、又人のいふやう、賀能具して地獄へ入りて、助けて還り給へるなり、されば御足の燒け給へるなりといふ。御足を見給へば、誠に御足黑う燒け給ひたり。夢心地に誠にあさましき事限なし。さて夢覺めて、涙留らずして、急ぎおはして塔のもとを見給へば、現にも地藏立ち給へり、御足を見れば誠に燒け給へり。これを見給ふに、哀に悲しき事かぎりなし。さて泣く〳〵、この地藏を抱き出し奉り給ひてけり、今におはします。二尺五寸ばかりの程にこそと人はかたりし、これ語りける人は拜み奉りけるとぞ。

宇治拾遺物語　巻第六

廣貴妻の訴に依りて閻魔王宮へめさるゝ事

○日本靈異記巻下參照

これも今は昔、藤原廣貴といふ者ありけるに、死にて閻魔の廳に召されて、王の御前と思しき所に參りたるに、王の給ふやう、汝が子を孕みて產をしそこなひたる女死にたり、地獄に落ちて苦みを受くるに、うれへ申す事のあるによりて、汝をば召したるなり、まづさる事あるかと問はるれば、廣貴さる事さぶらひきと申す。王の給はく、妻のうれへ申す心は、われ男に具して共に罪をつくりて、しかもかれが子を產みそこなひて、死して地獄に落ちて、かゝる堪へ難き苦みを受け候へども、聊も我後世をも弔ひさぶらはず、されば我一人苦みを受けさぶらふべきやうなし、廣貴をも諸共に召して、同じやうにこそ苦みを受けさぶらはめと、申すによりて召したるなりとの給へば、廣貴が申すやう、この

うれへ―訴へ

訴訟申す事尤も道理に候ふ、公私世をいとなみ候ふ間、思ひながら後世をば弔ひ候はで、月日はかなく過ぎ候ふなり、但し今におき候ひては、共に召されて苦みを受け候ふとも、彼がために苦みの助かるべきに候はず、さればこの度は暇を賜はりて、娑婆に罷りかへりて、妻のために萬を捨てて、佛經を書き供養して弔ひ候はんと申せば、王暫しさぶらへとのたまひて、かれが妻を召し寄せて、汝が夫廣貴が申すやうを問ひ給へば、實に經佛をだに書き供養せんと申し候はゞ、疾く免し給へと申す時に、又廣貴を召し出でて、申すまゝの事を仰せ聞かせて、さらば此度は罷りかへれ、慥に妻のために佛經を書き供養して弔ふべきなりとて歸し遣はす。廣貴かゝれども、これはいづく誰がのたまふぞとも知らず、免されて座を立ちて歸る道にて思ふやう、この玉の簾の内に居させ給ひて、かやうに物の沙汰して、我をかへさるゝ人は誰にかおはしますらんと、いみじく覺束なく覺えければ、又參りて庭に居たれば、簾のうちより、あの廣貴は歸し遣はしたるにあらずや、如何にして又參りたるぞと問はるれば、廣貴が申すやう、はからざるに御

汝が夫―「汝が」の二字一本なし

廣貴が申すやうを問ひ給へば―廣貴が申すやうを語りて妻に問ひ給へば

恩を蒙りて、歸り難き本國へ還り候ふ事を、いかにおはします人の仰せとも、え知り候はで罷り候はんことの、極めていぶせく口惜しく候へば、恐れながらこれを承りに、又參りて候ふなりと申せば、汝不覺なり、閻浮提（えんぶだい）にしては、我を地藏菩薩と稱すとの給ふを聞きて、さは閻魔王と申すは地藏にこそおはしけれ、この菩薩に仕うまつり候ふが、地獄の苦みをば免がるべきにこそあんめれと思ふ程に、三日といふに生きかへりて、その後妻のために佛經を書き供養してけりとぞ日本法華驗記に見えたるとなん。

閻浮提―南贍部洲即ち吾人の住む世界

世尊寺に死人を掘りいだす事

今は昔、世尊寺といふ所は、桃園大納言住み給ひけるが、大將になる宣旨かうぶり給ひにければ、大饗のあるじの料（れう）に修理し、まづは祝し給ひしほどに、明後日（あさて）とて俄に失せ給ひぬ。つかはれ人皆出で散りて、北の方、若君ばかりなんすごくて住み給ひける。その若君は、主殿（とのもり）のかみちかみつと云ひしなり。この家を一條攝政殿取り給ひて、太政大

桃園大納言―忠平の男師氏

一條攝政殿―伊尹

したうづ―襪

臣になりて、大饗行はれける、坤の角に塚のありける、築地を築き出して、その角はしたうづがたにぞありける。殿そこに堂を建てん、この塚を取り捨てて、その上に堂を建てんと定められぬれば、人々も塚のために、いみじう功徳になりぬべき事なりと申しければ、塚を掘り崩すに、中に石の唐櫃あり。開けて見れば、尼の年二十五六ばかりなる色美しくて、脣の色などつゆ變らで、えもいはず美しげなる、寢入りたるやうにて臥したり。いみじう美しき衣の、金の坏麗しくて据ゑたりけり。入りたるもの何も香しき事たぐひなし。あさましがりて、人々立ちこみて見るほどに、乾の方より風吹きければ、いろいろなる塵になんなりて失せにけり。金の坏より外の物つゆとまらず。いみじき昔の人なりとも、骨髪の散るべきにあらず。かく風の吹くに、塵になりて吹き散らされぬるは、希有のものなりといひて、そのころ人あさましがりける。攝政殿いくばくもなくて失せ給ひにければ、この祟にやと人うたがひけり。

○今昔三、盧至長者語參照

たのもしき―富裕なるをいふ

心のくちをしく―吝嗇なるをいふ

行器―食物を入れて持ち運ぶに用ふる圓き器

今曠野中云々―今昔には「我今箭屢會、縱酒大歡樂、逢遇毘沙門、亦勝天帝釋」とあり

留志長者の事

今は昔、天竺に留志長者とて、世にたのもしき長者ありけり。大かた藏もいくらともなく持ちたのもしきが、心のくちをしくて、妻子にもまして、從者にも物喰はせ著する事なし。おのれ物のほしければ、人にも見せず隱して喰ふほどに、物の飽かず多くほしかりければ、妻にいふやう、飯酒菓物どもなど大らかにしてたべ、我につきて物をしまする慳貪の神祭らんといへば、物惜む心失はんとする、善き事と喜びて、いろ〳〵に調じて、大らかに取らせければ、受け取りて、人も見ざらん所に行きて、よく喰はんと思ひて行器に入れ、ひさごに酒入れなどして持て出でぬ。此木のもとには烏あり、彼所には雀ありなどえりて、人離れたる山の中の木の蔭に、鳥獸もなき所にて一人喰ひ居たり。心の樂しさ物にも似ずして誦ずるやう、今曠野中、食飯飲酒大安樂、猶過毘沙門天、勝天帝釋天、この心は今日人なき所にひとり居て、物を喰ひ酒を飲む安樂なる事、毘沙門帝釋に

も優りたりといひけるを、帝釋きと御覽じてけり。憎しと思しけるにや、留志長者が形に化し給ひて、かの家におはしまして、我山にて物惜む神を祭りたるしるしにや、その神はなれて、物の惜しからねばかくするぞとて、藏どもを開けさせて、妻子をはじめて、從者もそれならぬよその人々も、修行者乞食に至るまで、寶物どもを取り出してくばり取らせければ、皆々喜びて分け取りける程にぞ、實の長者はかへりたる。藏ども皆開けて、かく寶ども皆人の取り合ひたる、あさましく悲しさ言はんかたなし。如何にかくはするぞと、罵れども、我と唯同じかたちの人出で來てかくすれば、不思議なる事限なし。あれは變化のものぞ、我こそそれよといへども聞き入るゝ人なし。御門にうれへ申せば、母に問へと仰せあれば、母に問ふに、人に物くるゝこそ我子にて候はめと申せば、するかたなし。腰のほどに、はゝくそといふ物の跡ぞさぶらひし、それをしるしに御覽ぜよといふに、開けて見れば、帝釋それを學ばせ給はざらんやは、二人ながら同じやうに物の跡あれば、力なくて佛の御許に二人ながら參りたれば、その時帝釋もとの姿になりて、

はゝくそ―黒子（ホクロ）

須陀洹果―譯して預流果といふ、見惑を斷じて初めて聖者の流類に入るをいふ

御前におはしませば、論じ申すべきかたなしと思ふほどに、佛の御力にて、やがて須陀洹果を成じたれば、惡しき心離れたれば、物をしむ心も失せぬ。かやうに帝釋は、人を導かせ給ふ事はかりなし。そゞろに長者が財を失はんとは、何しに思召さん、慳貪の業によりて、地獄に落つべきを哀ませ給ふ御志によりて、かくかまへさせ給ひけるこそめたでけれ。

○今昔十六、清水二千度詣男打入雙六語參照

清水寺に二千度參詣の者雙六にうち入るゝ事

今は昔、人の許に宮仕してある生侍ありけり。する事のなきまゝに、清水へ人まねして、千度詣を二度したりけり。その後いくばくもなくして、主の許にありける同じやうなる侍と雙六打ちけるが、多く負けて渡すべき物なかりけるに、いたく責めければ、思ひ侘びて我持ちたるものなし、只今貯へたる物とては、清水に二千度參りたる事のみなんある、それを渡さんといひければ、傍にて聞く人は、はかるなりと愚戯に思ひて笑ひける

を、この勝ちたる侍、いと善きことなり、渡さば得んといひて、いなかくては受け取らじ精進三日してこのよし申して、おのれ渡すよしの文書きて渡さばこそ、受取らめといひければ、善き事なりと契りて、その日より精進して、三日といひける日、さはいざ清水へといひければ、この負侍、この痴者に逢ひたるとをかしく思ひて、喜びてつれて參りにけり。いふまゝに文かきて、御前にて師の僧呼びて、事のよし申させて、二千度參りつる事某に雙六にうちいれつと書きて取らせければ、受け取りつゝ喜びて、伏し拜み罷り出でにけり。その後幾程なくして、この負侍思ひかけぬ事にて捕へられて囚獄に居にけり。取りたる侍は、思ひかけぬ便ある妻まうけて、いとよく德つきて司など成りて、たのもしくてぞありける。目に見えぬものなれど、誠の心をいたして受け取りければ、佛あはれと思し召したりけるなんめりとぞ人はいひける。

雙六にうちいれつ―雙六の賭物として與へたるをいふ

○今昔十六、陸奥國鷹取男依觀

觀音經蛇に化して人を助けたまふ事

今は昔、鷹を役にて過ぐる者ありけり。鷹の離れたるを取らんとて、飛ぶに從ひて行きける程に、遙なる山の奥の谷の片岸に、高き木のあるに、鷹の巣くひたるを見つけて、いみじき事見おきたりと嬉しく思ひて、かへりて後、今はよき程になりぬらんと覺ゆる程に、子をおろさんとて又行きて見るに、えもいはぬ深山の、深き谷の底ひもしらぬうへに、いみじく高き榎木の枝は、谷にさしおほひたるが上に、巣をくひて子をうみたり、鷹巣のめぐりにしありく。見るに、えもいはずめでたき鷹にてあれば、子も善かるらんと思ひて、萬も知らずのぼるに、やうゝ今巣のもとに昇らんとするほどに、ふまへたる枝折れて谷に落ちいりぬ。谷の片岸にさし出でたる木の枝に落ちかゝりて、其木の枝をとらへてありければ、生きたる心地もせず、すべきかたなし。見おろせば底ひも知らず深き谷なり、見上ぐれば遙に高き峯なり、かきのぼるべき方もなし。從者どもは谷に落ち入りぬれば、疑なく死ぬらんと思ふ。さるにても、いかゞあると見んと思ひて、岸の端へ寄りて、わりなく爪立てて見おろしけれど、僅に見おろせば、底ひも知らぬ谷の底

香助存命語參照

子をおろさん―鷹の子を巣よりとりおろさん

萬も知らず―萬事を忘れて

に、木の葉繁く隔てたる下なれば、更に見ゆべきやうもなし。目くるめき悲しければ、暫しも え見ず。すべき方なければ、さりとてあるべきならねば、皆家に歸りてかう〳〵といへば、妻子ども泣き惑へどもかひなし。あはぬまでも見に行かまほしけれど、更に道もおぼえず。又おはしたりとも、底ひも知らぬ谷にて、さばかりのぞき萬に見しかども、見え給はざりきといへば、誠にさぞあるらんと、人々も言へばいかずなりぬ。さて谷にはすべき方なくて、石のそばの折敷の廣さにて、さし出でたるかたそばに尻をかけて、木の枝を捕へて、少しもみじろくべきかたなし。いさゝかもはたらかば、谷に落ち入りぬべし。いかにも〳〵せんかたなし。かく鷹飼を役にて世過ぐせど、幼くより觀音經を讀み奉り保ちたりければ、助け給へと思ひ入りて、偏に頼み奉りて、この經を夜晝いくらともなく讀み奉る。弘誓深如海とあるわたりを讀む程に、谷の底の方より、物のそよ〳〵と來る心地のすれば、何にかあらんと思ひてやをら見れば、えもいはず大なる蛇なりけり。長さ二丈ばかりもあるらんと見ゆるが、さしにさして匐ひ來れば、我はこの蛇に喰

石のそば―石の角
かたそば―かたはし
みじろく―動く
弘誓深如海―觀音經偈文に「汝聽音行、善應諸方所、弘誓深如海、歷劫不思議」

はれなんずるなめり、悲しきわざかな、觀音助け給へとこそ思ひつれ、こはいかにしつることぞと思ひて、念じ入りてあるほどに、唯來に來てわが膝の許をすぐれど、我を呑まんと更にせず、唯谷より上ざまへのぼらんとする氣色なれば、いかゞせん、唯これに取りつきたらば、のぼりなんかしと思ふ心つきて、腰の刀をやはら抜きて、この蛇の背中に突き立てて、それにすがりて、蛇の行くまゝに引かれて行けば、谷より峯の上ざまに、こそ〳〵と登りぬ。その折この男離れてのくに、刀を取らんとすれど、強く突き立てければ、え抜かぬ程にひきはづして、背に刀さしながら、蛇はこそろと渡りて　向ひの谷にわたりぬ。この男嬉しと思ひて、家へ急ぎて行かんとすれど、この二三日いさゝか身をも働かさず、物も喰はずすごしたれば、影のやうに痩せさらぼひつゝ、かつ〴〵とやう〳〵にして家に行きつきぬ。さて家には、今はいかゞせんとて、跡弔ふべき經佛のいとなみなどしけるに、かく思ひかけずよろぼひ來たれば、驚き泣き騒ぐ事限なし。かう〳〵の事と語りて、觀音の御たすけにてかく生きたるぞと、あさましかりつる事ども泣く〳〵

かつ〴〵―辛うじて